

Reference Testaments

索引

明治二十

国会

29.7.22

圖書館

新約全書

耶穌降生八百七十年

米國聖書會社

日本橫濱印行

336833

193.5 25

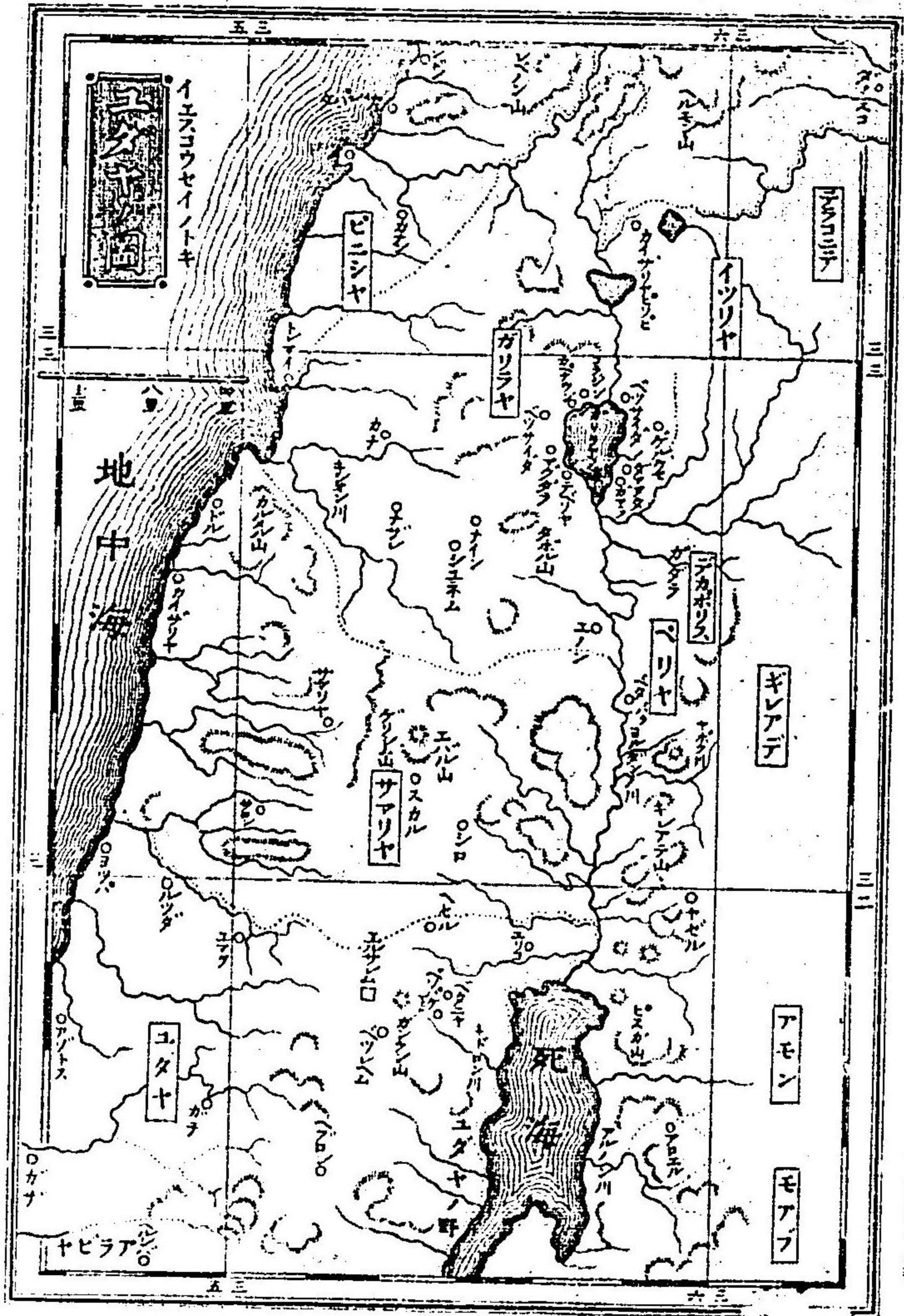
| | | | | | | |
|----------|----------|-----------|--------------|-----------|-----------------|--------|
| 哀 哀歌 | 詩 詩篇 | 代上 略上書 | 士 士師記 | 創 創世記 | 書中略語記號ヲ用ユルノ左ノ如シ | 凡 例 |
| 結 以西結 | 箴 箴言 | 代下 略下書 | 得 路得記 | 出 出埃及 | | |
| 但 但以理 | 傳 傳道 | 喇 以上喇 | 母上 撒母耳上 | 利 利未記 | | |
| 何 何西阿 | 歌 雅歌 | 尼 尼希米亞 | 母下 撒母耳下 | 民 民數紀略 | | |
| 耳 約耳 | 賽 以賽亞 | 帖 以上帖 | 王上 列王紀略上書 | 申 申命記 | | |
| 摩 亞摩士 | 耶 耶利米 | 百 約百記 | 王下 列王紀略下書 | 書 約書亞 | | |

| | | | |
|-----------|-------|--------|-------|
| 馬太傳福音書 | 計二十八章 | 達提摩太前書 | 計六章 |
| 馬可傳福音書 | 計十六章 | 達提摩太後書 | 計四章 |
| 路加傳福音書 | 計二十四章 | 達提多書 | 計三章 |
| 約翰傳福音書 | 計二十一章 | 達腓利門書 | 計一章 |
| 使徒行傳 | 計二十八章 | 達希伯來人書 | 計十三章 |
| 達羅馬人書 | 計十六章 | 雅各書 | 計五章 |
| 達哥林多人前書 | 計十六章 | 彼得前書 | 計五章 |
| 達哥林多人後書 | 計十三章 | 彼得後書 | 計三章 |
| 達加拉太人書 | 計十六章 | 約翰第一書 | 計五章 |
| 達以弗所人書 | 計十六章 | 約翰第二書 | 計一章 |
| 達腓立比人書 | 計四章 | 約翰第三書 | 計一章 |
| 達哥羅西人書 | 計四章 | 猶太書 | 計一章 |
| 達帖撒羅尼迦人前書 | 計五章 | 約翰默示錄 | 計二十二章 |
| 達帖撒羅尼迦人後書 | 計三章 | | |

新約全書目錄

| | | | | | | |
|----------------------------------|----------------|-------------------|-----------------|-----------|-----------|-----------|
| 約參 三 約 の 上 の 書 | 來 希伯來 | 撒前 帖撒羅 尼迦前書 | 哥前 哥林多 前書 | 太 馬太福音 | 基 哈基 | 阿 阿巴底亞 |
| 猶 猶太 | 雅 雅各 | 撒後 帖撒羅 尼迦後書 | 哥後 哥林多 後書 | 可 馬可福音 | 亞 撒加利亞 | 拿 約拿 |
| 默 示錄 | 彼前 彼得 前書 | 提前 提摩太 前書 | 加 加拉太 | 路 路加福音 | 馬 馬拉基 | 米 米迦 |
| 以上新約全書 | 彼後 彼得 後書 | 提後 提摩太 後書 | 弗 以弗多 | 約 約翰福音 | 以上舊約全書 | 翁 拿翁 |
| | 約壹 約翰 壹書 | 多 提多 | 腓 腓立比 | 徒 使徒行傳 | | 哈 哈巴谷 |
| | 約貳 約翰 貳書 | 門 腓利門 | 西 哥羅西 | 羅 羅馬 | | 番 西番雅 |

| | | | | | | | |
|------------|------------|-----------|-----------------|-------------------------|------------|------------|------------------------------------|
| 創 創世記の事 | 馬 馬拉基の事 | 太 馬太の事 | 撒前 帖撒羅尼迦前書の事 | イロハの引照志此印(本文の行の左りを見るべし) | ○の上の数字の章の印 | ○の下の数字の節の印 | 至の縦令へ哥前十四〇二至四トアレバ哥林多前書十四章二節ヨリ四節迄ノ事 |
|------------|------------|-----------|-----------------|-------------------------|------------|------------|------------------------------------|



イ 大は二〇四
二五五
三三四
四三三
五二二
六一一
七〇〇
七八九
八七八
九六七
一〇五六
一〇四五
一〇三四
一〇二三
一〇二二
一〇一一
一〇〇〇
九八九
九七八
九六七
九五六
九四五
九三四
九二三
九二二
九一一
九〇〇
八八九
八七八
八六七
八五六
八四五
八三四
八二三
八二二
八一
七〇
六九
六八
六七
六六
六五
六四
六三
六二
六一
六〇
五九
五八
五七
五六
五五
五四
五三
五二
五一
五〇
四九
四八
四七
四六
四五
四四
四三
四二
四一
四〇
三九
三八
三七
三六
三五
三四
三三
三二
三一
三〇
二九
二八
二七
二六
二五
二四
二三
二二
二一
二〇
一九
一八
一七
一六
一五
一四
一三
一二
一一
一〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一

新約全書馬太傳福音書

二 アブラハムの裔あるガビアの裔イエスキリストの系圖

三 ユダマルに由てパレスミザラを生パレスエスロンを生エスロンアラ

ムを生 アラムアミナダブを生アミナダブナアソンを生ナアソンサルモ

ンを生 サルモンラハブに由てホアズを生ホアズルツに由てオベテを生

オベテエツサイを生 エツサイダビテ王を生ダビテ王ウリヤの妻に由て

ソロモンを生 ソロモンレハベアムを生レハベアムアピアを生アピアア

サを生 アサヨサパテを生ヨサパテヨラムを生ヨラムウツズヤを生九ウ

ツズヤヨタムを生ヨタムアカズを生アカズヘセキヤを生ヘセキヤマナ

セを生 マナセアモンを生アモンヨシアを生ヨシアバピロンに徙されたる後

シアエホヤキンと其兄弟を生 バピロンに徙されたる後エホヤキンシア
テルを生 シアテルゼルバベルを生 ゼルバベルアビウデを生アビウデエ

ナ子 路一〇七
 十二
 十一

リアキンを生エリアキンアソルを生 アソルザドクを生ザドクアキムを
 生アキムエリウテを生 エリウテエリアザルを生エリアザルマツタンを
 生マツタンヤコブを生 ヤコブマリアの夫ヨセフを生リ此マリアよりキ
 リストと稱るイエス生れ給ひき 其世系を數ればアブラハムよりダビテ
 に至るまで十四代ダビテよりバビロンに徙さるる時まで十四代バビロン
 に徙されよりキリストまで十四代あり〇 それイエスキリストの生れ給
 ること左の如し其母マリアはヨセフと聘定を爲るのみにて未だ借にあら
 ざりしとき聖靈に感じて孕し其孕たること願ければ 夫ヨセフは
 人 なる故に之を尋しむることを願す密に離縁せんと思へり 斯て此事を思
 念せる時に主の使者かれが夢に現れて曰けるはダビテの裔ヨセフよ爾妻
 マリアを娶ことを懼る勿その孕る所の者は聖靈に由あり かくれ子を生
 ん其名をイエスと名くべし蓋その民を罪より救はんといれば也 凡て此事
 は預言者に託て主の曰たまひし言に 處女はらみて子を生ん其名をイン

マ 路二〇七
 ヲ 路一〇七
 ノ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七

夫イエスはヘロテ王の時エダヤのベツレヘムに生れ給しが其とき
 博士たち東方よりエルサレムに來り 曰けるはエダヤ人の王として生れ
 給る者は何處に在す乎われら東方の方にて其星を見れば彼を拜せん爲に
 來れり 三 ヘロテ王これを聞て痛む又エルサレムの民もみふ然り 凡の祭
 司の長き民の學者を聚てヘロテ問けるはキリストの生るべき處は何所
 ある乎 答けるはエダヤのベツレヘムあり蓋預言者の錄されたる言に
 エダヤの地ベツレヘムに爾はエダヤの郡中にて至小きものに非ず我イス
 ラエルの民を牧ふべき君その中より出んと云ばあり 是に於てヘロテ密
 に博士等を召星の現れし時を詳に問て 彼等をベツレヘムに遣さんと
 して曰けるは往て嬰兒の事を細に尋これに遇ば我に告し我も亦ゆきて拜

マ 路二〇七
 ヲ 路一〇七
 ノ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七
 ヲ 路一〇七

すべし 九 かれら王の命を聞いて往り前に東の方にて見たりし星かれらに先
ちて嬰兒の居所にいたり其上に止りぬ 彼等この星を見て甚く喜び 既
に室に入れば嬰兒の其母マリヤを借に居を見ひれふて嬰兒を拜し
の盒を開て黄金乳香没薬を禮物を献たり 博士夢にヘロテへ返る勿と
の黙示を蒙りて他の途より其國に歸れり 〇 彼等が去るのち主の使者曰
セフの夢に現れて曰けるはヘロテ嬰兒を索て殺んとする故に起て嬰兒と
其母をエジプトに逃て復わが爾に示さん時まで彼處に止れ 〇 日セ
フ起て夜嬰兒と其母をエジプトに往 へロテの死るまで其所に止
れり是主預言者た託て我わが子をエジプトより召出せりと云給ひしに應
せん爲ふり 是に於てヘロテ博士に欺かれたるをまり大にいかり人を遣
して博士に詳しく問たる時を度りマツレヘムと其境の内ある二歳以下の嬰
兒を盡く殺せり 〇 抑ち預言者エレミヤの言に 歎き悲み甚く驚る聲ラマに
聞ゆラケルその兒子を歎き其兒子の無によりて慰を得ずと云しに應へり

マ 四十一〇一
マ 四十一〇二
マ 四十一〇三
マ 四十一〇四
マ 四十一〇五

新てヘロテ死しければ主の使者ヨセフの夢にエジプトにて現れ曰けるは
起て嬰兒とその母をエジプトの地にゆけ嬰兒の生命を索る者
は已に死り 彼おきて嬰兒と其母をエジプトの地に至り 〇 三
アケラチ父ヘロテに代てエダヤの王たりと聞ければ彼處に往くことを懼る
又夢に告を蒙りてガリラヤの内に避 ナザレと云る邑に至りて居り彼は
ナザレ人と稱れんと預言者に託て云れたる言に應せん爲ふり

第三節 當時バプテスマのヨハ子來りてエダヤの野に宣傳へて 曰けるは
天國は近かり悔改めよ 是は主の道を備その路線を直せよと野に呼る人の
聲ありと預言者イザヤが言入ふり 此ヨハ子は身に駱駝の毛衣なき腰
に皮の帯をつかれ蝗蟲と野蜜を食物とせり 斯時エルサレム及びエダヤ
を舉またヨルダンの四方より人々出てヨハ子に就 己が罪を悔あらはし
ヨルダンにて彼よりバプテスマを授られたり 七 彼等が罪を悔あらはし
リサイ及サドカイの人々の多く來れるを見て彼等に曰けるは曠の裔と誰

マ 三〇三
マ 三〇四
マ 三〇五
マ 三〇六
マ 三〇七
マ 三〇八
マ 三〇九
マ 三一〇
マ 三一〇一
マ 三一〇二
マ 三一〇三
マ 三一〇四
マ 三一〇五
マ 三一〇六
マ 三一〇七
マ 三一〇八
マ 三一〇九
マ 三一〇一〇
マ 三一〇一一
マ 三一〇一二
マ 三一〇一三
マ 三一〇一四
マ 三一〇一五
マ 三一〇一六
マ 三一〇一七
マ 三一〇一八
マ 三一〇一九
マ 三一〇二〇
マ 三一〇二一
マ 三一〇二二
マ 三一〇二三
マ 三一〇二四
マ 三一〇二五
マ 三一〇二六
マ 三一〇二七
マ 三一〇二八
マ 三一〇二九
マ 三一〇三〇
マ 三一〇三一
マ 三一〇三二
マ 三一〇三三
マ 三一〇三四
マ 三一〇三五
マ 三一〇三六
マ 三一〇三七
マ 三一〇三八
マ 三一〇三九
マ 三一〇四〇
マ 三一〇四一
マ 三一〇四二
マ 三一〇四三
マ 三一〇四四
マ 三一〇四五
マ 三一〇四六
マ 三一〇四七
マ 三一〇四八
マ 三一〇四九
マ 三一〇五〇
マ 三一〇五一
マ 三一〇五二
マ 三一〇五三
マ 三一〇五四
マ 三一〇五五
マ 三一〇五六
マ 三一〇五七
マ 三一〇五八
マ 三一〇五九
マ 三一〇六〇
マ 三一〇六一
マ 三一〇六二
マ 三一〇六三
マ 三一〇六四
マ 三一〇六五
マ 三一〇六六
マ 三一〇六七
マ 三一〇六八
マ 三一〇六九
マ 三一〇七〇
マ 三一〇七一
マ 三一〇七二
マ 三一〇七三
マ 三一〇七四
マ 三一〇七五
マ 三一〇七六
マ 三一〇七七
マ 三一〇七八
マ 三一〇七九
マ 三一〇八〇
マ 三一〇八一
マ 三一〇八二
マ 三一〇八三
マ 三一〇八四
マ 三一〇八五
マ 三一〇八六
マ 三一〇八七
マ 三一〇八八
マ 三一〇八九
マ 三一〇九〇
マ 三一〇九一
マ 三一〇九二
マ 三一〇九三
マ 三一〇九四
マ 三一〇九五
マ 三一〇九六
マ 三一〇九七
マ 三一〇九八
マ 三一〇九九
マ 三一〇一〇〇
マ 三一〇一〇〇一
マ 三一〇一〇〇二
マ 三一〇一〇〇三
マ 三一〇一〇〇四
マ 三一〇一〇〇五
マ 三一〇一〇〇六
マ 三一〇一〇〇七
マ 三一〇一〇〇八
マ 三一〇一〇〇九
マ 三一〇一〇一〇
マ 三一〇一〇一一
マ 三一〇一〇一二
マ 三一〇一〇一三
マ 三一〇一〇一四
マ 三一〇一〇一五
マ 三一〇一〇一六
マ 三一〇一〇一七
マ 三一〇一〇一八
マ 三一〇一〇一九
マ 三一〇一〇二〇
マ 三一〇一〇二一
マ 三一〇一〇二二
マ 三一〇一〇二三
マ 三一〇一〇二四
マ 三一〇一〇二五
マ 三一〇一〇二六
マ 三一〇一〇二七
マ 三一〇一〇二八
マ 三一〇一〇二九
マ 三一〇一〇三〇
マ 三一〇一〇三一
マ 三一〇一〇三二
マ 三一〇一〇三三
マ 三一〇一〇三四
マ 三一〇一〇三五
マ 三一〇一〇三六
マ 三一〇一〇三七
マ 三一〇一〇三八
マ 三一〇一〇三九
マ 三一〇一〇四〇
マ 三一〇一〇四一
マ 三一〇一〇四二
マ 三一〇一〇四三
マ 三一〇一〇四四
マ 三一〇一〇四五
マ 三一〇一〇四六
マ 三一〇一〇四七
マ 三一〇一〇四八
マ 三一〇一〇四九
マ 三一〇一〇五〇
マ 三一〇一〇五一
マ 三一〇一〇五二
マ 三一〇一〇五三
マ 三一〇一〇五四
マ 三一〇一〇五五
マ 三一〇一〇五六
マ 三一〇一〇五七
マ 三一〇一〇五八
マ 三一〇一〇五九
マ 三一〇一〇六〇
マ 三一〇一〇六一
マ 三一〇一〇六二
マ 三一〇一〇六三
マ 三一〇一〇六四
マ 三一〇一〇六五
マ 三一〇一〇六六
マ 三一〇一〇六七
マ 三一〇一〇六八
マ 三一〇一〇六九
マ 三一〇一〇七〇
マ 三一〇一〇七一
マ 三一〇一〇七二
マ 三一〇一〇七三
マ 三一〇一〇七四
マ 三一〇一〇七五
マ 三一〇一〇七六
マ 三一〇一〇七七
マ 三一〇一〇七八
マ 三一〇一〇七九
マ 三一〇一〇八〇
マ 三一〇一〇八一
マ 三一〇一〇八二
マ 三一〇一〇八三
マ 三一〇一〇八四
マ 三一〇一〇八五
マ 三一〇一〇八六
マ 三一〇一〇八七
マ 三一〇一〇八八
マ 三一〇一〇八九
マ 三一〇一〇九〇
マ 三一〇一〇九一
マ 三一〇一〇九二
マ 三一〇一〇九三
マ 三一〇一〇九四
マ 三一〇一〇九五
マ 三一〇一〇九六
マ 三一〇一〇九七
マ 三一〇一〇九八
マ 三一〇一〇九九
マ 三一〇一〇一〇〇

言者イザヤの言に十五ゼブルンの地ナフタリの地海に沿たる地ヨルダンの
 外の地異邦人のガリラヤ十六此等の幽暗に在る民は大なる光をみ死地と死
 陰に坐する者の上に光いでたりと云いに十七應せん爲ふなり○十八斯時よりイエ
 ス始て道を宣傳へ天國は近けり悔改めよと曰たまへり十九イエスガリラヤ
 の海邊を歩てペテロと云シモンその兄弟アンタレと二人にて海に綱を
 網を敷きたり彼等は漁者なり之に曰けるは我に従へ我ふんぢらる人を漁
 る者と爲ん二十彼等やがて綱を棄てイエスに従ふ二十一此より進けるに又ほ
 の兄弟二人即ちゼベダイの子ヤコブと其兄弟ヨハ子父ゼベダイと偕に舟
 にて綱を補へるを見て之を召し二十二彼等も頓て舟と父を置いてイエスに従へ
 り二十三イエスガリラヤを徧く巡り其會堂にて教をなし天國の福音を宣傳す
 つ民の中なる諸の病もろくの疾を醫し二十四その聲名あまねくスリヤに
 播りしかば人々すべての患へる者萬殊の病また痛惱る者あるひは鬼に憑
 たるもの癩癩癩の病に罹れる者を彼に携來ければ之を醫せり二十五ガリラヤ

十三
 此せめたりき○十四爾曹は地の鹽なり鹽も其味を失はば何を以か故の味
 に復さん後は用ふ一外に棄られて人に踐るる而已十五爾曹は世の光なり山
 び築め天に於て爾曹の報賞おほければ也十六爾曹より前の預言者をも如
 らを詭譎また迫害いつはりて各様の悪言をいはん其時は爾曹福あり十七喜
 に費らるる者は福あり天國は即ち其人の有ふれば也十八我ために人ふんぢ
 を得べければ也十九心の清き者は福あり其人は神を見こさを得べければ也
 和平を求る者は福あり其人は神の子と稱らる可れば也二十義こと爲
 九
 ち其人の有ふれば也二十一哀む者は福あり其人は安慰を得べければ也二十二柔和
 する者は福あり其人は地を嗣こさを得べければ也二十三饑渴ここく義を慕者
 は福あり其人は飽こさを得べければ也二十四矜恤ある者は福あり其人は矜恤
 を得べければ也二十五心の清き者は福あり其人は神を見こさを得べければ也
 和平を求る者は福あり其人は神の子と稱らる可れば也二十六義こと爲
 らを詭譎また迫害いつはりて各様の悪言をいはん其時は爾曹福あり二十七喜
 び築め天に於て爾曹の報賞おほければ也二十八爾曹より前の預言者をも如
 此せめたりき○二十九爾曹は地の鹽なり鹽も其味を失はば何を以か故の味
 に復さん後は用ふ一外に棄られて人に踐るる而已三十爾曹は世の光なり山

十四〇廿一
 の上に建られたる城は隠ることを得ず 燈を燃して斗の下におく者なり
 燭臺に置いて家に在すべての物を照さん 此の如く人々の前に爾曹の光を
 耀かせ然れば人々なんぢらの善行を見て天に在す爾曹の父を榮べし
 われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿われ來て之を廢るに非ず成
 就せん爲なり 十八 われ誠に爾曹に告ん天地の盡さる中に律法の一
 點一畫も
 迷つくさすして廢ることなし 是故に人も誠の至微き一を壞り又その
 如く人に教なば天國に於て至微き者と謂れん凡そ之を行ひ且人に教る者
 は天國に於て大なる者と謂るべし 我なんぢらに告ん學者とマリサイの
 人の義よりも爾曹の義こそ勝すば必ず天國に入ること能じし 古の人
 告
 て殺すこと勿れ殺す者は審判に干らんと言ふこと有は爾曹が聞し所なり
 然し我なんぢらに告ん凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん又
 その兄弟を怒る者よといふ者は禁獄に干らん又狂妄よといふ者は地獄の火
 に干らんべし 是の故に爾曹も一禮物を携へて壇に往たる時が一にて兄

九〇廿二
 九〇廿三
 九〇廿四
 九〇廿五
 九〇廿六
 九〇廿七
 九〇廿八
 九〇廿九
 九〇三十

弟に恨るる者あるを憶起せば 二四 その禮物を壇の前に留まづ往て爾の兄
 弟と和す後きたりて爾の禮物を獻し 爾を説ふる者と備に途間にある時
 はやく和げよ恐くハ訟る者ふんぢを審官に付し審官また爾を下吏に付し
 遂に爾ハ獄に入られん 我まことに爾に告ん分釐までも償はされば必ず
 其所を出ること能ざる也 古の人告て姦淫すること勿と言ふことあ
 るハ爾曹が聞し所なり 然し我なんぢらに告ん凡そ婦を見て色情を起す
 者ハ中心すでに姦淫したる也 右の眼なんぢを罪に陥せば抉出して
 之を棄し蓋五體の一を失ふハ全身を地獄に投入らるるよりハ勝れり 三十
 右の手なんぢを罪に陥せば之を斷て棄し蓋五體の一を失ふハ全身を地
 獄に投入らるるよりハ勝れり 三十一 また曰ることあり凡そ人その妻を出さ
 んとせば之に離縁狀を與ふべし 然し我爾曹に告ん姦淫の故ならで其
 妻を出す者ハ之に姦淫なさしむるなり又出されたる婦を娶る者も姦淫を
 行ふなり 三十二 また古の人告て偽の誓を立ること勿なんぢら誓ふ所ハ必

九〇三十一
 九〇三十二
 九〇三十三
 九〇三十四
 九〇三十五
 九〇三十六
 九〇三十七
 九〇三十八
 九〇三十九
 九〇四十

エ 五〇二
 ヒ 王上八〇廿
 七 財八〇九
 ス 財一〇三
 ハ 財一〇三
 イ 財一〇三
 ヨ 財一〇三
 ホ 財一〇三
 ト 財一〇三
 ナ 財一〇三
 ニ 財一〇三
 ノ 財一〇三
 ハ 財一〇三
 ニ 財一〇三
 ノ 財一〇三
 ハ 財一〇三
 ニ 財一〇三
 ノ 財一〇三

聖たまふ爾の父は明顯に報たまふべし。爾曹祈る時は異邦人の如く重積
 語を言なかれ彼等は言おほきを以て聽れんぞ意へり。是故に彼等に教
 べ勿れ爾曹の父は求ざる先に其需用物を知らたまへば也。然ば爾曹かく祈
 るべし。天に在ます我儕の父よ願くは爾名を尊崇させ給へ。爾國を臨らせ
 給へ。爾旨の天に成さく地にも成せ給へ。我儕の日用の糧を今日も與た
 まへ。我儕に罪を犯す者を我ゆるす如く我儕の罪をも免たまへ。我儕を
 試験に遇せず惡より拯出し給へ。國と權と榮は爾の窮なく有たまふ所なり
 アーメン。爾曹もし人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦なんぢらな
 る免し給はん。然どもし人の罪を免さずば爾曹の父も爾曹の罪を免し給は
 ざるべし。○なんぢら斷食するときは偽善者の如く憂容をする勿れ。彼等は
 斷食を人に見ん爲に顔色を損ふ我まことに爾曹に告ん彼等ハ既に其報賞
 を得たり。なんぢ斷食する時は首に膏をぬり面を洗へ。如此するは爾の
 斷食人は見ずば天に在ます爾の父に現れんが爲なり。然ば隠微たる

サ 大十九〇廿一
 ナ 大十九〇廿二
 ニ 大十九〇廿三
 ノ 大十九〇廿四
 ハ 大十九〇廿五
 ニ 大十九〇廿六
 ノ 大十九〇廿七
 ハ 大十九〇廿八
 ニ 大十九〇廿九
 ノ 大十九〇三十
 ハ 大十九〇三十一
 ニ 大十九〇三十二
 ノ 大十九〇三十三
 ハ 大十九〇三十四
 ニ 大十九〇三十五
 ノ 大十九〇三十六
 ハ 大十九〇三十七
 ニ 大十九〇三十八
 ノ 大十九〇三十九
 ハ 大十九〇四十
 ニ 大十九〇四十一
 ノ 大十九〇四十二
 ハ 大十九〇四十三
 ニ 大十九〇四十四
 ノ 大十九〇四十五
 ハ 大十九〇四十六
 ニ 大十九〇四十七
 ノ 大十九〇四十八
 ハ 大十九〇四十九
 ニ 大十九〇五十
 ノ 大十九〇五十一
 ハ 大十九〇五十二
 ニ 大十九〇五十三
 ノ 大十九〇五十四
 ハ 大十九〇五十五
 ニ 大十九〇五十六
 ノ 大十九〇五十七
 ハ 大十九〇五十八
 ニ 大十九〇五十九
 ノ 大十九〇六十

に望たまふ爾の父は明顯に報たまふべし。○斷食しひ饑くさり盜竊がちて
 竊む所の地に財を蓄ふること勿れ。蓋くひ饑くさり盜竊て竊ざる所の天
 に財を蓄ふべし。蓋なんぢらの財の在さるるに心も亦ある可れば也。○
 身の光は目なり。若なんぢの目眩かならば全身も亦明なるべし。若なんぢ
 の目眩らば全身暗かるべし。是故に爾の中の光もし暗からば其暗き如何
 に大ならず乎。人は二人の主に奉ること能はず。蓋これを惡かれを愛み此を
 親み彼を疎べければ也。なんぢら神と財に兼奉ること能はず。是故に我な
 んぢらに告ん。生命の爲に何を食ひ何を飲また身體の爲に何を衣ん。蓋
 こと勿れ。生命は糧より優り身體は衣より優れる者ならず乎。なんぢら
 天空の鳥を見よ。稼ごさなく穡ごさを爲す倉に蓄ふるごさなし。然るに爾曹
 の天の父は之を養ひ給へり。爾曹之よりも大よ勝る者ならず乎。爾曹の
 うち誰か能おもひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや。また何故に衣のごさ
 を思わづらふや。野の百合花は如何して長かき思へ勞す紡がざる也。われ

ナ 七五上十 爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ざりき
 ヲ 七五上十 神は今日野に在て明日燼に投入らるる草をも如此よせば給へば況て爾
 ヲ 七五上十 曹をや嗚呼信仰うすき者よ 然ば何を食ひ何を飲なに衣んて思わつ
 ヲ 七五上十 らふ勿れ 此みな異邦人の求る者なり爾曹の天の父は凡て此等のもの
 ヲ 七五上十 必く需こを知たまへり 爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等のも
 ヲ 七五上十 のは皆なんぢらに加らるべし 是故に明日の事を憂慮なけれ明日は明日
 ヲ 七五上十 の事を思わづらへ一日の苦勞は一日にて足り
 ヲ 七五上十 爾曹の罪を定ること勿れ恐くは爾曹も亦罪に定られん 爾曹が人の
 ヲ 七五上十 罪を定る如く己が罪をも定らるべし爾曹が人を量こさく己も量らるべし
 ヲ 七五上十 三 なんぢ兄弟の目にある物屑を視て己が目にある梁木を知さるは何ぞや
 ヲ 七五上十 四 己の目に梁木のあるよ如何で兄弟に對て爾が目にある物屑を我に取せ
 ヲ 七五上十 よと曰こを得んや 偽善者よ先おのれの目より梁木をとれ然ば兄弟の
 ヲ 七五上十 目より物屑を取得るや 明かに見べし 犬に聖物を與ふる勿また豕の前

ナ 七五上十 馬太六〇七
 ヲ 七五上十 馬太六〇八
 ヲ 七五上十 馬太六〇九
 ヲ 七五上十 馬太六一〇
 ヲ 七五上十 馬太六一一
 ヲ 七五上十 馬太六一二
 ヲ 七五上十 馬太六一三
 ヲ 七五上十 馬太六一四
 ヲ 七五上十 馬太六一五
 ヲ 七五上十 馬太六一六
 ヲ 七五上十 馬太六一七
 ヲ 七五上十 馬太六一八
 ヲ 七五上十 馬太六一九
 ヲ 七五上十 馬太六二〇
 ヲ 七五上十 馬太六二一
 ヲ 七五上十 馬太六二二
 ヲ 七五上十 馬太六二三
 ヲ 七五上十 馬太六二四
 ヲ 七五上十 馬太六二五
 ヲ 七五上十 馬太六二六
 ヲ 七五上十 馬太六二七
 ヲ 七五上十 馬太六二八
 ヲ 七五上十 馬太六二九
 ヲ 七五上十 馬太六三〇
 ヲ 七五上十 馬太六三一
 ヲ 七五上十 馬太六三二
 ヲ 七五上十 馬太六三三
 ヲ 七五上十 馬太六三四
 ヲ 七五上十 馬太六三五
 ヲ 七五上十 馬太六三六
 ヲ 七五上十 馬太六三七
 ヲ 七五上十 馬太六三八
 ヲ 七五上十 馬太六三九
 ヲ 七五上十 馬太六四〇
 ヲ 七五上十 馬太六四一
 ヲ 七五上十 馬太六四二
 ヲ 七五上十 馬太六四三
 ヲ 七五上十 馬太六四四
 ヲ 七五上十 馬太六四五
 ヲ 七五上十 馬太六四六
 ヲ 七五上十 馬太六四七
 ヲ 七五上十 馬太六四八
 ヲ 七五上十 馬太六四九
 ヲ 七五上十 馬太六五〇
 ヲ 七五上十 馬太六五一
 ヲ 七五上十 馬太六五二
 ヲ 七五上十 馬太六五三
 ヲ 七五上十 馬太六五四
 ヲ 七五上十 馬太六五五
 ヲ 七五上十 馬太六五六
 ヲ 七五上十 馬太六五七
 ヲ 七五上十 馬太六五八
 ヲ 七五上十 馬太六五九
 ヲ 七五上十 馬太六六〇
 ヲ 七五上十 馬太六六一
 ヲ 七五上十 馬太六六二
 ヲ 七五上十 馬太六六三
 ヲ 七五上十 馬太六六四
 ヲ 七五上十 馬太六六五
 ヲ 七五上十 馬太六六六
 ヲ 七五上十 馬太六六七
 ヲ 七五上十 馬太六六八
 ヲ 七五上十 馬太六六九
 ヲ 七五上十 馬太六七〇
 ヲ 七五上十 馬太六七一
 ヲ 七五上十 馬太六七二
 ヲ 七五上十 馬太六七三
 ヲ 七五上十 馬太六七四
 ヲ 七五上十 馬太六七五
 ヲ 七五上十 馬太六七六
 ヲ 七五上十 馬太六七七
 ヲ 七五上十 馬太六七八
 ヲ 七五上十 馬太六七九
 ヲ 七五上十 馬太七八〇
 ヲ 七五上十 馬太七八一
 ヲ 七五上十 馬太七八二
 ヲ 七五上十 馬太七八三
 ヲ 七五上十 馬太七八四
 ヲ 七五上十 馬太七八五
 ヲ 七五上十 馬太七八六
 ヲ 七五上十 馬太七八七
 ヲ 七五上十 馬太七八八
 ヲ 七五上十 馬太七八九
 ヲ 七五上十 馬太七九〇
 ヲ 七五上十 馬太七九一
 ヲ 七五上十 馬太七九二
 ヲ 七五上十 馬太七九三
 ヲ 七五上十 馬太七九四
 ヲ 七五上十 馬太七九五
 ヲ 七五上十 馬太七九六
 ヲ 七五上十 馬太七九七
 ヲ 七五上十 馬太七九八
 ヲ 七五上十 馬太七九九
 ヲ 七五上十 馬太八〇〇

マ 七五上十 爾曹の眞珠を投棄る勿れ恐くは足にて之を踐ふりかへりて爾曹を唾やぶ
 マ 七五上十 らん 求よ然ば與られ尋よ然ばあひ門を叩よ然ば開かるこを得ん
 マ 七五上十 すべて求る者ハの尋る者ハあひ門を叩く者ハ開かる可ればなり 爾曹の
 マ 七五上十 うち誰か其子ハンを求んに石を予んや 十 また魚を求んに蛇を予んや 然
 マ 七五上十 ば爾曹惡き者ナがら善賜を其子に與ふるを知まして天に在す爾曹の父ハ
 マ 七五上十 求る者に善物を予さらん乎 是故に凡て人に爲られんこ欲こハ爾曹の父ハ
 マ 七五上十 人にも其こ爲よ是レ律法と預言者なる也 〇 空き門より入よ洗滌に至
 マ 七五上十 る路ハ濁その門ハ大なり此より入もの多し 命に至る路ハ窄その門ハ少
 マ 七五上十 し其路を得もの少なり 〇 偽の預言者を謹めよ彼等ハ綿羊の姿にて爾曹
 マ 七五上十 に来れども内ハ殘狼なり 是その果に由て知べし誰か荊棘より薔薇をと
 マ 七五上十 り採り無花果を採こをせん 凡て善樹ハ善果を結び惡樹ハ惡果を
 マ 七五上十 結べり 善樹ハ惡果を結ばず惡樹ハ善果を結ぶこ能ざる也 凡そ善果
 マ 七五上十 を結さる樹ハ斫れて火に投入らる 是故に其果に由て之を知べし 〇 我

マ 七五上十 馬太六〇七
 マ 七五上十 馬太六〇八
 マ 七五上十 馬太六〇九
 マ 七五上十 馬太六一〇
 マ 七五上十 馬太六一一
 マ 七五上十 馬太六一二
 マ 七五上十 馬太六一三
 マ 七五上十 馬太六一四
 マ 七五上十 馬太六一五
 マ 七五上十 馬太六一六
 マ 七五上十 馬太六一七
 マ 七五上十 馬太六一八
 マ 七五上十 馬太六一九
 マ 七五上十 馬太六二〇
 マ 七五上十 馬太六二一
 マ 七五上十 馬太六二二
 マ 七五上十 馬太六二三
 マ 七五上十 馬太六二四
 マ 七五上十 馬太六二五
 マ 七五上十 馬太六二六
 マ 七五上十 馬太六二七
 マ 七五上十 馬太六二八
 マ 七五上十 馬太六二九
 マ 七五上十 馬太六三〇
 マ 七五上十 馬太六三一
 マ 七五上十 馬太六三二
 マ 七五上十 馬太六三三
 マ 七五上十 馬太六三四
 マ 七五上十 馬太六三五
 マ 七五上十 馬太六三六
 マ 七五上十 馬太六三七
 マ 七五上十 馬太六三八
 マ 七五上十 馬太六三九
 マ 七五上十 馬太六四〇
 マ 七五上十 馬太六四一
 マ 七五上十 馬太六四二
 マ 七五上十 馬太六四三
 マ 七五上十 馬太六四四
 マ 七五上十 馬太六四五
 マ 七五上十 馬太六四六
 マ 七五上十 馬太六四七
 マ 七五上十 馬太六四八
 マ 七五上十 馬太六四九
 マ 七五上十 馬太六五〇
 マ 七五上十 馬太六五一
 マ 七五上十 馬太六五二
 マ 七五上十 馬太六五三
 マ 七五上十 馬太六五四
 マ 七五上十 馬太六五五
 マ 七五上十 馬太六五六
 マ 七五上十 馬太六五七
 マ 七五上十 馬太六五八
 マ 七五上十 馬太六五九
 マ 七五上十 馬太六七〇
 マ 七五上十 馬太六七一
 マ 七五上十 馬太六七二
 マ 七五上十 馬太六七三
 マ 七五上十 馬太六七四
 マ 七五上十 馬太六七五
 マ 七五上十 馬太六七六
 マ 七五上十 馬太六七七
 マ 七五上十 馬太六七八
 マ 七五上十 馬太六七九
 マ 七五上十 馬太七八〇
 マ 七五上十 馬太七八一
 マ 七五上十 馬太七八二
 マ 七五上十 馬太七八三
 マ 七五上十 馬太七八四
 マ 七五上十 馬太七八五
 マ 七五上十 馬太七八六
 マ 七五上十 馬太七八七
 マ 七五上十 馬太七八八
 マ 七五上十 馬太七八九
 マ 七五上十 馬太七九〇
 マ 七五上十 馬太七九一
 マ 七五上十 馬太七九二
 マ 七五上十 馬太七九三
 マ 七五上十 馬太七九四
 マ 七五上十 馬太七九五
 マ 七五上十 馬太七九六
 マ 七五上十 馬太七九七
 マ 七五上十 馬太七九八
 マ 七五上十 馬太七九九
 マ 七五上十 馬太八〇〇

を召て主よ主よと曰もの盡く天國に入に非ず唯これに入者の我天に在す
 父の旨に遵ふ者ののみ也 其三 其日われに語て主よ主よの名に託てなしへ主
 の名に託て鬼をおひ主の名に託て多く異能を行しに非ずやと云もの多か
 らん 其時われらに告われ嘗て爾曹を知らず惡をなす者よ我を離去と曰ん
 是故に凡て我の言を聽て行ふ者を磐の上の家を建たる智人に譬ん
 兩ふり大水いで風ふきて其家を撞ごも倒ることなし是磐を基礎と爲たれ
 ば也 凡て我の言を聽て行はざる者を沙の上に家を建たる愚なる人に
 譬ん 兩ふり大水いで風ふきて其家を撞ば終に倒てその傾覆おほいな
 り イエス此等の言を誦竟たまへるとさき集りたる人々その教を駭きあへ
 り 三九 その學者の如ならず權威を有る者の如く教たまへば也
 二〇 山を下しき多の人々これに従へり 二〇 癩病の者きたり拜し
 て曰けるハ主もし旨に適さきハ我を潔なし得べし 三 イエス手を伸かれに
 按て我旨に適へり潔なれと曰ければ癩病たぐちに潔れり 四 イエス彼は曰

大九〇四十一
 大九〇四十二
 大九〇四十三

けるハ我ゆきて之を醫すべし 八 百夫の長こたへけるハ主よ我なんぢを我
 が屋下に入奉るハ恐れ多し唯一言を出し給ハ我僕ハ愈ん 九 蓋われ人の
 權威の下にある者なるに我下に亦兵卒ありて此に往き曰ばゆき彼に來れ
 と言げ來る我僕に此を行き曰ば則ち行が故なり 十 イエスこれを聞て奇み
 從へる人々に曰けるハ我まことに爾曹に告んイスラエルの中にだに未だ
 斯る篤信に遇ざる也 十一 われ爾曹に告ん多の人々東より西より來てアブラ
 ハムイサクヤコブさ借に天國に坐し 十二 國の諸子ハ外の幽暗に逐出され其
 處にて哀哭切齒すること有ん 十三 イエス百夫の長に往なんぢが信仰の如く
 爾に成べしと曰たまへる其時に僕ハ愈たり 十四 イエスペテロの家に入そ
 の岳母の熱を煩ひ臥むたるを見て 十五 その手に押ければ即ち熱されり婦お

大九〇四十四
 大九〇四十五
 大九〇四十六
 大九〇四十七
 大九〇四十八
 大九〇四十九
 大九〇五十

ナ 徒十〇廿八
 リ 徒五十三〇四
 カ 可四〇廿五
 四 四一〇廿二
 五 五〇廿二
 六 七〇十三
 七 七〇九
 八 七〇九
 九 七〇九
 十 七〇九
 十一 七〇九
 十二 七〇九
 十三 七〇九
 十四 七〇九
 十五 七〇九
 十六 七〇九
 十七 七〇九
 十八 七〇九
 十九 七〇九
 二十 七〇九
 二十一 七〇九
 二十二 七〇九
 二十三 七〇九
 二十四 七〇九
 二十五 七〇九
 二十六 七〇九
 二十七 七〇九
 二十八 七〇九
 二十九 七〇九
 三十 七〇九

きて彼等に奪ふ日暮たるとき人々鬼に憑れたる者を多く携來ければイエス言にて鬼を逐出し病ある者を悉く醫せり預言者イザヤに託て自ら我儕の恙を受われらの病を預と曰たまひしに應せんが爲なり○借イエス多の人々の己を環るを見て弟子に命じ向の岸に往んさし給しにある學者きたりて曰けるハ師ハ何處へ往給ふとも我從ハんイエス之に曰けるハ狐ハ穴あり天空の鳥ハ巢あり然と人の子ハ枕する所なし○また弟子の一人いひけるハ主ハ先ゆきて父を葬ることを我々容せイエス曰けるハ我々從へ死たる者其死し者を葬らせよ○イエス舟に登ければ弟子等も之に従ふ此とき大なる颶風おこりて舟を蔽ばかりなる浪たちしにイエスハ寢たり弟子等これに近きて醒し曰けるは主ハ救たまへ我儕亡んとすイエス彼等に曰けるは信仰うすき者何ぞ懼るや遂に起て風を海を斥ければ大に平息になりぬ人々奇みて曰けるは此は如何なる人を風も海も之に従ひたり○イエス向の岸なるガタリ入の地に至れると

ナ 徒十〇廿八
 リ 徒五十三〇四
 カ 可四〇廿五
 四 四一〇廿二
 五 五〇廿二
 六 七〇十三
 七 七〇九
 八 七〇九
 九 七〇九
 十 七〇九
 十一 七〇九
 十二 七〇九
 十三 七〇九
 十四 七〇九
 十五 七〇九
 十六 七〇九
 十七 七〇九
 十八 七〇九
 十九 七〇九
 二十 七〇九
 二十一 七〇九
 二十二 七〇九
 二十三 七〇九
 二十四 七〇九
 二十五 七〇九
 二十六 七〇九
 二十七 七〇九
 二十八 七〇九
 二十九 七〇九
 三十 七〇九

き鬼に憑れたる三人のもの基より出て彼を迎ふ程とて其途を人の過るべき能はざりしほど也かれら呼叫て曰けるは神の子イエスマ我儕なんぢの何の與あらん乎いまだ時いたらざるに我儕を責んきて此處に來るか 途はなれて家の多のむれ食し居ければ 鬼イエスに來て曰けるは若われらを逐出さんならん家の群に入らざるを容せ 彼等に往せ白ければ鬼いでて家の群に入しに惣のむれ山坂より逸て海にいり水に死たり 牧者ども邑に逃走て此事を鬼に憑れたりし者の事を告げれば イエスに達んきて邑の者擧て出きたり彼を見て此境を出んことを願へり

イエス舟に登りて故邑に至れば 癡癡にて床に臥たる者人々昇來れりイエス彼等が信するを見て癡癡の者に曰けるは子ハ心安かれ爾の罪赦れたり 三 ある學者たち心の中に謂けるは此人は變濟を有り イエスその意を知て曰けるは爾曹いかなれば心に惡を樹ふや 爾の罪赦されたりと言きて起て歩めと言ふ 易き 六 それ人の子地にて罪を赦すの

權あることを爾曹に知らせんとて遂に痲瘋の者に起て床をさり家に歸れさ
 曰ければ 起て其家に歸りぬ 人々これを見て奇み此の如き權を人に賜
 し神を崇たり ○ イエス此より進往マタイと名くる人の税關に坐し居け
 るを見て我に従へと言ひければ起て從へり 十 イエスが家に食するをき税
 吏ある人おほく來てイエス及其弟子を憐に坐しければ 十一 パリサイの
 人これを見て其弟子に曰けるは爾曹の師は何故税吏や罪ある人と憐に食
 する乎 十二 イエス聞て彼等に曰けるは康強なる者は醫者の助を需す唯病あ
 る者これを需す 十三 われ軀體を欲て祭祀を欲すといふ此は如何なる意か往て
 學ぶべし 夫わが來るは義人を招ために非ず罪ある人を招きて悔改させん
 が爲なり ○ 十四 其時ヨハ子の弟子イエスに來て曰けるは我儕とパリサイの
 人は去ばく斷食するに師の弟子の斷食せざるは何故ぞ 十五 イエス彼等に
 曰けるは新郎の友その新郎を憐に居うちは哀むことを得んや將來新郎を
 ひきさらるる日きたらん 其時には斷食すべき也 十六 新き布を以て舊き衣を

マ 六 一〇 至 一五 〇 二 九
 マ 六 一六 至 二六 〇 七 八
 マ 六 二七 〇 〇 七 七
 マ 六 二八 〇 〇 七 八
 マ 六 二九 〇 〇 七 八
 マ 六 三〇 〇 〇 七 八
 マ 六 三一 〇 〇 七 八
 マ 六 三二 〇 〇 七 八
 マ 六 三三 〇 〇 七 八
 マ 六 三四 〇 〇 七 八
 マ 六 三五 〇 〇 七 八
 マ 六 三六 〇 〇 七 八
 マ 六 三七 〇 〇 七 八
 マ 六 三八 〇 〇 七 八
 マ 六 三九 〇 〇 七 八
 マ 六 四〇 〇 〇 七 八

補ふ者はあらじ蓋づくると所のもの反て之を壞その綻ひ尤も甚だしから
 ん また新き酒を舊き革漚に盛る者はあらじ若くせば漚はりき酒も
 れいで其漚も亦壞らん 新漚に盛酒を盛なば兩ながら存べし ○ 十八 イエ
 ス彼等に此事を言る時ある宰きたり拜して曰けるは我女いま既に死り來
 て彼に手を按たまはと生べし 十九 イエス起て彼に従ひ其弟子と憐に往 十
 二年血漏を患へる婦うしるに來て其衣の裾に捫れり 二十 蓋もし衣にだにも
 捫らば愈んと意へばなり 三三 イエスふりかへり婦を見て曰けるは女よ心安
 かれ爾の信仰なんぢを愈せり即ち婦この時より愈 三三 イエス等の家に入し
 宿ふく者および多の人の泣眺を見て 三十四 之に曰けるは退け女は死るに非ず
 たり 三十五 眠たるのみ人々イエスを晒笑ふ 三十六 彼等を出し後いりて其手を執し
 に女起たり 三十七 この聲名あまれく其地に揺りぬ 三十八 イエス此去とき二人の
 醫者またがひて呼びひけるはダビテの裔よ我儕を憐み給へ 三十九 イエス家に
 入しに醫者きたりければ彼等に白たまひけるは我この事を行得ると信す

マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八
 マ 七 〇 〇 〇 七 八

路十〇三 路十〇四 路十〇五 路十〇六 路十〇七 路十〇八 路十〇九 路十〇一〇 路十〇一一 路十〇一二 路十〇一三 路十〇一四 路十〇一五 路十〇一六 路十〇一七 路十〇一八 路十〇一九 路十〇二〇 路十〇二一 路十〇二二 路十〇二三 路十〇二四 路十〇二五 路十〇二六 路十〇二七 路十〇二八 路十〇二九 路十〇三〇 路十〇三一 路十〇三二 路十〇三三 路十〇三四 路十〇三五 路十〇三六 路十〇三七 路十〇三八 路十〇三九 路十〇四〇 路十〇四一 路十〇四二 路十〇四三 路十〇四四 路十〇四五 路十〇四六 路十〇四七 路十〇四八 路十〇四九 路十〇五〇 路十〇五一 路十〇五二 路十〇五三 路十〇五四 路十〇五五 路十〇五六 路十〇五七 路十〇五八 路十〇五九 路十〇六〇 路十〇六一 路十〇六二 路十〇六三 路十〇六四 路十〇六五 路十〇六六 路十〇六七 路十〇六八 路十〇六九 路十〇七〇 路十〇七一 路十〇七二 路十〇七三 路十〇七四 路十〇七五 路十〇七六 路十〇七七 路十〇七八 路十〇七九 路十〇八〇 路十〇八一 路十〇八二 路十〇八三 路十〇八四 路十〇八五 路十〇八六 路十〇八七 路十〇八八 路十〇八九 路十〇九〇 路十〇九一 路十〇九二 路十〇九三 路十〇九四 路十〇九五 路十〇九六 路十〇九七 路十〇九八 路十〇九九 路一〇〇〇 路一〇〇一 路一〇〇二 路一〇〇三 路一〇〇四 路一〇〇五 路一〇〇六 路一〇〇七 路一〇〇八 路一〇〇九 路一〇一〇 路一〇一一 路一〇一二 路一〇一三 路一〇一四 路一〇一五 路一〇一六 路一〇一七 路一〇一八 路一〇一九 路一〇二〇 路一〇二一 路一〇二二 路一〇二三 路一〇二四 路一〇二五 路一〇二六 路一〇二七 路一〇二八 路一〇二九 路一〇三〇 路一〇三一 路一〇三二 路一〇三三 路一〇三四 路一〇三五 路一〇三六 路一〇三七 路一〇三八 路一〇三九 路一〇四〇 路一〇四一 路一〇四二 路一〇四三 路一〇四四 路一〇四五 路一〇四六 路一〇四七 路一〇四八 路一〇四九 路一〇五〇 路一〇五一 路一〇五二 路一〇五三 路一〇五四 路一〇五五 路一〇五六 路一〇五七 路一〇五八 路一〇五九 路一〇六〇 路一〇六一 路一〇六二 路一〇六三 路一〇六四 路一〇六五 路一〇六六 路一〇六七 路一〇六八 路一〇六九 路一〇七〇 路一〇七一 路一〇七二 路一〇七三 路一〇七四 路一〇七五 路一〇七六 路一〇七七 路一〇七八 路一〇七九 路一〇八〇 路一〇八一 路一〇八二 路一〇八三 路一〇八四 路一〇八五 路一〇八六 路一〇八七 路一〇八八 路一〇八九 路一〇九〇 路一〇九一 路一〇九二 路一〇九三 路一〇九四 路一〇九五 路一〇九六 路一〇九七 路一〇九八 路一〇九九 路一〇一〇〇

らん〇十六 われ爾曹を遣すは羊を狼の中に入るが如し故に蛇の如く智く鶴の如く馴良かれ十七 慎て人に戒心せよ蓋人なんぢらを築議所に解し又その會堂にて鞭つべければ也十八 又わが縁故に因て侯伯および王の前に曳るべし是かれらと異邦人に誰をなさんが爲なり十九 人なんぢらを解さば如何なにな言んと思ひ煩らふ勿れ其とき言べき事は爾曹に賜るべし二十 是がんぢら自ら言に非ず爾曹の父の靈その衷に在て言なり二十一 兄弟は兄弟を死に付し父は子を付し子は兩親を訴へ且これを殺さしむべし二十二 又なんぢら我名の爲に凡の人に惚れん然と終まで忍ぶ者は救はるべし二十三 この邑にて人なんぢらを賣なば他の邑に逃よ我まことに爾曹に告ん爾曹イスラエルの諸邑を廻遊さる間に人の子は來るべし二十四 弟子は師より優らず僕は主より優らざる也二十五 弟子は其師の如く僕は其主の如ならば足ぬべし若し人主を呼てベルセブルと云ば況て其家の者をや二十六 是故に彼等を懼るること勿きは掩れて露れざる者なく隠て知れざる者なければ也二十七 われ幽暗に於て爾

路十〇三 路十〇四 路十〇五 路十〇六 路十〇七 路十〇八 路十〇九 路十〇一〇 路十〇一一 路十〇一二 路十〇一三 路十〇一四 路十〇一五 路十〇一六 路十〇一七 路十〇一八 路十〇一九 路十〇二〇 路十〇二一 路十〇二二 路十〇二三 路十〇二四 路十〇二五 路十〇二六 路十〇二七 路十〇二八 路十〇二九 路十〇三〇 路十〇三一 路十〇三二 路十〇三三 路十〇三四 路十〇三五 路十〇三六 路十〇三七 路十〇三八 路十〇三九 路十〇四〇 路十〇四一 路十〇四二 路十〇四三 路十〇四四 路十〇四五 路十〇四六 路十〇四七 路十〇四八 路十〇四九 路十〇五〇 路十〇五一 路十〇五二 路十〇五三 路十〇五四 路十〇五五 路十〇五六 路十〇五七 路十〇五八 路十〇五九 路十〇六〇 路十〇六一 路十〇六二 路十〇六三 路十〇六四 路十〇六五 路十〇六六 路十〇六七 路十〇六八 路十〇六九 路十〇七〇 路十〇七一 路十〇七二 路十〇七三 路十〇七四 路十〇七五 路十〇七六 路十〇七七 路十〇七八 路十〇七九 路十〇八〇 路十〇八一 路十〇八二 路十〇八三 路十〇八四 路十〇八五 路十〇八六 路十〇八七 路十〇八八 路十〇八九 路十〇九〇 路十〇九一 路十〇九二 路十〇九三 路十〇九四 路十〇九五 路十〇九六 路十〇九七 路十〇九八 路十〇九九 路一〇一〇〇

曹に告しことを光明に述べ耳をつけて聽しことを屋上に宣播めよ二八 身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るよ勿れ唯なんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ二九 二羽の雀は一錢にて售に非ずや然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に隕ること有じ三十 爾曹の頭の髪また皆かぞへらる故に懼るよ勿れ爾曹は多の雀よりも優れり三十一 然ば凡そ人の前に我を識と言ん者を我も亦天に在す我父の前に之を識と言ん三二 人の前に我を識と言ん者我も亦天に在す我父の前に之を識すと言べし三三 人の前に我を識すと言ん者我も亦天に在す我父の前に之を識すと言べし三四 地に泰平を出さん爲に我來れり意なけれ泰平を出さんとに非ず刃を出さん爲に來れり三五 夫わが來るは人を其父に背かせ女を其母に背かせ娘を其姑に背かせんが爲なり三六 人の敵は其家の者なるべし三七 我よりも父母を愛む者は我に協ざる者なり我よりも子女を愛む者は我に協ざる者なり三八 その十字架を任て我に従はざる者も我に協ざる者なり三九 その生命を得る者は之を失ひ我ために生命を失ふ者は之を得べし四十 爾曹を接る者は我を接る也また

我を接する者任我を遣しし者を受けり。預言者なるを以その預言者を受けり。預言者なるの報償を受け。遺書を以その義人を接する者は義人の報償を受。わが弟子なるをもて小き一人の者に冷なる水一杯にても飲する者は誠に爾曹に告ん必す其報償を失はじ。

約二〇四
王上十七九
王下四十
王下四二
王下四三
王下四四
王下四五
王下四六
王下四七
王下四八
王下四九
王下五〇
王下五一
王下五二
王下五三
王下五四
王下五五
王下五六
王下五七
王下五八
王下五九
王下六〇
王下六一
王下六二
王下六三
王下六四
王下六五
王下六六
王下六七
王下六八
王下六九
王下七〇
王下七一
王下七二
王下七三
王下七四
王下七五
王下七六
王下七七
王下七八
王下七九
王下八〇
王下八一
王下八二
王下八三
王下八四
王下八五
王下八六
王下八七
王下八八
王下八九
王下九〇
王下九一
王下九二
王下九三
王下九四
王下九五
王下九六
王下九七
王下九八
王下九九
王下一〇〇
王下一〇一
王下一〇二
王下一〇三
王下一〇四
王下一〇五
王下一〇六
王下一〇七
王下一〇八
王下一〇九
王下一一〇
王下一一一
王下一一二
王下一一三
王下一一四
王下一一五
王下一一六
王下一一七
王下一一八
王下一一九
王下一二〇
王下一二一
王下一二二
王下一二三
王下一二四
王下一二五
王下一二六
王下一二七
王下一二八
王下一二九
王下一三〇
王下一三一
王下一三二
王下一三三
王下一三四
王下一三五
王下一三六
王下一三七
王下一三八
王下一三九
王下一四〇
王下一四一
王下一四二
王下一四三
王下一四四
王下一四五
王下一四六
王下一四七
王下一四八
王下一四九
王下一五〇
王下一五一
王下一五二
王下一五三
王下一五四
王下一五五
王下一五六
王下一五七
王下一五八
王下一五九
王下一六〇
王下一六一
王下一六二
王下一六三
王下一六四
王下一六五
王下一六六
王下一六七
王下一六八
王下一六九
王下一七〇
王下一七一
王下一七二
王下一七三
王下一七四
王下一七五
王下一七六
王下一七七
王下一七八
王下一七九
王下一八〇
王下一八一
王下一八二
王下一八三
王下一八四
王下一八五
王下一八六
王下一八七
王下一八八
王下一八九
王下一九〇
王下一九一
王下一九二
王下一九三
王下一九四
王下一九五
王下一九六
王下一九七
王下一九八
王下一九九
王下一一〇〇

預言者なるの然れ爾曹に告ん彼は預言者より卓越たる者なり。夫なんん先に道を備る我が使者を我なんの前に遣入さ給されたるは即ち是なり。誠に爾曹に告ん婦の生たる者の中いまだマズテスメのヨハネより大なる者は起らざり然と天國の最小き者も彼よりは大なる也。マズテスメのヨハネの時より今に至るまで人々勵て天國を取んとす勵たる者は之を取り。それ凡の預言者と律法の預言したるはヨハネの時までなれば也。若なんぢら我言を承ることを好まば来べきエリヤは是なり。耳ありて聴ゆる者は聴べし。我の世を何し暫んや童子街に坐し其侶を呼んでわれら筒ふけども爾曹をぞらす哀なすれども爾曹胸うたす。云に似たり。蓋ヨハネ来て食ふこと飲ことを爲されば鬼に恐れたる者なり。人々言り。人の子きたりて食ふことなす飲ことを爲れば又食を嗜み酒を好む。人稅吏罪ある者の友なりといふ然ども智慧は智慧の子に義を爲らる也。○ 既時イエス多の異能を行たまひたる諸邑の悔改めざるに由て責い

約二〇四
王上十七九
王下四十
王下四二
王下四三
王下四四
王下四五
王下四六
王下四七
王下四八
王下四九
王下五〇
王下五一
王下五二
王下五三
王下五四
王下五五
王下五六
王下五七
王下五八
王下五九
王下六〇
王下六一
王下六二
王下六三
王下六四
王下六五
王下六六
王下六七
王下六八
王下六九
王下七〇
王下七一
王下七二
王下七三
王下七四
王下七五
王下七六
王下七七
王下七八
王下七九
王下八〇
王下八一
王下八二
王下八三
王下八四
王下八五
王下八六
王下八七
王下八八
王下八九
王下九〇
王下九一
王下九二
王下九三
王下九四
王下九五
王下九六
王下九七
王下九八
王下九九
王下一〇〇
王下一〇一
王下一〇二
王下一〇三
王下一〇四
王下一〇五
王下一〇六
王下一〇七
王下一〇八
王下一〇九
王下一一〇
王下一一一
王下一一二
王下一一三
王下一一四
王下一一五
王下一一六
王下一一七
王下一一八
王下一一九
王下一二〇
王下一二一
王下一二二
王下一二三
王下一二四
王下一二五
王下一二六
王下一二七
王下一二八
王下一二九
王下一三〇
王下一三一
王下一三二
王下一三三
王下一三四
王下一三五
王下一三六
王下一三七
王下一三八
王下一三九
王下一四〇
王下一四一
王下一四二
王下一四三
王下一四四
王下一四五
王下一四六
王下一四七
王下一四八
王下一四九
王下一五〇
王下一五一
王下一五二
王下一五三
王下一五四
王下一五五
王下一五六
王下一五七
王下一五八
王下一五九
王下一六〇
王下一六一
王下一六二
王下一六三
王下一六四
王下一六五
王下一六六
王下一六七
王下一六八
王下一六九
王下一七〇
王下一七一
王下一七二
王下一七三
王下一七四
王下一七五
王下一七六
王下一七七
王下一七八
王下一七九
王下一八〇
王下一八一
王下一八二
王下一八三
王下一八四
王下一八五
王下一八六
王下一八七
王下一八八
王下一八九
王下一九〇
王下一九一
王下一九二
王下一九三
王下一九四
王下一九五
王下一九六
王下一九七
王下一九八
王下一九九
王下一一〇〇

約二〇四
王上十七九
王下四十
王下四二
王下四三
王下四四
王下四五
王下四六
王下四七
王下四八
王下四九
王下五〇
王下五一
王下五二
王下五三
王下五四
王下五五
王下五六
王下五七
王下五八
王下五九
王下六〇
王下六一
王下六二
王下六三
王下六四
王下六五
王下六六
王下六七
王下六八
王下六九
王下七〇
王下七一
王下七二
王下七三
王下七四
王下七五
王下七六
王下七七
王下七八
王下七九
王下八〇
王下八一
王下八二
王下八三
王下八四
王下八五
王下八六
王下八七
王下八八
王下八九
王下九〇
王下九一
王下九二
王下九三
王下九四
王下九五
王下九六
王下九七
王下九八
王下九九
王下一〇〇
王下一〇一
王下一〇二
王下一〇三
王下一〇四
王下一〇五
王下一〇六
王下一〇七
王下一〇八
王下一〇九
王下一一〇
王下一一一
王下一一二
王下一一三
王下一一四
王下一一五
王下一一六
王下一一七
王下一一八
王下一一九
王下一二〇
王下一二一
王下一二二
王下一二三
王下一二四
王下一二五
王下一二六
王下一二七
王下一二八
王下一二九
王下一三〇
王下一三一
王下一三二
王下一三三
王下一三四
王下一三五
王下一三六
王下一三七
王下一三八
王下一三九
王下一四〇
王下一四一
王下一四二
王下一四三
王下一四四
王下一四五
王下一四六
王下一四七
王下一四八
王下一四九
王下一五〇
王下一五一
王下一五二
王下一五三
王下一五四
王下一五五
王下一五六
王下一五七
王下一五八
王下一五九
王下一六〇
王下一六一
王下一六二
王下一六三
王下一六四
王下一六五
王下一六六
王下一六七
王下一六八
王下一六九
王下一七〇
王下一七一
王下一七二
王下一七三
王下一七四
王下一七五
王下一七六
王下一七七
王下一七八
王下一七九
王下一八〇
王下一八一
王下一八二
王下一八三
王下一八四
王下一八五
王下一八六
王下一八七
王下一八八
王下一八九
王下一九〇
王下一九一
王下一九二
王下一九三
王下一九四
王下一九五
王下一九六
王下一九七
王下一九八
王下一九九
王下一一〇〇

約二〇四
王上十七九
王下四十
王下四二
王下四三
王下四四
王下四五
王下四六
王下四七
王下四八
王下四九
王下五〇
王下五一
王下五二
王下五三
王下五四
王下五五
王下五六
王下五七
王下五八
王下五九
王下六〇
王下六一
王下六二
王下六三
王下六四
王下六五
王下六六
王下六七
王下六八
王下六九
王下七〇
王下七一
王下七二
王下七三
王下七四
王下七五
王下七六
王下七七
王下七八
王下七九
王下八〇
王下八一
王下八二
王下八三
王下八四
王下八五
王下八六
王下八七
王下八八
王下八九
王下九〇
王下九一
王下九二
王下九三
王下九四
王下九五
王下九六
王下九七
王下九八
王下九九
王下一〇〇
王下一〇一
王下一〇二
王下一〇三
王下一〇四
王下一〇五
王下一〇六
王下一〇七
王下一〇八
王下一〇九
王下一一〇
王下一一一
王下一一二
王下一一三
王下一一四
王下一一五
王下一一六
王下一一七
王下一一八
王下一一九
王下一二〇
王下一二一
王下一二二
王下一二三
王下一二四
王下一二五
王下一二六
王下一二七
王下一二八
王下一二九
王下一三〇
王下一三一
王下一三二
王下一三三
王下一三四
王下一三五
王下一三六
王下一三七
王下一三八
王下一三九
王下一四〇
王下一四一
王下一四二
王下一四三
王下一四四
王下一四五
王下一四六
王下一四七
王下一四八
王下一四九
王下一五〇
王下一五一
王下一五二
王下一五三
王下一五四
王下一五五
王下一五六
王下一五七
王下一五八
王下一五九
王下一六〇
王下一六一
王下一六二
王下一六三
王下一六四
王下一六五
王下一六六
王下一六七
王下一六八
王下一六九
王下一七〇
王下一七一
王下一七二
王下一七三
王下一七四
王下一七五
王下一七六
王下一七七
王下一七八
王下一七九
王下一八〇
王下一八一
王下一八二
王下一八三
王下一八四
王下一八五
王下一八六
王下一八七
王下一八八
王下一八九
王下一九〇
王下一九一
王下一九二
王下一九三
王下一九四
王下一九五
王下一九六
王下一九七
王下一九八
王下一九九
王下一一〇〇

ひけるは 二 あゝ 禍なる哉 コラシム 噓禍なる哉 ベツサイダ 爾曹の中に
 行し異 能を若ツロミ シドン に行しならば 彼等は 早く 罪をき 灰を蒙りて
 悔改しなるべし 三 われ 爾曹に 告ん 審判の日には ツロミ シドンの 刑罰は 爾
 曹よりも 却て 易からん 三三 既 天よ まで 擧られし カハナウシム 又 陸府 落
 さるべし 蓋なんぢら 行し 異能を 若ソドム 行し ならば 今日 まで 尙保
 存し ならん 二四 我なんぢら 告ん 審判の日 ヲソドム の地は 爾曹より 却て
 易かるべし 〇 二五 其とき イエス 答て 曰けるは 天地の主なる 父よ 此事を 割て
 達者 隠して 赤子 隠したまふを 謝す 二六 父よ 然それ 此の如し 聖旨 通る
 なり 二七 父は 我 萬物を 予たまへり 父の外 子子を 識も 無また 子および 子
 の 願す所の 者の 外に 父を 識者なし 〇 二八 凡て 勞たる 者 また 重を 負る 者は 我
 に 來れ 我なんぢら を 息ません 二九 我は 心 柔和にして 謙遜者 なれば 我 輻を 負
 て 我に 學なんぢら 心に 平安を 獲べし 三〇 蓋わが 輻は 易わが 荷は 輕ければ 我
 爾曹 當時 イエス 安息日 參の 知を 過し 其弟子 たち 觀て 疑を 萌はし
 二〇 約 一〇四 四
 二一 約 一〇六 七
 二二 約 一〇七 八
 二三 約 一〇八 九
 二四 約 一〇九 十
 二五 約 一〇一〇 十一
 二六 約 一〇一〇 十二
 二七 約 一〇一〇 十三
 二八 約 一〇一〇 十四
 二九 約 一〇一〇 十五
 三〇 約 一〇一〇 十六
 三一 約 一〇一〇 十七
 三二 約 一〇一〇 十八
 三三 約 一〇一〇 十九
 三四 約 一〇一〇 二十
 三五 約 一〇一〇 二十一
 三六 約 一〇一〇 二十二
 三七 約 一〇一〇 二十三
 三八 約 一〇一〇 二十四
 三九 約 一〇一〇 二十五
 四〇 約 一〇一〇 二十六
 四一 約 一〇一〇 二十七
 四二 約 一〇一〇 二十八
 四三 約 一〇一〇 二十九
 四四 約 一〇一〇 三十
 四五 約 一〇一〇 三十一
 四六 約 一〇一〇 三十二
 四七 約 一〇一〇 三十三
 四八 約 一〇一〇 三十四
 四九 約 一〇一〇 三十五
 五〇 約 一〇一〇 三十六
 五一 約 一〇一〇 三十七
 五二 約 一〇一〇 三十八
 五三 約 一〇一〇 三十九
 五四 約 一〇一〇 四十
 五五 約 一〇一〇 四十一
 五六 約 一〇一〇 四十二
 五七 約 一〇一〇 四十三
 五八 約 一〇一〇 四十四
 五九 約 一〇一〇 四十五
 六〇 約 一〇一〇 四十六
 六一 約 一〇一〇 四十七
 六二 約 一〇一〇 四十八
 六三 約 一〇一〇 四十九
 六四 約 一〇一〇 五十
 六五 約 一〇一〇 五十一
 六六 約 一〇一〇 五十二
 六七 約 一〇一〇 五十三
 六八 約 一〇一〇 五十四
 六九 約 一〇一〇 五十五
 七〇 約 一〇一〇 五十六
 七一 約 一〇一〇 五十七
 七二 約 一〇一〇 五十八
 七三 約 一〇一〇 五十九
 七四 約 一〇一〇 六十
 七五 約 一〇一〇 六十一
 七六 約 一〇一〇 六十二
 七七 約 一〇一〇 六十三
 七八 約 一〇一〇 六十四
 七九 約 一〇一〇 六十五
 八〇 約 一〇一〇 六十六
 八一 約 一〇一〇 六十七
 八二 約 一〇一〇 六十八
 八三 約 一〇一〇 六十九
 八四 約 一〇一〇 七十
 八五 約 一〇一〇 七十一
 八六 約 一〇一〇 七十二
 八七 約 一〇一〇 七十三
 八八 約 一〇一〇 七十四
 八九 約 一〇一〇 七十五
 九〇 約 一〇一〇 七十六
 九一 約 一〇一〇 七十七
 九二 約 一〇一〇 七十八
 九三 約 一〇一〇 七十九
 九四 約 一〇一〇 八十
 九五 約 一〇一〇 八十一
 九六 約 一〇一〇 八十二
 九七 約 一〇一〇 八十三
 九八 約 一〇一〇 八十四
 九九 約 一〇一〇 八十五
 一〇〇 約 一〇一〇 八十六
 一〇一 約 一〇一〇 八十七
 一〇二 約 一〇一〇 八十八
 一〇三 約 一〇一〇 八十九
 一〇四 約 一〇一〇 九十
 一〇五 約 一〇一〇 九十一
 一〇六 約 一〇一〇 九十二
 一〇七 約 一〇一〇 九十三
 一〇八 約 一〇一〇 九十四
 一〇九 約 一〇一〇 九十五
 一一〇 約 一〇一〇 九十六
 一一一 約 一〇一〇 九十七
 一一二 約 一〇一〇 九十八
 一一三 約 一〇一〇 九十九
 一一四 約 一〇一〇 百

めたり 三 我 萬物を 予たまへり 父の外 子子を 識も 無また 子および 子
 の 願す所の 者の 外に 父を 識者なし 〇 二八 凡て 勞たる 者 また 重を 負る 者は 我
 に 來れ 我なんぢら を 息ません 二九 我は 心 柔和にして 謙遜者 なれば 我 輻を 負
 て 我に 學なんぢら 心に 平安を 獲べし 三〇 蓋わが 輻は 易わが 荷は 輕ければ 我
 爾曹 當時 イエス 安息日 參の 知を 過し 其弟子 たち 觀て 疑を 萌はし
 二〇 約 一〇四 四
 二一 約 一〇六 七
 二二 約 一〇七 八
 二三 約 一〇八 九
 二四 約 一〇九 十
 二五 約 一〇一〇 十一
 二六 約 一〇一〇 十二
 二七 約 一〇一〇 十三
 二八 約 一〇一〇 十四
 二九 約 一〇一〇 十五
 三〇 約 一〇一〇 十六
 三一 約 一〇一〇 十七
 三二 約 一〇一〇 十八
 三三 約 一〇一〇 十九
 三四 約 一〇一〇 二十
 三五 約 一〇一〇 二十一
 三六 約 一〇一〇 二十二
 三七 約 一〇一〇 二十三
 三八 約 一〇一〇 二十四
 三九 約 一〇一〇 二十五
 四〇 約 一〇一〇 二十六
 四一 約 一〇一〇 二十七
 四二 約 一〇一〇 二十八
 四三 約 一〇一〇 二十九
 四四 約 一〇一〇 三十
 四五 約 一〇一〇 三十一
 四六 約 一〇一〇 三十二
 四七 約 一〇一〇 三十三
 四八 約 一〇一〇 三十四
 四九 約 一〇一〇 三十五
 五〇 約 一〇一〇 三十六
 五一 約 一〇一〇 三十七
 五二 約 一〇一〇 三十八
 五三 約 一〇一〇 三十九
 五四 約 一〇一〇 四十
 五五 約 一〇一〇 四十一
 五六 約 一〇一〇 四十二
 五七 約 一〇一〇 四十三
 五八 約 一〇一〇 四十四
 五九 約 一〇一〇 四十五
 六〇 約 一〇一〇 四十六
 六一 約 一〇一〇 四十七
 六二 約 一〇一〇 四十八
 六三 約 一〇一〇 四十九
 六四 約 一〇一〇 五十
 六五 約 一〇一〇 五十一
 六六 約 一〇一〇 五十二
 六七 約 一〇一〇 五十三
 六八 約 一〇一〇 五十四
 六九 約 一〇一〇 五十五
 七〇 約 一〇一〇 五十六
 七一 約 一〇一〇 五十七
 七二 約 一〇一〇 五十八
 七三 約 一〇一〇 五十九
 七四 約 一〇一〇 六十
 七五 約 一〇一〇 六十一
 七六 約 一〇一〇 六十二
 七七 約 一〇一〇 六十三
 七八 約 一〇一〇 六十四
 七九 約 一〇一〇 六十五
 八〇 約 一〇一〇 六十六
 八一 約 一〇一〇 六十七
 八二 約 一〇一〇 六十八
 八三 約 一〇一〇 六十九
 八四 約 一〇一〇 七十
 八五 約 一〇一〇 七十一
 八六 約 一〇一〇 七十二
 八七 約 一〇一〇 七十三
 八八 約 一〇一〇 七十四
 八九 約 一〇一〇 七十五
 九〇 約 一〇一〇 七十六
 九一 約 一〇一〇 七十七
 九二 約 一〇一〇 七十八
 九三 約 一〇一〇 七十九
 九四 約 一〇一〇 八十
 九五 約 一〇一〇 八十一
 九六 約 一〇一〇 八十二
 九七 約 一〇一〇 八十三
 九八 約 一〇一〇 八十四
 九九 約 一〇一〇 八十五
 一〇〇 約 一〇一〇 八十六
 一〇一 約 一〇一〇 八十七
 一〇二 約 一〇一〇 八十八
 一〇三 約 一〇一〇 八十九
 一〇四 約 一〇一〇 九十
 一〇五 約 一〇一〇 九十一
 一〇六 約 一〇一〇 九十二
 一〇七 約 一〇一〇 九十三
 一〇八 約 一〇一〇 九十四
 一〇九 約 一〇一〇 九十五
 一一〇 約 一〇一〇 九十六
 一一一 約 一〇一〇 九十七
 一一二 約 一〇一〇 九十八
 一一三 約 一〇一〇 九十九
 一一四 約 一〇一〇 百

ナ 九十一〇廿九
 フ 九十一〇廿九
 コ 九十一〇廿九
 エ 九十一〇廿九
 シ 九十一〇廿九
 セ 九十一〇廿九
 ソ 九十一〇廿九
 タ 九十一〇廿九
 テ 九十一〇廿九
 ト 九十一〇廿九
 ナ 九十一〇廿九
 フ 九十一〇廿九
 コ 九十一〇廿九
 エ 九十一〇廿九
 シ 九十一〇廿九
 セ 九十一〇廿九
 ソ 九十一〇廿九
 タ 九十一〇廿九
 テ 九十一〇廿九
 ト 九十一〇廿九

ふ 答て彼等に曰けるは、好悪なる世は休役を求されど預言者ヨナの休役の外は之に休役を興られじ。夫ヨナが三日三夜魚の腹の中に在し如く人の子も三日三夜地の中に在べし。ニ子への人審判の日に共に起て今この世の罪を定めん彼等ハヨナの誨よ由て悔改たり夫ヨナより大なる者こそは南の女王さばきの日に共に起て今この世の罪を定めん彼ハ地の極よりソロモンの智慧を聽んきて來れり夫ソロモンより大なるもの此にあり。惡鬼人より出て早なる地を巡り安息を求めども得ずして曰けるは、我が出し家に歸らん既に來しに空虚にして掃淨り飾れるを見、遂に往て己りも惡き七の惡鬼を携へ借に入て此に居バその人の後の患狀は前よりも更に惡かるべし此あしき世もまた此の如ならん。イエス人々に語なる時その母と兄弟かれに言はんきて外に立ければ、或人イエスに曰けるは、爾の母と兄弟なんぢに言はんとして外に立り、イエス告し者に答て曰けるは、我母は誰ぞ我兄弟は誰ぞや。見て手を伸その弟子を指て曰けるは、是わが母

シ 九十一〇廿九
 セ 九十一〇廿九
 ソ 九十一〇廿九
 タ 九十一〇廿九
 テ 九十一〇廿九
 ト 九十一〇廿九
 ナ 九十一〇廿九
 フ 九十一〇廿九
 コ 九十一〇廿九
 エ 九十一〇廿九
 シ 九十一〇廿九
 セ 九十一〇廿九
 ソ 九十一〇廿九
 タ 九十一〇廿九
 テ 九十一〇廿九
 ト 九十一〇廿九

わが兄弟なり。蓋すべて我が天に在す父の目を行ふ者は、是わが兄弟わが姉妹わが母なれば也。

當日イエス家を出て海邊に坐せしに、多の人々彼に集來ければ、イエスは舟に登て坐し凡の人々は岸に立り、イエス聲を以て多端の言を人々に語ぬ種まく者播に出しが、播るとき路の旁に遺し種あり空中の鳥きたりて啄み盡せり。また土うすき磯地に遺し種あり直に萌出たれど、日の出しとき灼れしかば根なきが故に枯たり。また棘の中に遺し種あり、棘そだちて之を蔽げり。また沃壤に遺し種あり實を結べるこそ或は百倍あるひは六十倍あるひハ三十倍せり。耳ありて聽ゆる者は聽べし。弟子等きたりて彼に曰けるは何故に譬をもて彼等に語り給ふや。答て曰けるハ爾曹には天國の奧義を知らざるを予たまへど、彼等にハ予へ給されば也。それ有る者は予られてなほ餘あり無有者ハその有る物をも奪る也。彼等は視ても見ず聽ても聞かず悟ざるが故に我譬を以て彼等に語れり。イザ

シ 九十一〇廿九
 セ 九十一〇廿九
 ソ 九十一〇廿九
 タ 九十一〇廿九
 テ 九十一〇廿九
 ト 九十一〇廿九
 ナ 九十一〇廿九
 フ 九十一〇廿九
 コ 九十一〇廿九
 エ 九十一〇廿九
 シ 九十一〇廿九
 セ 九十一〇廿九
 ソ 九十一〇廿九
 タ 九十一〇廿九
 テ 九十一〇廿九
 ト 九十一〇廿九

わが兄弟なり。蓋すべて我が天に在す父の目を行ふ者は、是わが兄弟わが姉妹わが母なれば也。

當日イエス家を出て海邊に坐せしに、多の人々彼に集來ければ、イエスは舟に登て坐し凡の人々は岸に立り、イエス聲を以て多端の言を人々に語ぬ種まく者播に出しが、播るとき路の旁に遺し種あり空中の鳥きたりて啄み盡せり。また土うすき磯地に遺し種あり直に萌出たれど、日の出しとき灼れしかば根なきが故に枯たり。また棘の中に遺し種あり、棘そだちて之を蔽げり。また沃壤に遺し種あり實を結べるこそ或は百倍あるひは六十倍あるひハ三十倍せり。耳ありて聽ゆる者は聽べし。弟子等きたりて彼に曰けるは何故に譬をもて彼等に語り給ふや。答て曰けるハ爾曹には天國の奧義を知らざるを予たまへど、彼等にハ予へ給されば也。それ有る者は予られてなほ餘あり無有者ハその有る物をも奪る也。彼等は視ても見ず聽ても聞かず悟ざるが故に我譬を以て彼等に語れり。イザ

ハ 預言に爾曹は聴きも悟らず視ども見ず蓋この民目にて見耳にて聴
心にて悟り改めて我に啓されんことを恐その心を頑し耳を蔽ひ目を閉た
り云しに應へり然る爾曹の目ハ見爾曹の耳ハ聞が故に福なり 十七
誠に爾曹に告ん多の預言者と義人は爾曹が見どころを見んとしたりしが
見どころを得ず爾曹が聞どころを聞んとしたりしが聞どころを得ざりき
に爾曹播種の譬を聴 天國の教を聞て悟らされバ悪鬼きたりて其心に播
れたる種を奪ふ是路の旁に播たる種なり 磧地に播れたる種ハ是教を聽
て速かに喜び受れども 己に根なければ暫時のみ教の爲に患難あるひハ
追らるる事の起る時は忽ち道に礙く者なり 三三 また棘の中に播れたる種ハ
是教を聴ども此世の思慮と貨財の惑に教を蔽れて實らざる者なり 沃壤
に播れたる種ハ是教を聴て悟り實を結こさ或ハ百倍あるひハ六十倍ある
ひハ三十倍する者なり 〇 二四 また譬を彼等に示して曰けるは天國ハ人畑に
美種ヲ播に似たり 二五 人々の業する間に其敵きたり麥の中は稗子ヲ播て去

リ 苗はは出して實たまさき稗子も現れたり 主人の働きたりて曰けるは
主よ畑には美種ヲ播ざりしか如何して稗子ある乎 僕に曰けるは敵人こ
れを行り僕主人に曰けるは然らバ我儕ゆきて之を抜あつむるは宜か 否
おそらくは爾曹稗子を抜あつめんとて麥も共に拔べし 收獲まで二な
から長おけ我かりいれの時まで稗子を拔集て焚ふ爲に之を束れ麥をば我が
倉に收よと後者に言ん 〇 三三 また譬を彼等に示し曰けるは天國ハ芥種の如
し人これを取て畑に播バ 萬の種よりハ小けれど長ては他の草より大
にして天空の鳥きたり其枝に宿はごの樹となる也 〇 三三 また譬を彼等に語
けるは天國ハ麩酵の如し婦これをさり三斗の粉の中に隠せば悉く脹發す
なり 三四 イエス譬をもて凡て此等の事を衆人に語たまへり譬にあらざれば
語り給はず 三五 これ預言者に託て我譬を設て口を啓き世の始より隠たる事
を言出さんと云れたるに應せん爲なり 〇 三六 ついにイエス衆人を歸して室に
入り其弟子きたりて曰けるは畑の稗子の譬を我儕に解たまへ 三七 之に答て

曰けるハ美種を播者は人の子なり 卅八
 畑ハこの世界なり美種ハ是天國の諸
 子なり稗子は惡魔の子類なり 三九
 之をまく敵は惡魔なり收穫ハ世の末なり
 刈者ハ天の使等なり 稗子の歛て火に焚る如く此世の末に於ても此の如
 くなるべし 四〇
 人の子その位者たちを遣して其國の中より凡て眼聾となる
 者また惡をなす人を歛て 之を爐の火に投入べし其處にて哀哭切齒する
 こと有ん 四一
 此とき義人の其父の國に於て日の如く輝かん耳ありて聽ゆる
 者は聽べし 四二
 また天國ハ畑に蔵たる寶の如し人みいださば之を秘し喜
 び歸り其所有を盡く賣てその畑を買なり 四三
 また天國ハ好眞珠を求めん
 する商人の如し 一の値たかき眞珠を見出さばその所有を盡く賣て之を
 買なり 四四
 また天國ハ海に投て各様の魚をさる網の如し 既に盈れば岸
 に曳あげ坐てその嘉ものを器にいれ惡ものを棄るなり 四五
 世の末に於ても
 此の如ならん天の使等いでて惡者の中より惡者を取わけ 之を爐の火に
 投入べし其處にて哀哭切齒すること有ん 四六
 イエス彼等は曰けるハ此事

七 可六〇十四至
 九 路九〇七至九
 十 太六〇十四
 十一 路三〇一九至
 十二 利一〇一六
 十三 太一一〇至一
 十四 太一一〇至一

其ころ分封の君ヘロダイエスの聲名を聞て 二
 其の僕に曰けるハ
 是ハパテスマのヨハ子なり彼死より甦りたり故に異なる能を行ふなり
 前にヘロテその兄弟ピリポの妻ヘロテヤの事に由てロハ子を捕へ縛て獄
 に入たり 此ハヨハ子ヘロテに此婦を娶るハ宜しからずと云しに因 彼
 ヨハ子を殺さんと欲し民これを預言者とするにより彼等を懼たりしが

カ 可三〇十
路六〇十九
十卷九〇十一
三 可七〇一至廿
レ 西二〇八
路十一〇廿八
路四十
ソ 出廿〇十二
利廿〇九
書〇十七
子 路九〇百
廿六
ナ 賽廿九〇十三
ラ 西二〇十八至
多二〇十四
路十〇十四十
路一四〇十四
十七
ハ 路二〇八
路十一〇廿八
路四十
ニ 可七〇一至廿
三 可七〇一至廿
四 可七〇一至廿
五 可七〇一至廿
六 可七〇一至廿
七 可七〇一至廿
八 可七〇一至廿
九 可七〇一至廿
十 可七〇一至廿
十一 可七〇一至廿
十二 可七〇一至廿
十三 可七〇一至廿
十四 可七〇一至廿
十五 可七〇一至廿
十六 可七〇一至廿
十七 可七〇一至廿
十八 可七〇一至廿
十九 可七〇一至廿
二十 可七〇一至廿
二十一 可七〇一至廿
二十二 可七〇一至廿
二十三 可七〇一至廿
二十四 可七〇一至廿
二十五 可七〇一至廿
二十六 可七〇一至廿
二十七 可七〇一至廿
二十八 可七〇一至廿
二十九 可七〇一至廿
三十 可七〇一至廿
三十一 可七〇一至廿
三十二 可七〇一至廿
三十三 可七〇一至廿
三十四 可七〇一至廿
三十五 可七〇一至廿
三十六 可七〇一至廿
三十七 可七〇一至廿
三十八 可七〇一至廿
三十九 可七〇一至廿
四十 可七〇一至廿
四十一 可七〇一至廿
四十二 可七〇一至廿

の人々イエスを議て還く四方に人を遣し凡て病の者を携へ來らしむ 只
その衣の裾に捫らんこをイエスに願へり捫し者は則ちみな愈されたり
時ニエルサレムの學者とパリサイの人イエスに來て曰けるは
爾の弟子古の人の遺傳を犯ハ何故ぞ蓋食する時に其手を洗されば也 答
て彼等に曰けるハ爾曹ハ亦なんぢらの遺傳によりて神の誠を犯ハ何故ぞ
四 それ神いましめて爾の父母を敬へ又父母を嘗る者ハ殺さるべし宜給
へリ 然るに爾曹は曰て凡て人父母に對なんぢを養ふ可ものは禮物なり
と云ハ 六 その父母を敬はずとも可す斯て爾曹遺傳により神の誠を廢くせ
リ 偽善者よイザヤは能なんぢらに就て預言し此民ハ口にて我に近き聲
にて我を敬へども其心ハ我に遠かり 九 人の誠を教となして徒らに我を拜
す云リ 十 イエス人々を召て彼等に曰けるは聽て悟れ 十一 口に入るものハ
人を汚さす口より出るものハ是人を汚すなり 十二 弟子きたりてイエスに曰
けるハパリサイの人この言を聞て厭棄るを爾知か 十三 答て曰けるは我が天

ツ 太三三〇十六
路六〇廿九
外 卷三〇六七
ノ 太九〇九
オ 卷三〇六
ク 路六〇五
廿一
ヤ 可七〇四至
九
マ 可七〇五至
九
メ 太九〇七
フ 太十〇五
路十五〇八
ニ 太七〇六

の父の植ざる者はみな拔るべし 彼等を棄おけ 醫者の相する醫者なり若
めしひのもの 醫者の相せば二人とも海に落べし 十五 徒ロイエスに答て曰
けるは此譬を我併に解たまへ 十六 イエス曰けるは爾曹も未だ悟ざる乎 凡
て口に入るものは腹を運て脚に落るを未だ知ざるか 十七 口より出るものは心
より出これ人を汚すもの也 蓋心より出る所の惡念凶殺姦淫苟合盜竊
妄證 踴躍 此等は人を汚すものなり然ども手を洗すして食ふは人を汚さず
イエス此を去てツロシシドンの地に往けるに 三 其地に住るカナンの婦
いで呼はり曰けるは主よダビデの裔よ我を憫み給へ我むすめ鬼に憑れて
甚く苦めり 三 三 イエス一言も彼に答ざりしかば其弟子きたり請て曰けるは
我併の後より呼はるが故に彼を去せ給へ 答て曰けるはイスラエルの家
の迷へる羊の外に我は遣されず 婦きたり拜して曰けるは主よ我を助た
まへ 二六 答けるは兒女のパンを取て犬に投與ふるは宜からず 婦いひける
は主よ然されども犬もその主人の膳より落る屑を食なり 二八 遂にイエス答

太八〇三九
可七〇一
太十一〇五
路七〇二

太九〇六
路六〇四

太九〇三
路十〇一
三下四〇四
二四四四

て曰けるは婦人爾の信仰は大なり願の如く爾に成べし此時より其女いな
 たり○ イエス此を去ガリヤの海邊にゆき山に登りて坐せり 多の人
 々跛者瘖者瘡者殘缺者および各様の疾病ある者を伴ひきたりイエスの足
 下に置ければ即ち之を醫しぬ 是に於て瘡者はものいひ殘疾はいは跛者
 はあゆみ瘖者は見たるを人々見て奇みイスラエルの神を榮たり○
 スその弟子を呼て曰けるは我この衆人を憫む彼等われと偕に居に三日
 にして食ふものなし飢させて去しむることを欲す恐くは途間にて憫ん
 その弟子かれに曰けるは野にて此おほくの人に飽するほどのパンを何處
 より得んや イエス彼等に曰けるはパン幾何あるや答けるは七と些少の
 魚あり イエス人々に命じて地に坐しめ 七のパンと魚を取て謝し之を
 擘て其弟子に予いかに弟子ふれを人々に予ふ 食てみな飽たり餘の屑を
 拾し七の籃に盈り 之を食るもの婦と子どもの外に四千人ありき イエ
 ス人衆を去しめ舟に登てマグダラの境に至れり

太十二〇五
路五十六

太十二〇九
路五十六

太十二〇八
路五十六

太十二〇五
路五十六

太十二〇五
路五十六

我儕に見せよと曰ければ 彼等に答けるハ爾曹には夕紅に由て晴なら
 んと言 晨には朝紅また曇に由て今日は雨ならんといふ 偽善者よ空の景
 色を別ことを知て時の休徴を別ち能はざる乎 意惡なる世は休徴を求る
 とも預言者ヨナの休徴のほか休徴を予られじ遂に彼等を離れて去ぬ○
 その弟子むかふの岸に到しにパンを携ふることを忘たり イエス彼等に
 曰けるは戒心してパリサイとサドカイの人の麩酵を慎めよ 弟子たがひ
 に論じて曰けるは是パンを携へざりし故ならん イエスこれを知て曰け
 るは信仰うすき者よ何ぞ互にパンを携へざりしことを論する乎 未だ悟
 らざるか 五千人に五のパンを予しき幾箇ひるひし乎 又 四千人に七
 のパンを予しき幾箇ひるひしや 爾曹これを記ざるか 十一
 カイの人の麩酵を慎めよはパンにつきて語るに非ざるを何ぞ悟らざる 十二
 是に於て弟子その麩酵にはあらでパリサイとサドカイの人の教を謹めよ

ス可八〇七七至
廿九〇十八節

イ約一〇四十二
ロ加一〇一十一
ホ二六〇四十五
ト太三三〇七十八
チ約二〇廿一
リ可八〇廿一
ヨ九〇一
ヤ廿七〇二五

音るなるを悟れり。○ イエスカイザリヤビリビの方に到しき其弟子に
問て曰けるは人々ハ人の子を誰と言や。彼等いひけるは或人ハメブテス
マのヨハ子或人はエリヤ或人はエレミヤまた預言者の一人なりと言り。彼
等に曰けるは爾曹は我を言て誰とする乎。シモンペテロ答けるハ爾ハキ
リスト活神の子なり。イエス答て彼に曰けるはヨナの子シモン爾は証な
り蓋血肉なんちに示せるに非ず天に在す吾父なり。我また爾に告ん爾ハ
メテロなり我が教會をこの磐の上に建てし陰府の門は之に勝べからず。
又われ天國の論を爾に予へん爾が地に於て繋こさは天に於ても繋なんぢ
が地に於て釋こさハ天に於ても釋べし。遂に其弟子を戒めけるは我をキ
リストと人に告ること勿れ。○ 此時よりイエスその弟子に己のエルサレ
ムに往て長老祭司の長學者等より多の苦みを受かつ殺され第三日に甦る
等なすべき事を示し始む。○ 三三。メテロイエスを援きて主と宣らす此非なん
ぢに來るまじと曰ければ。○ 三三。イエス反顧てメテロに曰たまひけるはサマ
リヤ

マ一八〇三五至
五〇四十四節
ル太十〇廿九
チ加三〇一
ワ路十二〇廿
カ但七〇一
ロ太七〇一
カ但七〇一
ツ出六〇廿八
ソ出六〇廿九
レ可九〇二
目太廿四〇廿七
目太廿四〇廿七
目太廿四〇廿七
ナ子太一〇十七
ナ子太一〇十七
ナ子太一〇十七

我後に退け爾は我に疑く者なり夫なんぢは神の事を思はず人の事を思
へり。○ 此時イエスその弟子に曰けるは若われに從はんは欲ふ者ハ己を棄て
の十字架を背て我に從へ。○ 三五。そは生命を保全せんとする者は之を失ひ我ために
其生命を失ふ者は之を得べければ也。○ 三六。もし人全世界を得とも其生命を失はば
何の益あらん乎また人なを以て其生命に易んや。○ 三七。それ人の子は父の榮光
を以てその使等と偕に來らん其時おのくの行に由て報ゆべし。○ 誠に爾曹に
人の子その國を以て來るを見までは此に立ものゝ中に死さる者あるべし。
○ 三七。六日の後イエスペテロヤコブその兄弟ヨハ子を伴ひ人を遊下高
山に登り給しが。○ 彼等の前にて其容貌がほり其面目の如く耀き其衣は白
く光れり。○ 三三。モーセエリヤ現れてイエスと偕に語ぬ。○ 三三。ペテロ答てイエス
に曰けるは主よ我儕こゝに居は善し矧旨に適はば我儕に三の窟を建て
たまへ。一は主のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせん。○ 如此いへ
る時か々やける雲がれらを蔽ふ聲雲より出て言けるは此は我旨に適ふわ

ス可八〇七七至
廿九〇十八至

イ約一〇四十二

ロ加二〇二十一

ハ約二〇四十五

ニ約二〇四十五

ヘ約二〇四十五

ト約二〇四十五

チ約二〇四十五

リ約二〇四十五

九約二〇四十五

七約二〇四十五

言るなるを悟れり。○ イエスカイザリヤビリビの方に到しとき其弟子に
 問て曰けるは人々ハ人の子を誰と言や 彼等いひけるは或人ハバプテス
 マのヨハ子或人ハエリヤ或人ハエレミヤまた預言者の一人なりと言り 彼
 等に曰けるは爾曹は我を言て誰とする乎 シモンペテロ答けるハ爾ハキ
 リスト活神の子なり イエス答て彼に曰けるはヨナの子イシモン爾は証な
 り蓋血肉なんちに示せるに非ず天に在す吾父なり 我また爾に告ん爾ハ
 ペテロなり我が教會をこの磐の上に建べし陰府の門は之に勝べからず
 又われ天國の論を爾に予へん爾が地に於て繋こは天に於ても繋なんぢ
 が地に於て釋こは天に於ても釋べし 遂に其弟子を戒めけるは我をキ
 リストと人に告ること勿れ ○ 此時よりイエスその弟子に己のエルサレ
 ムに往て長老祭司の長學者等より多の苦みを受かつ殺され第三日に甦る
 等なすべき事を示し始む 三 ペテロイエスを援さめて主と宣らす此事なん
 ぢに來るまじと曰ければ 三 イエス反顧てペテロに曰たまひけるはサメソ

マ一八〇三五八
五節二〇四八

ル太十の廿九

ナ加三〇の廿

ワ路十二の廿

カ太廿五〇の廿一

但七〇の廿三

後一〇七三

路十四

太廿四〇の廿七

路廿一〇の廿七

路九〇の廿八

路六〇の廿九

出四〇の廿九

但七〇の廿九

路三〇の廿七

路二〇の廿七

路一〇の廿七

路二〇の廿七

路三〇の廿七

路四〇の廿七

路五〇の廿七

路六〇の廿七

路七〇の廿七

我後に退け爾は我に礙く者なり夫なんぢは神の事を思はず人の事を思
 へり 此時イエスその弟子に曰けるは若われに従はんは欲ふ者ハ己を棄て
 の十字架を負て我に従へ 三 是は生命を保全せんとする者は之を失ひ我ために
 其生命を失ふ者は之を得べければ也 三 人全世界を得ても其生命を失はば
 何の益あらん乎また人なを以て其生命に易んや 三 七 人の子は父の榮光
 を以てその使等と偕に來らん其時おのくの行に由て報ゆべし 三 八 誠に爾曹に告
 ん人の子その國を以て來るを見までは此に立ものゝ中に死ざる者あるべし
 六日の後イエスペテロヤコブその兄弟ヨハ子を伴ひ人を遣下高
 山に登り給しが 二 彼等の前にて其容貌がはり其面日の如く耀き其衣は白
 く光れり 三 モーセエリヤ現れてイエスと偕に語ぬ 四 ペテロ答てイエス
 に曰けるは主よ我儕こゝに居は善し且尊旨に適はと我儕に三の窟を建せ
 たまへ一は主のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせん 五 如此いへ
 る時かゞやける雲がれらを蔽ふ聲雲より出て言けるは此は我旨に適ふわ

爾の爲に彼等に納め

爾の爲に彼等に納め 爾の爲に彼等に納め

其のとき弟子イエスに来て曰けるは天國に於て大なる者ハ誰ぞヤ

イエス 嬰兒を召かれらの中に立て 曰けるハ我まここに爾曹に告んし

改まりて嬰兒の若くならずば天國に入こざるを得じ 然ば凡そこの嬰兒

の若く自ら謙る者ハこれ天國に於て大なる者なり 又わが名の爲に此の

如き一人の嬰兒を接る者ハ我を接るなり 然ば我を信する此小子の一人

を礙かする者ハ磨石をその頭に懸られて海の深に沈られん方なほ益なる

べし 此世ハ禍なる哉そハ礙かする事をすればなり礙く事ハ必ず來らん然

ば礙を來らす者ハ禍なる哉 若し爾の手なんぢの足おのれを礙かさば斷

て之を棄て兩手兩足ありて盡ざる火に投入られんよりハ跛またハ殘缺にて

生に入ら善なり 爾の眼おのれを礙かさば拔出して之を棄て兩眼あ

りて地獄の火に投入られんよりハ二眼にて生に入ら善なり 爾曹この

小子の一人をも慎み父輕視なけれ我なんぢらに告ん彼等が天の使者ハ天

よりありて天に在す吾父の面を常々觀ばなり 十一 それ人の子ハ亡たる者を救

はん爲に來れり 爾曹いかに意ふヤ人もし百匹の羊あらんに其一匹まよ

はら九十九を山に置ゆきて迷し一を尋ざる乎 若たづれて之に遇バ我ま

ふかに爾曹に告ん迷ざる九十九の者よりも尙その一を喜ばん 是の如く

ふの小子の一人の亡るハ天に在す爾曹が父の尊旨に非ず 十二 もし兄弟なん

ぢに罪を犯バその獨ある時に往て諫よもし爾の言を聽バその兄弟を復べ

し 十三 もし聽バ爾三人の口に由て證をなし凡の言を定んが爲に一人二人

を伴ひ往 十四 もし彼等にも聽すバ教會に告よもし教會に聽すバ之を異邦人

かつ稅吏のごとき者さすべし 十五 我まふかに爾曹に告ん凡そ爾曹が地に於

て繫ふさハ天に於てもつなき爾曹が地に於て釋ふさハ天に於ても釋べし 十六 我

また爾曹に告んもし爾曹のうち二人のもの地に於て心を合せ何事にても

求ば天に在す吾父ハ彼等の爲に之を成たまふべし 十七 蓋わが名の爲に二三

人の集れる處にハ我も其中に在バなり 十八 厥時ペテロイエスに來りて曰

七モ 路一〇九
七約二〇四
七路十五〇四至
イ 路十五〇三
口 路十五〇三
二ハ 路十五〇三
ホ 路十五〇三
ト 路十五〇三

シ 路七〇一
正 太五〇九
至四十七
ミ 路九〇四
メ 路九〇四
ニ 路九〇四
キ 路九〇四
サ 路九〇四

ナ 路十七〇三四
大六十五〇十九
路十七〇三十二

マ 利十五〇廿九
王下四〇八

けるハ主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦へきハ七次まで乎 イエ
ス彼に曰けるハ爾に七次ハ言じ七次を七十倍せよ 是故に天國ハ王
の臣と會計を調んとするガ如し 調へ始るとき千萬金の負債たる者を
王に曳來りしに 債ひ方なかりければ之に命じて其身その妻孥とありゆ
る所有をみな鬻て償へせ曰り 三天 其の臣俯伏て拜し曰けるハ請われを寛
給はと皆償ふべし 是に於てその臣の主憐みて之を釋その負債を免した
り 其臣いでより銀一百の負債たる友に遇ければ之を執へ喚な
り 負債を返せせ曰 其の友足下に俯伏て求ひひけるハ我を寛し給はと皆
償ふべし 然るに之を肯はずして往その負債を償ふまで彼を獄に入ぬ
外の友その爲る事を見て甚だ哀み往て此事を皆その主に告ぐれば 主
れを召て曰けるハ惡き臣よ爾われに求りに因て我その負債を悉く免した
り 我なんぢを憐みし如く爾も亦友を憐むべきに非ずや 其の主いかり
て負債をみな償ふまで彼を獄吏に付せり 若おのく 其心より兄弟を赦

路十七〇廿二

ナ 大六〇二十
四十五
路十七〇十三

カ 大十二〇十五

マ 可十〇三十五

レ 創一〇廿七

子 創二〇廿四
七〇二至四
馬二〇二至四
路十七〇二至

ラ 大五〇廿二
路十六〇十八
路十七〇十九

ム 路十七〇二七

すば我が天の父も亦なんぢらに此の如く行給ふべし
イニス此等の事を言畢りしときガリラヤを去てヨルダンの外ニ
ガヤの境に至りけるに 多の人々從ひしかば此處にて彼等を醫し給へり
三 パリサイの人きたりてイエスを試み曰けるハ人なへの故に係らず其妻
を出すハ宜か 答て彼等に曰けるハ元始に人を造り給ひし者ハ之を男女
に造れり 是故に人父母を離れて其婦に合二人のもの一體と爲なり云
るを未だ讀ざるか 然ばはや二にハ非ず一體なり神の合せ給へる者ハ人
ふれを離すべからず イエスに曰けるハ然ば離縁狀を予て妻を出せしモ
一セが命ぜしハ何ぞや 彼等に曰けるハモーセハ爾曹の心の不情に因て
妻を出すふさを容したる也されど元始ハ如此あらざりき 我なんぢらに
告んも一姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者ハ姦淫を行ふなり又
いだされたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり 弟子等イエスに曰けるハ若
し人妻に於て此の如くば娶ざるに若す 彼等に曰けるハ此言ハ人みな受

井ノ 卷九〇七
 九〇七
 九〇八
 九〇九
 九一〇
 九一一
 九一二
 九一三
 九一四
 九一五
 九一六
 九一七
 九一八
 九一九
 九二〇
 九二一
 九二二
 九二三
 九二四
 九二五
 九二六
 九二七
 九二八
 九二九
 九三〇
 九三一
 九三二
 九三三
 九三四
 九三五
 九三六
 九三七
 九三八
 九三九
 九四〇
 九四一
 九四二
 九四三
 九四四
 九四五
 九四六
 九四七
 九四八
 九四九
 九五〇
 九五二
 九五三
 九五四
 九五五
 九五六
 九五七
 九五八
 九五九
 九六〇
 九六一
 九六二
 九六三
 九六四
 九六五
 九六六
 九六七
 九六八
 九六九
 九七〇
 九七一
 九七二
 九七三
 九七四
 九七五
 九七六
 九七七
 九七八
 九七九
 九八〇
 九八一
 九八二
 九八三
 九八四
 九八五
 九八六
 九八七
 九八八
 九八九
 九九〇
 九九一
 九九二
 九九三
 九九四
 九九五
 九九六
 九九七
 九九八
 九九九
 一〇〇〇

納るふと能はず唯賦られたる者のみ之を爲うべし
 十二 それ母の腹より生來たる寺人あり又人にせられたる寺人あり又天國の爲に自らなれる寺人あり之を受納るふとを得ものハ受納べし
 十三 其とき人々イエスの手を按て祈らんふとを求む嬰兒を彼に携來りければ弟子是を阻たり
 十四 イエス曰けるハ嬰兒を容せ我に來るふとを禁しむる勿れ天國に在る者ハ此の如き者なり
 十五 即ち彼等に手を按て此を去ぬ
 十六 或人きたりて彼に曰けるは教師よ我がきりなき生を得んが爲には何の善事を行べきか
 十七 彼に曰けるハ何故われを善と稱や一人の外に善者はなり即ち神なり若し生命に入んご欲は誠を守るべし
 十八 彼ふたへけるハ何かイエス曰けるハ殺す勿れ姦淫する勿れ盜む勿れ妄りの證を立る勿れ
 十九 爾の父と母を敬へ又己の如く爾の隣を愛すべし
 二十 少者かれに曰けるハ是みな我いさけなきより守れるものなり何の虧たるさふる我にある乎
 二十一 イエス彼に曰けるハ全からん事を欲は往て爾が所有を售て貧者に施せ然れば天に於て財ありん而して來り

一 卷八〇七
 八〇七
 八〇八
 八〇九
 八一〇
 八一一
 八一二
 八一三
 八一四
 八一五
 八一六
 八一七
 八一八
 八一九
 八二〇
 八二一
 八二二
 八二三
 八二四
 八二五
 八二六
 八二七
 八二八
 八二九
 八三〇
 八三一
 八三二
 八三三
 八三四
 八三五
 八三六
 八三七
 八三八
 八三九
 八四〇
 八四一
 八四二
 八四三
 八四四
 八四五
 八四六
 八四七
 八四八
 八四九
 八五〇
 八五一
 八五二
 八五三
 八五四
 八五五
 八五六
 八五七
 八五八
 八五九
 八六〇
 八六一
 八六二
 八六三
 八六四
 八六五
 八六六
 八六七
 八六八
 八六九
 八七〇
 八七一
 八七二
 八七三
 八七四
 八七五
 八七六
 八七七
 八七八
 八七九
 八八〇
 八八一
 八八二
 八八三
 八八四
 八八五
 八八六
 八八七
 八八八
 八八九
 八九〇
 八九一
 八九二
 八九三
 八九四
 八九五
 八九六
 八九七
 八九八
 八九九
 九〇〇
 九〇一
 九〇二
 九〇三
 九〇四
 九〇五
 九〇六
 九〇七
 九〇八
 九〇九
 九一〇
 九一一
 九一二
 九一三
 九一四
 九一五
 九一六
 九一七
 九一八
 九一九
 九二〇
 九二一
 九二二
 九二三
 九二四
 九二五
 九二六
 九二七
 九二八
 九二九
 九三〇
 九三一
 九三二
 九三三
 九三四
 九三五
 九三六
 九三七
 九三八
 九三九
 九四〇
 九四一
 九四二
 九四三
 九四四
 九四五
 九四六
 九四七
 九四八
 九四九
 九五〇
 九五二
 九五三
 九五四
 九五五
 九五六
 九五七
 九五八
 九五九
 九六〇
 九六一
 九六二
 九六三
 九六四
 九六五
 九六六
 九六七
 九六八
 九六九
 九七〇
 九七一
 九七二
 九七三
 九七四
 九七五
 九七六
 九七七
 九七八
 九七九
 九八〇
 九八一
 九八二
 九八三
 九八四
 九八五
 九八六
 九八七
 九八八
 九八九
 九九〇
 九九一
 九九二
 九九三
 九九四
 九九五
 九九六
 九九七
 九九八
 九九九
 一〇〇〇

我に従へ 少者の言を聞て憂へ去ぬ彼の産業おほいなりければ也
 二三 イエスその弟子に曰けるは誠に爾曹に告ん富者は天國に入ふと難し
 二四 た爾曹に告ん富者の神の國に入ふよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し
 二五 弟子之を聞て甚く驚き曰けるは然ば誰か救を受べき乎
 二六 イエス彼等を見て曰けるは是人には能はざる所なり然るに神には能はざる所なり
 二七 此ときペテロ答てイエスに曰けるは我儕一切を棄て爾より從へり然ば何を得べき乎
 二八 イエス彼等に曰けるハ我まふとに爾曹に告ん我に從へる爾曹ハ世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐してイエスラエルの十二の支派を鞠べし
 二九 凡て我名の爲に家宅あるハ兄弟あるハ姉妹あるハ父あるハ母あるハ妻あるハ子あるハハ田疇を棄る者ハ百倍を受かつ窮なき生を嗣ん
 三十 多の先なる者ハ後になり後なる者ハ先になるべし
 三十一 第二十二節

それ天國ハ朝はやく出て葡萄園に工人を雇ふ主人の如し
 三十二 工人

三
にハ一日に銀一枚を予んじ約束をなし彼等を葡萄園に遣せり 四
また九時
五
ころ出て街に往く立る者を見て 爾曹も葡萄園にゆけ相當の價を予んじ
六
彼等に曰ければ則ち往り 七
また十二時と三時ころ出て前の如く行り 八
五
時ころ出て又ほかの立る者に遇て曰けるは何ゆゑ終日亦に往く立や
九
之に答て曰けるハ我儕を雇ふ者なきに因てなり彼等に曰けるハ爾曹も葡
十
萄園にゆけ相當の價を得べし 十一
日暮るるとき葡萄園の主人その家宰に曰け
十二
るハ勢力たる者等を呼て後に雇へる者を始し先の者にまで價を給へよ
十三
五時ころに雇はれし者ども來りて銀一枚づゝを受たり 先の者ども來
十四
りて我儕ハ多く受るならんと思ひしに亦銀一枚づゝを受 十六
六れを受て主
十五
人を怨つぶやきけるハ 十七
この後至者の勢力たるハ一時ばかりなるに終日
十八
くるしみを任あつさに當る我儕と均しく之をなせり 十九
主人その一人に答
二十
て曰けるハ友よ我なんぢに不義をせず爾と銀一枚の約束をなしたるに非
二十一
ずや 爾のものを取て往われ亦亦の後至者にも爾の如く予ふべし 二十二
我物

シ
利六〇八
申九〇十五
申九〇十五

五
九〇十五
申九〇十五

三
を以て我おもふ如く行ハ宜らず乎わが善に因て爾の目あらず乎此の如
四
く後の者ハ先に先の者ハ後になるべし 夫よばる者ハ多しと雖も選る
五
者ハ少なり 六
イエスエルサレムに上るとき途間にて人を離れ十二弟子
七
を伴ひて彼等に曰けるハ 八
我等エルサレムに上り人の子は祭司の長と學
九
者等に賣されん彼等六れを死罪に定め 十
また彼等鞭ち十字架に釘ん爲に
十一
異邦人に解すべし 又第三日に甦へるべし 十二
其時セバダイの子等の母そ
十三
の子と偕にイエスに來り拜して彼に求るべき有ければ 十四
之に曰けるハ何
十五
を欲ふかイエスに曰けるは此二人の我子を爾の國に於て一人は爾の右一
十六
人ハ爾の左に坐るべきを命ぜよ 十七
イエス答て曰けるハ爾曹ハ求るべきを
十八
知す爾曹ハ我が飲んじする杯のみ又わが受んじするバプテスマを受得
十九
るや彼等いひけるハ能すべし 二十
イエス彼等に曰けるハ誠に爾曹ハ我が杯
二十一
を飲また我うくるバプテスマを受べし然し我が右左に坐るべきハ我が賜
二十二
べきに非ず只わが父に備られたる者ハ賜らるべし 二十三
十人の弟子六れを聞

ハ
太四〇廿一
太四〇廿二
太四〇廿三
太四〇廿四
太四〇廿五
太四〇廿六
太四〇廿七
太四〇廿八
太四〇廿九
太四〇卅一

ト
太五〇廿四
太五〇廿五
太五〇廿六
太五〇廿七
太五〇廿八
太五〇廿九
太五〇卅一

十二 太廿三〇八至
 十三 可九〇廿三至
 十四 彼前五〇三
 十五 可十〇四十六
 十六 王四八〇廿五
 十七 太九〇廿七至
 十八 可十〇四十六
 十九 王四八〇廿五
 二十 太九〇廿七至
 二十一 可十〇四十六
 二十二 王四八〇廿五
 二十三 太九〇廿七至
 二十四 可十〇四十六
 二十五 王四八〇廿五
 二十六 太九〇廿七至
 二十七 可十〇四十六
 二十八 王四八〇廿五
 二十九 太九〇廿七至
 三十 可十〇四十六
 三十一 王四八〇廿五
 三十二 太九〇廿七至
 三十三 可十〇四十六
 三十四 王四八〇廿五
 三十五 太九〇廿七至
 三十六 可十〇四十六
 三十七 王四八〇廿五
 三十八 太九〇廿七至
 三十九 可十〇四十六
 四十 王四八〇廿五

二人の兄弟を慎れり 二五 イエス彼等を召て曰けるハ異邦の領主はその民
 を主とせり大 人にもは彼等の上に權を操ふれ爾曹が知さる也 然るに爾
 曹の中にてハ然すべからず爾曹のうち大ならん欲ふ者ハ爾曹に役る者
 者となるべし 二七 また爾曹のうち首たらん欲ふ者ハ爾曹の僕となるべし
 此の如く人の子の來るも人を役ふ爲にハ非ず反て人に役はれ又おほく
 の人に代て生命を予その贖とならん爲なり 二九 彼等エリコを出し時おほ
 くの人々イエスに従へり 三十 二人の賢者路の旁に坐をりしがイエスの過る
 ぎ聞て呼叫いひけるハダビテの裔主よ我儕を憫み給へ 衆人おほきに黙れ
 ぎ戒むれども愈さけび曰けるハダビテの裔主よ我儕を憫みたまへ 三一 イエスに
 ス立止て之を呼びひけるハ爾曹われに何を爲られんか願ふや 三二 イエスに
 曰けるハ主よ我儕目の啓んふを願ふ 三三 イエス憫みて其目に手を按けれ
 ば直に見ふを得イエスに従へり 三四
 第二十一節 橄欖山のベツサゲに至りエルサレムに近ける時イエス

目 亞九〇九
 十六 約十二〇十五
 十七 王下九〇十三
 十八 利廿三〇四十三
 十九 約十二〇十三
 二十 詩百十八〇廿
 二十一 太廿三〇廿九
 二十二 路七〇十六
 二十三 約六〇十四
 二十四 可十一〇十五
 二十五 路十九〇四十五
 二十六 約十二〇十三
 二十七 五至四〇十八
 二十八 申十四〇廿四
 二十九 利一〇十四
 三十 耶七〇十一
 三十一 耶七〇十一
 三十二 耶七〇十一
 三十三 耶七〇十一
 三十四 耶七〇十一
 三十五 耶七〇十一
 三十六 耶七〇十一
 三十七 耶七〇十一
 三十八 耶七〇十一
 三十九 耶七〇十一
 四十 耶七〇十一

二人の弟子を遣さんとして 彼等に曰けるハ爾曹むかふの村に往やがて
 聚たる驢馬の其子と借にあるに遇ん夫を解て我に牽きたれ 若んちら
 に何さか言ものあらば主の用なりと曰さらば直に之を遣すべし 預言者
 の言に視よ爾の王ハ柔和にして驢馬すなほち驢馬の子に乗なんちに來る
 べきシチンの女に告よと云るに應せん爲に如此なせる也 弟子ゆきてイ
 エスの命ぜり如くなし 驢馬と其子を牽きたり己の衣をその上に置けれ
 ばイエスおほきに乗り 衆人おほくハ其衣を途に布あるひハ樹枝を伐て途
 に布ぬ かつ前にゆき後に從ふ人々呼いひけるハダビテの裔ホザナよ主
 の名に託て來る者ハ福なり至上處にホザナよ 十 イエスエルサレムに至
 れるとき都城おほりて疎動いひけるハ是誰ぞや 衆人いひけるハ此ハガ
 リヤのナザレより出たる預言者イエスなり 十二 イエス神の殿に入て其
 中なる凡の寶買する者を逐出 兎銀者の案鶴をうる者の椅子を倒し 彼
 等に曰けるハ我家は祈禱の家と稱らるべしと録さる然るに爾曹おほきに盜

十四 賊の巢となせり 警者跛者の人々殿に入てイエスに來りければ之を登し
十五 祭司の長と學者たち其行たまへる奇事を見また兒童輩の殿にて呼は
十六 りタビテの裔ホザナよと云を聞て怒を合 イエスに曰けるは彼等が言ふ
十七 さを聞やイエス答て曰けるは然り嬰兒乳哺者の口に讚美を備たりと録さ
十八 れしを未だ讀ざる乎 遂に彼等を離れ都城を出てベタニヤに往そふに宿
十九 れり ○ 翌あさ都城へ返るさき飢ければ 路の旁にある一の無花果の樹
二十 を見て其處に來りしに葉の他に何も見ざりしかば今よりのち永久も果を
二十一 結ぶふさを得ざれと之に曰たまひければ無花果立刻に枯ぬ 弟子これを
二十二 見て奇み曰けるは無花果の枯るふさ何に速や イエス答て彼等に曰ける
二十三 は我まふさに爾曹に告んもし信仰ありて疑はずば此無花果に於るが如耳
二十四 ならず此山に命じ此より移されて海に入よと云さも亦成ん 且なんぢら
二十五 信じて祈らば求ふ所ふさく得べし イエス殿に入て教たるさき祭司
二十六 の長および民の長老たち來り曰けるは何の權威を以て此事をなすや誰か

マ 馬太七〇六
コ 馬太七〇七
ロ 馬太七〇八
ハ 馬太七〇九
ニ 馬太七一〇
ノ 馬太七一一
ヘ 馬太七一二
ト 馬太七一三
チ 馬太七一四
リ 馬太七一五
レ 馬太七一六
ヲ 馬太七一七
ヲ 馬太七一八
ヲ 馬太七一九
ヲ 馬太七二〇
ヲ 馬太七二一
ヲ 馬太七二二
ヲ 馬太七二三
ヲ 馬太七二四
ヲ 馬太七二五
ヲ 馬太七二六
ヲ 馬太七二七
ヲ 馬太七二八
ヲ 馬太七二九
ヲ 馬太七三〇
ヲ 馬太七三一
ヲ 馬太七三二
ヲ 馬太七三三
ヲ 馬太七三四
ヲ 馬太七三五
ヲ 馬太七三六
ヲ 馬太七三七
ヲ 馬太七三八
ヲ 馬太七三九
ヲ 馬太七四〇
ヲ 馬太七四一
ヲ 馬太七四二
ヲ 馬太七四三
ヲ 馬太七四四
ヲ 馬太七四五
ヲ 馬太七四六
ヲ 馬太七四七
ヲ 馬太七四八
ヲ 馬太七四九
ヲ 馬太七五〇
ヲ 馬太七五一
ヲ 馬太七五二
ヲ 馬太七五三
ヲ 馬太七五四
ヲ 馬太七五五
ヲ 馬太七五六
ヲ 馬太七五七
ヲ 馬太七五八
ヲ 馬太七五九
ヲ 馬太七六〇
ヲ 馬太七六一
ヲ 馬太七六二
ヲ 馬太七六三
ヲ 馬太七六四
ヲ 馬太七六五
ヲ 馬太七六六
ヲ 馬太七六七
ヲ 馬太七六八
ヲ 馬太七六九
ヲ 馬太七七〇
ヲ 馬太七七一
ヲ 馬太七七二
ヲ 馬太七七三
ヲ 馬太七七四
ヲ 馬太七七五
ヲ 馬太七七六
ヲ 馬太七七七
ヲ 馬太七七八
ヲ 馬太七七九
ヲ 馬太七八〇
ヲ 馬太七八一
ヲ 馬太七八二
ヲ 馬太七八三
ヲ 馬太七八四
ヲ 馬太七八五
ヲ 馬太七八六
ヲ 馬太七八七
ヲ 馬太七八八
ヲ 馬太七八九
ヲ 馬太七九〇
ヲ 馬太七九一
ヲ 馬太七九二
ヲ 馬太七九三
ヲ 馬太七九四
ヲ 馬太七九五
ヲ 馬太七九六
ヲ 馬太七九七
ヲ 馬太七九八
ヲ 馬太七九九
ヲ 馬太八〇〇
ヲ 馬太八〇一
ヲ 馬太八〇二
ヲ 馬太八〇三
ヲ 馬太八〇四
ヲ 馬太八〇五
ヲ 馬太八〇六
ヲ 馬太八〇七
ヲ 馬太八〇八
ヲ 馬太八〇九
ヲ 馬太八一〇
ヲ 馬太八一一
ヲ 馬太八一二
ヲ 馬太八一三
ヲ 馬太八一四
ヲ 馬太八一五
ヲ 馬太八一六
ヲ 馬太八一七
ヲ 馬太八一八
ヲ 馬太八一九
ヲ 馬太八二〇
ヲ 馬太八二一
ヲ 馬太八二二
ヲ 馬太八二三
ヲ 馬太八二四
ヲ 馬太八二五
ヲ 馬太八二六
ヲ 馬太八二七
ヲ 馬太八二八
ヲ 馬太八二九
ヲ 馬太八三〇
ヲ 馬太八三一
ヲ 馬太八三二
ヲ 馬太八三三
ヲ 馬太八三四
ヲ 馬太八三五
ヲ 馬太八三六
ヲ 馬太八三七
ヲ 馬太八三八
ヲ 馬太八三九
ヲ 馬太八四〇
ヲ 馬太八四一
ヲ 馬太八四二
ヲ 馬太八四三
ヲ 馬太八四四
ヲ 馬太八四五
ヲ 馬太八四六
ヲ 馬太八四七
ヲ 馬太八四八
ヲ 馬太八四九
ヲ 馬太八五〇
ヲ 馬太八五一
ヲ 馬太八五二
ヲ 馬太八五三
ヲ 馬太八五四
ヲ 馬太八五五
ヲ 馬太八五六
ヲ 馬太八五七
ヲ 馬太八五八
ヲ 馬太八五九
ヲ 馬太八六〇
ヲ 馬太八六一
ヲ 馬太八六二
ヲ 馬太八六三
ヲ 馬太八六四
ヲ 馬太八六五
ヲ 馬太八六六
ヲ 馬太八六七
ヲ 馬太八六八
ヲ 馬太八六九
ヲ 馬太八七〇
ヲ 馬太八七一
ヲ 馬太八七二
ヲ 馬太八七三
ヲ 馬太八七四
ヲ 馬太八七五
ヲ 馬太八七六
ヲ 馬太八七七
ヲ 馬太八七八
ヲ 馬太八七九
ヲ 馬太八八〇
ヲ 馬太八八一
ヲ 馬太八八二
ヲ 馬太八八三
ヲ 馬太八八四
ヲ 馬太八八五
ヲ 馬太八八六
ヲ 馬太八八七
ヲ 馬太八八八
ヲ 馬太八八九
ヲ 馬太八九〇
ヲ 馬太八九一
ヲ 馬太八九二
ヲ 馬太八九三
ヲ 馬太八九四
ヲ 馬太八九五
ヲ 馬太八九六
ヲ 馬太八九七
ヲ 馬太八九八
ヲ 馬太八九九
ヲ 馬太九〇〇
ヲ 馬太九〇一
ヲ 馬太九〇二
ヲ 馬太九〇三
ヲ 馬太九〇四
ヲ 馬太九〇五
ヲ 馬太九〇六
ヲ 馬太九〇七
ヲ 馬太九〇八
ヲ 馬太九〇九
ヲ 馬太九一〇
ヲ 馬太九一一
ヲ 馬太九一二
ヲ 馬太九一三
ヲ 馬太九一四
ヲ 馬太九一五
ヲ 馬太九一六
ヲ 馬太九一七
ヲ 馬太九一八
ヲ 馬太九一九
ヲ 馬太九二〇
ヲ 馬太九二一
ヲ 馬太九二二
ヲ 馬太九二三
ヲ 馬太九二四
ヲ 馬太九二五
ヲ 馬太九二六
ヲ 馬太九二七
ヲ 馬太九二八
ヲ 馬太九二九
ヲ 馬太九三〇
ヲ 馬太九三一
ヲ 馬太九三二
ヲ 馬太九三三
ヲ 馬太九三四
ヲ 馬太九三五
ヲ 馬太九三六
ヲ 馬太九三七
ヲ 馬太九三八
ヲ 馬太九三九
ヲ 馬太九四〇
ヲ 馬太九四一
ヲ 馬太九四二
ヲ 馬太九四三
ヲ 馬太九四四
ヲ 馬太九四五
ヲ 馬太九四六
ヲ 馬太九四七
ヲ 馬太九四八
ヲ 馬太九四九
ヲ 馬太九五〇
ヲ 馬太九五二
ヲ 馬太九五三
ヲ 馬太九五四
ヲ 馬太九五五
ヲ 馬太九五六
ヲ 馬太九五七
ヲ 馬太九五八
ヲ 馬太九五九
ヲ 馬太九六〇
ヲ 馬太九六一
ヲ 馬太九六二
ヲ 馬太九六三
ヲ 馬太九六四
ヲ 馬太九六五
ヲ 馬太九六六
ヲ 馬太九六七
ヲ 馬太九六八
ヲ 馬太九六九
ヲ 馬太九七〇
ヲ 馬太九七一
ヲ 馬太九七二
ヲ 馬太九七三
ヲ 馬太九七四
ヲ 馬太九七五
ヲ 馬太九七六
ヲ 馬太九七七
ヲ 馬太九七八
ヲ 馬太九七九
ヲ 馬太九八〇
ヲ 馬太九八一
ヲ 馬太九八二
ヲ 馬太九八三
ヲ 馬太九八四
ヲ 馬太九八五
ヲ 馬太九八六
ヲ 馬太九八七
ヲ 馬太九八八
ヲ 馬太九八九
ヲ 馬太九九〇
ヲ 馬太九九一
ヲ 馬太九九二
ヲ 馬太九九三
ヲ 馬太九九四
ヲ 馬太九九五
ヲ 馬太九九六
ヲ 馬太九九七
ヲ 馬太九九八
ヲ 馬太九九九
ヲ 馬太一〇〇〇

一 の權威を爾に予しや イエス答て彼等に曰けるは我も一言なんぢらに問
二 ん我にその事を告なば我も何の權威をもて之を行さいふふさを爾曹に曰
三 べし ○ ハ子のバプテスマハ何處よりぞ天よりか人よりか彼等たがひに
四 論じ曰けるは若し天よりと云ば然ば何ゆゑ信ぜざるかと云ん 一人よ
五 りと云ば我僂民を畏る蓋みな日ハ子を預言者と爲ばなり 遂に答て知す
六 ざ曰イエス彼等に曰けるは我も何の權威を以て之を行か爾曹に語らじ
七 爾曹いかに意ふや或人二人の子ありしが長子に來りて曰けるハ子よ今日
八 わが葡萄園に往て働け 答て否と曰しがのち悔て往たり 又次子にも
九 前の如く曰けるに答て君よ我往べしと曰しが遂に往ざりき 此二人のも
十 の孰か父の旨に遵ひし彼等いひけるハ長子なりイエス彼等に曰けるハ誠
十一 に爾曹に告ん税吏および娼妓ハ爾曹より先に神の國に入べし 夫ハ子
十二 義道をもて來りしに爾曹ふれを信ぜず税吏娼妓ハ之を信じたり爾曹ふれ
十三 を見てなほ悔改めず彼を信ぜざりき ○ また一の警を聞ある家の主人葡

キ 太九〇九
キ 太九一〇
キ 太九一一
キ 太九一二
キ 太九一三
キ 太九一四
キ 太九一五
キ 太九一六
キ 太九一七
キ 太九一八
キ 太九一九
キ 太九二〇
キ 太九二一
キ 太九二二
キ 太九二三
キ 太九二四
キ 太九二五
キ 太九二六
キ 太九二七
キ 太九二八
キ 太九二九
キ 太九三〇
キ 太九三一
キ 太九三二
キ 太九三三
キ 太九三四
キ 太九三五
キ 太九三六
キ 太九三七
キ 太九三八
キ 太九三九
キ 太九四〇
キ 太九四一
キ 太九四二
キ 太九四三
キ 太九四四
キ 太九四五
キ 太九四六
キ 太九四七
キ 太九四八
キ 太九四九
キ 太九五〇
キ 太九五二
キ 太九五三
キ 太九五四
キ 太九五五
キ 太九五六
キ 太九五七
キ 太九五八
キ 太九五九
キ 太九六〇
キ 太九六一
キ 太九六二
キ 太九六三
キ 太九六四
キ 太九六五
キ 太九六六
キ 太九六七
キ 太九六八
キ 太九六九
キ 太九七〇
キ 太九七一
キ 太九七二
キ 太九七三
キ 太九七四
キ 太九七五
キ 太九七六
キ 太九七七
キ 太九七八
キ 太九七九
キ 太九八〇
キ 太九八一
キ 太九八二
キ 太九八三
キ 太九八四
キ 太九八五
キ 太九八六
キ 太九八七
キ 太九八八
キ 太九八九
キ 太九九〇
キ 太九九一
キ 太九九二
キ 太九九三
キ 太九九四
キ 太九九五
キ 太九九六
キ 太九九七
キ 太九九八
キ 太九九九
キ 太一〇〇〇

キ 可十二〇五至
路廿七
至四十四

ニ 路廿三〇三

ノミ 路十四〇六
可十二〇四
路廿〇四

エ 尼八〇四至八
馬二〇七

ヒ 路二〇九至
路十一〇四

モ 路十五〇五
太六〇二五

ズ 路十五〇八
民十五〇八
申六〇八
十一〇八
廿一〇八

第三十三章 厥時イエス人々を弟子に告て曰けるは 學者とパリサイの人ハモーセの位に坐す 故に凡て彼等が爾曹に言さふるを守て行ふべし 然し彼等が行ふ所を爲ふと勿れ蓋かれらハ言のみにして行はざれば也 また彼等ハ重かつ負がたき荷を括て人の肩に負せ己は一の指をもて之を動すふとすら好す 彼等の行ハ凡て人に見れんが爲にする也その佩經を幅濶し其衣の裾を大にし また筵席の上座會堂の高座 市上の問安人々

イ 太六〇八九
路八〇四至
約三〇一

ロ 太六〇六六
路九〇七
路八〇七
路八〇七

ハ 路十一〇五
路四〇七
五〇七八
五〇八

ニ 路十一〇五
路四〇七
五〇七八
五〇八

ホ 可十二〇四
路廿〇四
路廿〇七

ト 太十五〇十四
約九〇九
太五〇三
四

よりラビラビと稱られんふとを好む 爾曹ハラビの稱を受るふと勿れ蓋なんちらの師ハ一人すなほちキリストなり爾曹ハみな兄弟なり 九 また地にある者を父と稱るふと勿れ爾曹の父ハ一人すなほち天に在す者なり 十 また導師の稱を受るふと勿れ蓋なんちらの導師ハ一人すなほちキリストなり 十一 爾曹のうち大なる者ハ爾曹の僕と爲べし 凡そ自己を高する者ハ卑せられ自己を卑する者ハ高せられん 十三 噫なんちら禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人ハ蓋なんちら天國を人の前に閉て自ら入す且いらんとする者の入をも許さざれば也 十四 噫なんちら禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人ハ蓋なんちら廢婦の家を吞いつはりて長き祈をなす之に由て爾曹最も重刑を受けければ也 十五 あく禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人ハ蓋なんちら徧く水陸を歴巡り一人をも己が宗旨に引入んす既に引入れば之を爾曹よりも倍したる地獄の子と爲り 十六 噫なんちら禍なるかな偽善なる相と爾曹ハいふ人も一殿を指て賢はと事なり殿の金を指

ル 百、廿九〇廿
 ヌ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 マ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七

れバ也 三五 われ預じめ爾曹に之を告 若キリスト野に在さいふ者あるとも
 出る勿れ室に在さい云もの有とも信する勿れ 二七 その電の東より出て西にま
 で肉くが如く人の子も来るべけれバ也 二八 それ屍のある處にハ驚あつたら
 ん 二九 此等の日の患難の後たちには日ハ晦く月ハ光を失ひ星ハ空よりおち
 天の勢ひ震ふべ 三十 其さき人の子の兆天に現るまた地上にある諸族ハ哭
 哀み且人の子の權威さ大なる榮光をもて天の雲に乗來るを見ん 三二 又その
 使等を遣し一箇の大なる聲を出しめて天の此極より彼極まで四方より其選
 れし者を集むべ 三三 夫なんぢら無花果樹に由て譬を學べ其枝すでに柔
 かにして葉萌めば夏の近きを知 此の如く爾曹も凡て此等の事を見れば時
 ちかく門口に至るさ知 三四 われ誠に爾曹に告ん此等の事ささくく成まで
 此民ハ廢ざるべ 三五 天地ハ廢ん然ぞ我音ハ廢じ 三六 その日その時を知もの
 ハ唯わが父のみ天の使者も誰もまら者なし 三七 ノアの時の如く人の子の來
 るも亦然らん 三八 それ洪水の前ノア方舟にいる日までハ人々飲食嫁娶など
 して 洪水の來り悉く之を滅すまで知ざりき此の如く人の子も亦きたらん
 居んに一人ハさられ一人は遺さるべ 三九 是故に爾曹の主いづれの時きた
 るかを知らざれば怠らすして守れ 爾曹これを知も一家の主人ぬすびさ何
 の時きたるかを知ば其家を守て破らすまじ 四〇 然バ爾曹もまた預備せよ意
 ざる時に人の子きたらんさ爲ばなり 四一 時に及て糧を彼等に予さする爲に
 主人がその僕等の上に立たる忠義にして智僕は誰なる乎 四二 その主人の來
 らん時かくの如く勤るを見るハ僕ハ福なり 四三 我まここに爾曹に告ん其所
 有をみな彼に督らすべ 四四 若その惡僕おのが心に我が主人の來るは遅ら
 んさ思ひ 四五 その朋輩を打毬きて酒に醉たる者どもと共に飲食し始なば 五〇
 その僕の主人おもはざるの日いらざるの時に來りて 五一 之を斬殺し其報を
 偽善者と同うすべ 五二 其處にて哀哭切齒すること有ん

ナ 百、廿九〇廿七
 マ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七
 ナ 百、廿九〇廿七
 ヲ 百、廿九〇廿七

して 洪水の來り悉く之を滅すまで知ざりき此の如く人の子も亦きたらん
 居んに一人ハさられ一人は遺さるべ 三九 是故に爾曹の主いづれの時きた
 るかを知らざれば怠らすして守れ 爾曹これを知も一家の主人ぬすびさ何
 の時きたるかを知ば其家を守て破らすまじ 四〇 然バ爾曹もまた預備せよ意
 ざる時に人の子きたらんさ爲ばなり 四一 時に及て糧を彼等に予さする爲に
 主人がその僕等の上に立たる忠義にして智僕は誰なる乎 四二 その主人の來
 らん時かくの如く勤るを見るハ僕ハ福なり 四三 我まここに爾曹に告ん其所
 有をみな彼に督らすべ 四四 若その惡僕おのが心に我が主人の來るは遅ら
 んさ思ひ 四五 その朋輩を打毬きて酒に醉たる者どもと共に飲食し始なば 五〇
 その僕の主人おもはざるの日いらざるの時に來りて 五一 之を斬殺し其報を
 偽善者と同うすべ 五二 其處にて哀哭切齒すること有ん

第二十五節 其さき天國ハ燈を執て新耶を迎に出る十人の童女に比ふべ

二 其の内の五人ハ智ク五人ハ愚ナリ 愚なる者ハ其燈をさるに油を携へざりしが 智き者ハ其燈を兼に油を器に携へたり 五 新郎おそかりければ 皆假寐して眠れり 夜半ばに叫びて新郎きたりぬ出て迎よと呼聲ありければ 七 この童女ども皆おきて其燈を整へたるに 八 愚なるもの智き者に曰けるハ我儕の燈熄んとす願くは爾曹の油を我儕に分予よ 智きもの答て曰けるハ我儕と爾曹とに恐クハ足まじ爾曹賣者に往て己が爲に買われら買んさて往よと云新耶きたりければ既に備たる者ハ之と併に婚筵に入らば門ハ閉られたり 十二 斯て後その餘の童女きたりて曰けるハ主よ主よ我儕の爲に開たまへ 十三 答て我まことに爾曹に告ん我ハ爾曹を知ざらざり 然らば忘らむして守れ爾曹その日その時を知らざれば也 十四 また天國ハ或人の旅行せんとして其僕をよび所有を彼等に預るが如し 十五 各人の智慧に従ひて或者にハ銀五千或者には二千或者にハ一千を予へおき直に旅行せり 十六 五千の銀を受し者ハ往て之を貿易し他に五千を得たり 十七 二

三 約十四〇三
四 約十四〇三
五 約十四〇三
六 約十四〇三
七 約十四〇三
八 約十四〇三
九 約十四〇三
十 約十四〇三
十一 約十四〇三
十二 約十四〇三
十三 約十四〇三
十四 約十四〇三
十五 約十四〇三
十六 約十四〇三
十七 約十四〇三
十八 約十四〇三
十九 約十四〇三
二十 約十四〇三

一 約十四〇三
二 約十四〇三
三 約十四〇三
四 約十四〇三
五 約十四〇三
六 約十四〇三
七 約十四〇三
八 約十四〇三
九 約十四〇三
十 約十四〇三
十一 約十四〇三
十二 約十四〇三
十三 約十四〇三
十四 約十四〇三
十五 約十四〇三
十六 約十四〇三
十七 約十四〇三
十八 約十四〇三
十九 約十四〇三
二十 約十四〇三

千を受し者もまた他に二千を得たり 十八 然るに一千を受し者は往て地を掘その主の金を藏せり 十九 歴久て後その僕等の主かへりて彼等と會計せしに 二十 五千の銀を受し者その他に五千の銀を携來りて主よ我に五千の銀を預けしが他に五千の銀を儲たりと曰ければ 二十一 主かれに曰けるハあき善かつ忠なる僕ぞ爾算なる事に忠なり我なんぢに多ものを督らせん爾の主人の歡樂に入れ 二十二 二千の銀を受し者きたりて主よ我に二千の銀を預けしが他に二千の銀を儲たりと曰ければ 二十三 主かれに曰けるハあき善且忠なる僕ぞなんぢ算なる事に忠なり我なんぢに多ものを督らせん爾の主人の歡樂に入れ 二十四 また一千の銀を受し者きたりて曰けるは主よ爾ハ嚴人にて播ざる處より後ちらさむる處より歛ることを我ハ知 故に我懼てゆき主の一千の銀を地に藏し置り今なんぢ爾の物を得たり 二十六 その主こたへて曰けるは惡かつ惰れる僕ぞ爾わが播ざる處よりかり散さむる處より歛ることを知 二十七 然らば我が金を兌換舖に預置べきなり然らば我が歸たるとき本と利とを受

一 約十四〇三
二 約十四〇三
三 約十四〇三
四 約十四〇三
五 約十四〇三
六 約十四〇三
七 約十四〇三
八 約十四〇三
九 約十四〇三
十 約十四〇三
十一 約十四〇三
十二 約十四〇三
十三 約十四〇三
十四 約十四〇三
十五 約十四〇三
十六 約十四〇三
十七 約十四〇三
十八 約十四〇三
十九 約十四〇三
二十 約十四〇三

七 太十三〇二
 八 太十三〇三
 九 太十三〇四
 十 太十三〇五
 十一 太十三〇六
 十二 太十三〇七
 十三 太十三〇八
 十四 太十三〇九
 十五 太十三〇一〇
 十六 太十三〇一一
 十七 太十三〇一二
 十八 太十三〇一三
 十九 太十三〇一四
 二十 太十三〇一五
 二十一 太十三〇一六
 二十二 太十三〇一七
 二十三 太十三〇一八
 二十四 太十三〇一九
 二十五 太十三〇二〇
 二十六 太十三〇二一
 二十七 太十三〇二二
 二十八 太十三〇二三
 二十九 太十三〇二四
 三十 太十三〇二五
 三十一 太十三〇二六
 三十二 太十三〇二七
 三十三 太十三〇二八
 三十四 太十三〇二九
 三十五 太十三〇三〇
 三十六 太十三〇三一
 三十七 太十三〇三二
 三十八 太十三〇三三
 三十九 太十三〇三四
 四十 太十三〇三五
 四十一 太十三〇三六
 四十二 太十三〇三七
 四十三 太十三〇三八
 四十四 太十三〇三九
 四十五 太十三〇四〇
 四十六 太十三〇四一
 四十七 太十三〇四二
 四十八 太十三〇四三
 四十九 太十三〇四四
 五十 太十三〇四五

二八 是故に彼の一千の銀を取て十千の銀ある者に予よ、それ有る者ハ予られて尙あまりあり無有者ハその有る物をも奪る也、無益なる僕を外の幽暗に逐やれ其處にて哀哭切齒すること有ん。○ 人の子おのれの榮光をもて諸の聖使を率來る時ハその榮光の位に坐し、萬國の民をその前に集め羊を牧者の綿羊ミ山羊ミを別が如く彼等を別ち、綿羊をその右に山羊をその左に置べし。斯て王その右に在る者に云ん吾父に惡る者よ來りて創世より以來なんぢらの爲に備られたる國を嗣蓋なんぢら我が飢し時われに食せ渴しき我に飲せ旅せし時われを宿らせ、裸なりし時われに衣せ病しき我をみまひ獄に在しき我に就ればなり。是に於て義者かれに答て云ん主よ何時なんぢの飢たるを見て食せまた渴たるに飲し、何時主の旅したるを見て宿らせ又裸なるに衣しや、何時主の病また獄に在を見て爾に至りし乎。王こたへて彼等に曰ん我まことに爾曹に告ん既に爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるハ即ち我に行しなり。

一 太十三〇二
 二 太十三〇三
 三 太十三〇四
 四 太十三〇五
 五 太十三〇六
 六 太十三〇七
 七 太十三〇八
 八 太十三〇九
 九 太十三〇一〇
 十 太十三〇一一
 十一 太十三〇一二
 十二 太十三〇一三
 十三 太十三〇一四
 十四 太十三〇一五
 十五 太十三〇一六
 十六 太十三〇一七
 十七 太十三〇一八
 十八 太十三〇一九
 十九 太十三〇二〇
 二十 太十三〇二一
 二十一 太十三〇二二
 二十二 太十三〇二三
 二十三 太十三〇二四
 二十四 太十三〇二五
 二十五 太十三〇二六
 二十六 太十三〇二七
 二十七 太十三〇二八
 二十八 太十三〇二九
 二十九 太十三〇三〇
 三十 太十三〇三一
 三十一 太十三〇三二
 三十二 太十三〇三三
 三十三 太十三〇三四
 三十四 太十三〇三五
 三十五 太十三〇三六
 三十六 太十三〇三七
 三十七 太十三〇三八
 三十八 太十三〇三九
 三十九 太十三〇四〇
 四十 太十三〇四一
 四十一 太十三〇四二
 四十二 太十三〇四三
 四十三 太十三〇四四
 四十四 太十三〇四五
 四十五 太十三〇四六
 四十六 太十三〇四七
 四十七 太十三〇四八
 四十八 太十三〇四九
 四十九 太十三〇五〇
 五十 太十三〇五一

四一 迷にまた左に在る者に曰ん割せらるべき者よ我を離れて惡魔と其使者の爲に備たる燄なる火に入し蓋なんぢら我が飢し時われに食せ渴しき我に飲せず、旅せし時われを宿らせす裸なりし時われに衣す病また獄に在し時われを顧されば也。是に於て彼等また答て曰ん主よ何時なんぢの飢また渴また旅し又裸また病また獄に在を見て主に事ざりし乎。其さき王こたへて彼等にいハん我まことに爾曹に告ん此最微者の一人に行ハざるハ即ち我に行ハざりし也。此等の者ハ窮なき刑罰にいり義者ハ窮なき生命に入べし。

第二十三章 倍イエスこの諸の言を言竟りて其弟子に曰けるハ、二日のうち逾越節なるハ爾曹が知ところ也、それれ人の子ハ十字架に釘られん爲に付さるべし。此とき祭司の長および民の長老等カヤハと云る祭司の長の邸の庭に集り、詭計をもてイエスを執へ殺さんと共々に謀いひけるハ、祭の日にハ行べからず恐くハ民の中に亂おこらん。○ イエスベタニヤの猶

病シモンびやうしもんの家いへに居ゐたまへる時とき ある婦ちよせき蠟ろうしやく石いしの器うつは物ものに似にたかき香にほひ膏あぶらを盛もて
 イエスの食たべする所ところに携もち來きたり其か首くびに斟そそかば 弟でし子した等らこれを見みて怒いかり含くみ
 ひけるハ此この糜つぶ費えの六むを爲なすハ何なに故ゆゑぞヤ 若もしふれを賣うらば多おほく金きんを得えて貧むし者しやう
 に施ほすこゝを得えん 十 イエス知して彼かれ等らに曰いけるハ何なんぞ此この婦ちよせきを憐あはれすヤ彼かれハ我われ
 に善よ事ことを行おこな 十一 貧むし者しやうハ常とこに爾なん曹じやうと借かにあれど我われハ常とこに爾なん曹じやうと借かに在あら
 ぞ 十二 彼かれが六むの香にほひ膏あぶらを我われ體たいに斟そそかば我われの葬はらひの爲ために行なる也 十三 われ誠まことに爾なん曹じやうに
 告つげん天あめの下したいづくにても此この福音ふくいんの宣のたまへらるゝ處ところにハ此この婦ちよせきの行なしむもその
 紀念かたみの爲ために言い傳つたへらるべし 十四 其そのとき十二じふに弟でし子したの一人ひとりなるイスカリオテの
 ユダいんと云いふもの祭さい司しの長なが等らの所ところに往ゆて曰いけるハ 十五 我われなんぢらに彼かれを賣うら
 ば幾た何なにを予あたふか遂つひに銀ぎん三十さんじゆにて約やくたり 十六 此時このときよりイエスを賣うらさんさ機をり
 を窺うかがひぬ 十七 除とけ 節ふしの首くびの日ひ弟でし子したイエスに來きたり曰いけるハ我われ儕らすきこ
 の食たべを爾なんの爲ために何い處ところに備そなふべき乎 十八 イエス曰いけるハ京城みやこにいり某それがしに至いたて
 いへ師しいふ我われが時とき近ちかきければ我われ弟でし子したと借かに逾あ越この節ふし筵いひを爾なんが家いへに行なるべし

十九 弟でし子したイエスに命めいぜられし如ごとく 二十 逾あ越この食たべを備そなふ 二十 日ひくるゝ時ときイエス
 十二 弟でし子したと借かに席せきに就つき食たべする時ときいひけるハ我われまことに爾なん曹じやうに告つげん爾なん曹じやう
 のうち一人ひとりわれを賣うらなり 二十三 彼かれ等らいたく憂うれへおのく 二十四 各おの各おのイエスに曰い出いでけるは主われ
 なる乎 廿三 答こたへて曰いけるハ我われと借かに手てを盂みに着つる者ものハ即すなはち我われを賣うらす者ものなり 廿四
 人ひとの子こハ己おのれについて録とけられたる如ごとく逝ゆん然しかど人ひとの子こを賣うらす者ものハ禍わざはひなる哉 廿五
 その人生うまれざりしならバ反かへつて幸さいなりしならん 廿五 彼かれを賣うらすユダ答こたへて曰いける
 ハラビ我われなるや之これに曰いけるハ爾なんの言いふる如ごとく 廿六 かれら食たべする時ときイエスパン
 を取とりて祝いのちし之これをさき弟でし子したに予あたへて曰いけるハ取とりて食たべこれハ我われ身みなり 廿七 また杯さかづ
 を取とりて謝あやし彼かれ等らに予あたへて曰いけるハ爾なん曹じやうみな此この杯さかづより飲のみ 廿八 これ新あたらし約やくの我われ血ちに
 して罪つみを赦ゆるさんさて衆あまの人の爲ために流ながすもの也 廿九 われ爾なん曹じやうに告つげん今いまより
 後のちなんぢらと借かに新あたらしき物ものを吾わが父ちちの國くにに飲のみ日ひまでハ再またびこの葡ぶ萄たうにて
 造つくれる物ものを飲のみ 三十 かれら歌うたを謳うたひてのち橄かん欖らん山さんに往ゆり 三十一 其その時ときイエス彼かれら
 に曰いけるハ今いま夜よなんぢら皆みなわれに就ついて礙あかん蓋ふたわれ牧か者しやうを撃うたば群ぐんの綿めん羊やう

チ 約八〇二
 ヌリ 約九〇六
 ヌリ 約八〇六
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五

ツ 約九〇六
 ツ 約八〇六
 ツ 約八〇五
 ツ 約八〇五
 ツ 約八〇五
 ツ 約八〇五
 ツ 約八〇五
 ツ 約八〇五

われ日々爾曹と偕に殿に坐して誨しに爾曹われを執ざりし 然ご此の如
 なるは皆預言者の録たる所に應成せん爲なり遂に弟子等みなイエスを離
 れて逃去ぬ 〇 イエスを執たる者これを曳て學者と長老の集れる所の祭
 司の長カヤバに携ゆく 〇 ペテロ遠く離れてイエスに従ひ祭司の長の庭に
 まで至その結局を見んさて内にいり僕と偕に坐せり 祭司の長等および
 長老すべての議員ともにイエスを殺さんとして妄證を求めども得ず
 多の妾りの證者きたれども亦得ず後また妾りの證者二人きたりて曰ける
 は 六二 この人殿に言ることあり我よく神の殿を毀ちて三日の内之を建う
 べしと 祭司の長たちてイエスに曰けるは爾こたふる言なき乎この人々
 の爾に立る證據は如何 〇 イエス默然たり祭司の長こたへて彼に曰けるハ
 爾キリスト神の子なるか我なんぢを活神に啓せて之を告まめん 〇 イエス
 彼に曰けるハ爾が言る如し且われ爾曹に告ん此のち人の子大權の右に坐
 し天の雲に乗て來るを爾曹みるべし 〇 是に於て祭司の長その衣を裂て曰

子 約九〇六
 ナ 約八〇六
 ナ 約八〇五
 ナ 約八〇五
 ナ 約八〇五
 ナ 約八〇五
 ナ 約八〇五
 ナ 約八〇五

ム 約九〇六
 ヌリ 約八〇六
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五
 ヌリ 約八〇五

けるハ此人は棄擲ごを言り何ぞ外に證據を求人や爾曹も今その棄擲た
 るごを聞なんぢら如何おもふ乎かれら答て曰けるは彼ハ死に當れり
 〇 是に於て彼等その面に唾し且拳にて撃りまた或人かれを批ひけるハ
 六八 キリストよ爾を撃者は誰か我儕に預言せよ 〇 〇 ペテロ庭に坐ぬけるに
 或婢きたりて爾もガリラヤのイエスと偕なりと曰ければ 〇 ペテロ凡の人
 の前に此言を背はずして我なんぢが言ごるを知すと曰り 〇 出て門口に
 至れる時また他の婢これを見て其處に在る者に曰けるは此人もナザレの
 イエスと偕に在し 〇 ペテロまた背はずして誓ふ我この人を知す 〇 誓く
 ありて旁らに立たる者すくみ近てペテロに曰けるは誠に爾もその黨の一
 人なり蓋なんぢの方言なんぢを顯せり 〇 是に於てペテロ誓り且誓て我そ
 の人を知すと曰しが頓て雞鳴ぬ 〇 ペテロイエスの雞なかざる前なんぢ三
 次われを知らざらばいほんこと云たまへる言を憶起し外に出て悲み哭り
第二十七節 平旦になりて凡の祭司の長と民の長老ともに謀てイエスを殺

井 大廿六〇十四
 さんとし 既に彼を縛ひきゆきて方伯のポンテオピラトに解せり○ 是
 に於てイエスを賣しユダ彼の死に定られしを見て悔その銀三十を祭司
 の長長老等に返して 曰けるは無幸の血を付し我は罪を犯しぬ彼等いひ
 けるは我儕に於て何ぞ與らんや爾みづから當べし 五 ユダその銀を殿に投
 棄て其處を去ゆきて自ら縊たり 祭司の長等この銀を取て曰けるは此は
ノ 徒一〇十八
可七〇十一
 血の似なれば賽銭の箱に入べからずさて 共に謀この銀をもて旅客を葬
ヤク 大廿八〇十五
徒一〇十八十
九 十一〇十二
 る爲に陶工の田を買ひ 故に其田ハ今に至るまで血田と稱らる 是に於
 て預言者エレミヤに託いはれたる言にイスラエルの民に估られ估られし
 者の價の銀三十を取 主の我に命ぜし如く陶工の田を買ひ有に應へり
ケ 可十五〇二至
五 約十八〇三
約十八〇三
約十八〇三
 ○ 猶イエス方伯の前にたつ方伯イエスに問て曰けるは爾ハユダヤ人の
 王なるかイエス之に曰けるは爾が言る如し 祭司の長長老だち彼を訟ふ
 れども何の答もせず 是に於てピラト彼に曰けるは此人々なんぢに立る
コフ 三 大廿六〇六十三
大廿六〇六十三
大廿六〇六十三
 証のかく大なるを爾きかざる乎 方伯の甚奇とするまでにイエス一言も

エ 可十五〇六至
十五 約十八〇七
約十八〇七
約十八〇七
 答せざりき 此の祭の日ハ方伯より民の願に任せて一人の囚人を釋の
 例あり 時にバラバと云る一人の名高き囚人ありければ ピラト民の集
 りしとき彼等に曰けるハバラバか又ハキリストと稱ふるイエスなる乎な
 んぢら誰を釋さん欲ふや 十九 これ短獄に由てイエスを解したりと知ばな
 り○ 方伯審判の座に坐りたる時その妻いひ遣しけるハ此義人に爾干る
 こし勿れ蓋われ今日夢の中に彼につきて多く憂たり 祭司の長長老だち
 バラバを釋しイエスを殺さんことを求て民も嘖む 方伯こたへて彼等に
 曰けるハ二人のうち孰を我なんぢらに釋さんことを望むや彼等バラバと
アテ 申一〇〇六七
申一〇〇七
王上三〇〇十七
特五〇廿八
 答ふ ピラト曰けるハ然ばキリストと稱ふるイエスに我なにを處べきか
 衆いふ十字架に釘よと 方伯いひけるは彼なにの惡事を行しや彼等ます
 く 喊叫て十字架に釘よと曰 畢ラトその言の益なくして唯亂の起んとす
 するをまじり水を取て人々の前に手をあらひ曰けるは此義者の血に我ハ罪
 なし爾曹みづから之に當れ 民みな答て曰けるハ其血は我儕と我儕の子

孫カハヒに係カヒるべし。是コトに於カてバラババを彼等カに釋カしイエスを鞭カちて之カを十字架カに釘カ入カ爲カに付カしたり。方伯カの兵卒カイエスを携カへ公廳カに至カり全體カを其カもさカに集カめ。彼の衣カを褫カて絳色カの袍カを着カせ。棘カにて冕カを編カその首カに冠カしめ又カ其カを右手カに持カせ且カその前カに跪カづき嘲弄カして曰カけるはエタヤ人の王安カかれ。また彼カに唾カし其カ荦カを取カて其カ首カを撃カり。嘲弄カし擧カりて其カ袍カをばカぎ故衣カをきせ十字架カに釘カんカさて彼カを曳カゆく。その出カし時カクレン子カ人のシモンカといふ者カに遇カければ強カて之カに其カ十字架カを負カせたり。○ 彼等カエルゴダカ譯カば即カち鬮カをさカる處カに來カり。醋カに醋カを和カせてイエスに飲カせんカと爲カたりしに嘗カて飲カこカをせざりき。斯カてイエスを十字架カに釘カしカのち圖カを拈カて其カ衣カを分カこれ預カ言者カの言カに彼等カ互カに我が衣カを分カわが裏衣カを圖カにすカと云カしに應カへり。兵卒カこカに坐カしてイエスを守カれり。また罪標カに此カハユダヤ人の王カイエスなり。と書カして其カ首カの上カに懸カり。其カさき二人カの盜賊カイエスカと併カに一人カハ其カ右カ一人カハ其カ左カに十字架カに釘カらるカ。○ 往來カの者カイエスを罵カり首カを拈カて曰カけるハ

可十五〇十五
至十九〇十六
路廿三〇廿六
約十九〇十六
來七〇五十八
十十三〇十一
一十六九〇廿
可十五〇廿五
路廿三〇廿六
約十九〇十六
來七〇五十八
十十三〇十一
一十六九〇廿
可十五〇廿五
路廿三〇廿六
約十九〇十六
來七〇五十八
十十三〇十一
一十六九〇廿

殿カを毀カちて三日カに之カを建カる者カよ自己カを救カへ爾カもし神カの子カならば十字架カより下カよ。祭司カの長カ學者カ長老等カも亦カおなカく嘲弄カして曰カけるハ。人カを救カて己カが身カを救カあたハカす若カイスラエルの王カたらバ今カ十字架カより下カるべし。然カバ我カ儂カかれを信カぜん。彼カハ神カに依カ頼カめり神カもし彼カを愛カしまバ今カ救カふべし。蓋カかれ我カハ神カの子カなりカと云カし也。同カに十字架カに釘カられたる盜賊カも同カくイエスを罵カれり。○ 晝カの十二時カより三時カに至カるまで其カ地カあまカれく黑暗カなる。三時カごろイエス大聲カにエリエリラマサバクタニカと呼カりカぬ之カを譯カハ香カ神カわが神カなんぞ我カを遺カたまふ乎カと云カる也。旁カらに立カたる者カのうち或カ人カこカれを聞カて彼カハエリヤカを呼カるなりカと曰カ。その中カの一人カ直カに走カり往カて海カ鹹カをとり醋カを合カせ之カを葦カにつけてイエスに飲カしむ。餘人カ曰カけるハ俟カエリヤカ來カりて彼カを救カふや否カ試カべし。○ イエスマた大聲カに呼カりて氣絶カたり。殿カの幔カ上カより下カまで裂カて二カとなり又カ地カふるひ磐カさけ。墓カひらけて既に甦カたる聖カ徒カの身カおほく甦カへりイエスの甦カれる後カ。墓カを出カて聖城カに入カおほくの人に

可十五〇廿三
路廿三〇廿六
約十九〇廿八
至廿二〇一
可十五〇廿三
路廿三〇廿六
約十九〇廿八
至廿二〇一
可十五〇廿三
路廿三〇廿六
約十九〇廿八
至廿二〇一

現れたり○ 百夫の長と偕にイエスを守たるもの地震および其有し事を見て甚く懼れ此ハ誠に神の子なりと曰り○ 此處に遙に望むたる多の婦ありー彼等ハガリラヤよりイエスに従ひ事し者等なり 其中に居し者ハマゲダラのマリヤとヤコブヨセの母なるマリヤとセベダイの子等の母となり○ 日くれてイエスの弟子なるヨセフと云るアリマタヤの富人きたりてピラトに往イエスの屍を請いかバ 五八 ピラトその屍を付せし命す 五九 セフ屍を取て潔き潔布に裹み 六十 之を藪に懸たる己が新しき墓におき大なる石を墓の門に轉去て去 六一 マゲダラのマリヤと他のマリヤと墓に對て坐し其處に居り○ 預備日の翌日祭司の長とパリサイの人等ピラトの所に集來り曰けるハ 主よ我儕憶起せり彼の偽者いきて在しと云ふ三日のうちに其らんと言ふ 是故に命して三日に至るまで墓を固守しめよ恐くハ其弟子夜きたりて之を竊み死より甦りたりと民に言ふ然バ後の惑ハ先よりも愈勝るべし 六五 ピラト彼等に曰けるハ守兵ハ爾曹にあり往て意のままに固守し

カ 但六〇七
 三 可十六〇〇
 二 約廿四〇二
 二 約廿〇二
 二 但十〇六
 ナ 可十六〇八
 子 太十六〇二
 子 太十六〇三
 子 太十六〇四
 子 太十六〇五
 子 太十六〇六
 子 太十六〇七
 子 太十六〇八
 子 太十六〇九
 子 太十六一〇
 子 太十六一一
 子 太十六一二
 子 太十六一三
 子 太十六一四
 子 太十六一五
 子 太十六一六
 子 太十六一七
 子 太十六一八
 子 太十六一九
 子 太十六二〇
 子 太十六二一
 子 太十六二二
 子 太十六二三
 子 太十六二四
 子 太十六二五
 子 太十六二六
 子 太十六二七
 子 太十六二八
 子 太十六二九
 子 太十六三〇
 子 太十六三一
 子 太十六三二
 子 太十六三三
 子 太十六三四
 子 太十六三五
 子 太十六三六
 子 太十六三七
 子 太十六三八
 子 太十六三九
 子 太十六四〇
 子 太十六四一
 子 太十六四二
 子 太十六四三
 子 太十六四四
 子 太十六四五
 子 太十六四六
 子 太十六四七
 子 太十六四八
 子 太十六四九
 子 太十六五〇
 子 太十六五一
 子 太十六五二
 子 太十六五三
 子 太十六五四
 子 太十六五五
 子 太十六五六
 子 太十六五七
 子 太十六五八
 子 太十六五九
 子 太十六六〇
 子 太十六六一
 子 太十六六二
 子 太十六六三
 子 太十六六四
 子 太十六六五
 子 太十六六六
 子 太十六六七
 子 太十六六八
 子 太十六六九
 子 太十六七〇
 子 太十六七一
 子 太十六七二
 子 太十六七三
 子 太十六七四
 子 太十六七五
 子 太十六七六
 子 太十六七七
 子 太十六七八
 子 太十六七九
 子 太十六八〇
 子 太十六八一
 子 太十六八二
 子 太十六八三
 子 太十六八四
 子 太十六八五
 子 太十六八六
 子 太十六八七
 子 太十六八八
 子 太十六八九
 子 太十六九〇
 子 太十六九一
 子 太十六九二
 子 太十六九三
 子 太十六九四
 子 太十六九五
 子 太十六九六
 子 太十六九七
 子 太十六九八
 子 太十六九九
 子 太十六一〇〇

めよ 六六 是に於て彼等ゆきて石に封印し守兵をして墓を固守せめたり
 第二十八節 安息日終てのち七日の首の日黎明にマゲダラのマリヤ及び他のマリヤその墓を觀んきて來りしに 大なる地震ありて主の使者天より降り墓の門より石を轉し其上に坐す 三 其容貌ハ閃電のごとく其衣服ハ雪のごとく白し 守兵かれを懼戦き死たる者の如くなりぬ 五 天使きたへて婦に曰けるハ爾曹おそるゝ勿れ我なんぢらが十字架に釘られしイエスを尋ることを知 彼ハ此に在す其言る如く甦りたり爾曹きたりて主の置れし處を見よ 且ゆきて其弟子に告よ彼は死より甦り爾曹に先ちてガリラヤに往り彼處に於て爾曹かれを見べし我これを爾曹に告 婦懼ながらも甚く喜びて急墓をさり其弟子に告んき走り往り 弟子に告んきて往きイエス彼等に遇て安かれと曰給ひければ婦すくみ其足を抱て拜しぬ 十 イエス彼等に曰けるハ懼るゝ勿れ去て我が兄弟にガリラヤに往し告よ彼處にて我を見べし 十一 婦の去しの際守兵のうち或者も城に至り凡て有

カ 但六〇七
 三 可十六〇〇
 二 約廿四〇二
 二 約廿〇二
 二 但十〇六
 ナ 可十六〇八
 子 太十六〇二
 子 太十六〇三
 子 太十六〇四
 子 太十六〇五
 子 太十六〇六
 子 太十六〇七
 子 太十六〇八
 子 太十六〇九
 子 太十六一〇
 子 太十六一一
 子 太十六一二
 子 太十六一三
 子 太十六一四
 子 太十六一五
 子 太十六一六
 子 太十六一七
 子 太十六一八
 子 太十六一九
 子 太十六二〇
 子 太十六二一
 子 太十六二二
 子 太十六二三
 子 太十六二四
 子 太十六二五
 子 太十六二六
 子 太十六二七
 子 太十六二八
 子 太十六二九
 子 太十六三〇
 子 太十六三一
 子 太十六三二
 子 太十六三三
 子 太十六三四
 子 太十六三五
 子 太十六三六
 子 太十六三七
 子 太十六三八
 子 太十六三九
 子 太十六四〇
 子 太十六四一
 子 太十六四二
 子 太十六四三
 子 太十六四四
 子 太十六四五
 子 太十六四六
 子 太十六四七
 子 太十六四八
 子 太十六四九
 子 太十六五〇
 子 太十六五一
 子 太十六五二
 子 太十六五三
 子 太十六五四
 子 太十六五五
 子 太十六五六
 子 太十六五七
 子 太十六五八
 子 太十六五九
 子 太十六六〇
 子 太十六六一
 子 太十六六二
 子 太十六六三
 子 太十六六四
 子 太十六六五
 子 太十六六六
 子 太十六六七
 子 太十六六八
 子 太十六六九
 子 太十六七〇
 子 太十六七一
 子 太十六七二
 子 太十六七三
 子 太十六七四
 子 太十六七五
 子 太十六七六
 子 太十六七七
 子 太十六七八
 子 太十六七九
 子 太十六八〇
 子 太十六八一
 子 太十六八二
 子 太十六八三
 子 太十六八四
 子 太十六八五
 子 太十六八六
 子 太十六八七
 子 太十六八八
 子 太十六八九
 子 太十六九〇
 子 太十六九一
 子 太十六九二
 子 太十六九三
 子 太十六九四
 子 太十六九五
 子 太十六九六
 子 太十六九七
 子 太十六九八
 子 太十六九九
 子 太十六一〇〇

シ事を祭司の長等に告しかば 彼等も長老あつまりて共に議おほくの銀
 子を兵卒に給て日けるハ 爾曹いへ我儕が懸たる時その弟子夜きたりて
 彼を竊りて 此事も一方伯に聞る事も我儕かれに動て爾曹に憂慮なから
 去めん かれら銀子を取て囓められたる如したりし是に於て此の如き話
 今日に至るまでユダヤ人の中に傳播られたり 〇 十一の弟子ガリラヤに
 往てイエスの彼等に命下給ふ所の山に至り イエスを見て拜せり然るに疑
 へる者もありき イエス進て彼等に語いひけるハ天のうち地の上の凡の
 權を我に賜れり 是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父
 子と聖靈の名に入て弟子とす 且わが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼
 等に教ふ夫われハ世の末まで常に爾曹と併に在なりアーメン

新約全書馬太傳福音書 終

新約全書馬可傳福音書

第一節 神の子イエスキリストの福音の始なり 預言者の録して觀よ
 われなんぢの面前に我使を遣さん 彼なんぢの前に其道を設くべし 野に呼
 ぶ人の聲あり云く主の道を備へ其徑すぢを直せよ 有が如く ヨハ子野
 に於てバプテスマを施し罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣
 傳たり 五 ユダヤの全國およびエルサレムの人々かれに來りて各々その罪
 を認はし ヨルダンといふ河にてバプテスマを受 〇ハ子は駱駝の毛衣を
 着腰に皮帯をつかれ蝗蟲と野蜜を食へり 七 かれ宣傳けるは我より勝れる
 者わが後に來らん 我は風て其履の紐を解にも足す 我は水をもて爾曹に
 バプテスマを施ししが彼は聖靈をもて爾曹にバプテスマを施すべし 九 常
 時イエスガリラヤのナザレより來りヨルダンにてヨハ子よりバプテスマ
 を受 頓て水より上れるとき天開れ靈鶴の如く其上に降るを見たり 十一 又
 天より聲ありて云なんぢは我が愛子わが悦ぶ所の者なりと 〇 斯て靈た

だちにイエスを野に往くむ 十三 かれ四十日野に在てサタンに試られ悪と共
 になれり天の使等これに非ぬ 十四 ヨハ子の囚れ一後イエスガリラヤに至
 り神の國の福音を傳ひひけるハ 十五 期は満り神の國は近けり爾曹悔改めて
 福音を信ぜよ 十六 イエスガリラヤの湖の邊を歩る時シモンと其兄弟アン
 テレの湖に網うてるを見る彼等は漁者なり イエス彼等に曰けるは我に
 從へ我爾曹を人を漁る者させん 十八 彼等たち其網を棄て之に從へり 十九
 此より少し進行せばゲイの子ヤコブとその兄弟ヨハ子の舟に在て網つく
 るふを見て 直に彼等を召給ひ一かば其父セベダイを備人と共に舟に遺
 て彼に從へり 二十 彼等カペナウンに至るイエス即ち安息日に會堂に入て
 教を爲しに 二十一 人々その教を駭き合り蓋學者の如ならず權威を有る者の如
 く教たまへば也 二十二 其會堂に汚たる鬼に憑たる人ありて 喊叫ひひけるは
 啖ナザレのイエスよ我儕は爾と何の與り有んや爾きたりて我を滅すか我
 なんぢは誰なる乎を知すなとち神の聖なる者なり 二十五 イエス之を責て曰け

三 六四〇十二廿
 四 九〇廿五
 五 四〇〇四
 六 四〇〇七
 七 四〇〇八
 八 四〇〇九
 九 四〇一〇
 十 四〇一〇
 十一 四〇一〇
 十二 四〇一〇
 十三 四〇一〇
 十四 四〇一〇
 十五 四〇一〇
 十六 四〇一〇
 十七 四〇一〇
 十八 四〇一〇
 十九 四〇一〇
 二十 四〇一〇
 二十一 四〇一〇
 二十二 四〇一〇
 二十三 四〇一〇
 二十四 四〇一〇
 二十五 四〇一〇

るは聲を發すこと勿れ其處を出よ 二十六 汚たる鬼その人を拘擥させ大聲に叫
 びて彼を出たり 衆人みな驚き相問て曰けるはは何事ぞや是いかなる新
 べき教ぞや汚たる鬼さへ權威をもて命づければ從へり 二十八 是に於てイエス
 の聲名徧くガリラヤの四方に播りぬ 二十九 彼等やがて會堂を出ヤコブ及ロ
 ハ子と共にシモンアンテレの家に至る 三十 シモンの岳母熱を病て臥わけ
 れば或人たち之をイエスに告ぐ イエス往て其手をとり彼を起しけれ
 ば熱たちまち去ぬ斯て其婦かれらに供事たり 三十一 夕かつた日の落さき人々すべ
 ての病を患へるもの鬼に憑たる者をイエスに携へ來る 三十二 その邑こぞりて
 門に集れり イエス各様の病を患へる多の人々を醫し又多の鬼を逐出
 鬼の言ふ事を許さざりき蓋鬼かれを識たるに困てなり 三十三 味爽にイエス
 早く起人なき所にゆき其處にて祈禱せり 三十四 シモンおよび彼と共に在る者
 等その跡を慕ゆき 彼に遇て曰けるは衆人みな爾を尋ぬ 三十五 イエス彼等に
 曰けるは我は教を宣傳る爲に爾曹と偕に附近の鄉村へ往ん我これが爲に

六 九〇廿
 七 六八〇廿九
 八 七〇〇廿八
 九 七〇〇廿八
 十 七〇〇廿八
 十一 七〇〇廿八
 十二 七〇〇廿八
 十三 七〇〇廿八
 十四 七〇〇廿八
 十五 七〇〇廿八
 十六 七〇〇廿八
 十七 七〇〇廿八
 十八 七〇〇廿八
 十九 七〇〇廿八
 二十 七〇〇廿八
 二十一 七〇〇廿八
 二十二 七〇〇廿八
 二十三 七〇〇廿八
 二十四 七〇〇廿八
 二十五 七〇〇廿八

ク 太四〇廿三
 來れば也 三九 イエス 避くガリヤの國を經めぐり其會堂にて教を宣且鬼を
 逐出せり 〇 癩病のもの一人かれに來りて跪き求ひ曰けるハ爾も一聖意
 十五 路卅〇十二至
 に適さきハ我を潔く爲得べし 四一 イエス 憫みて手をのべ彼に按て我意に適
 四至四十六
 へり潔なれき 言やいな直に癩病はなれ其人きよまれり 四三 イエス 嚴く之
 大九〇廿三
 を戒め慎みて何をも人に告る勿れ但ゆきて己が身を祭司に見せ其潔られ
 四四
 し爲にモーセが命ぜし所の物を獻て彼等に證據をなせと言て去しめたり
 四五
 然ども彼いでて先この事を大に言つたへ語り廣めければイエス此後あ
 にはに城に入がたく獨人ふき所に居給ひしが人々四方より彼に來れり
 四六
 第二三章 數日の後イエス復カペナウンに來りて 彼の室に居こき聞けられ
 四七
 ば直に多の人々集きたり門に立べき處處さへもなき程なりきイエス彼等
 四八
 に教を宣 此に癩瘋を病たる者を四人に昇せイエスに來れる者ありしが
 四九
 群集によりて近づき雜かりければ彼の居こころの屋蓋を取除き癩瘋の
 五〇
 人を床のまゝ緘下せり 五 イエス其信仰を見て癩瘋の人に曰けるハ子よ爾

エ 約十〇卅三至
 何故かく惡口を言か神にあらすして誰か罪を赦すことを得ん 八 イエス直
 五 卅六
 に彼等が心中に斯の如き事を論するを自ら其心に知て彼等に曰けるハ爾
 六 卅七
 曹なんぞ心中に斯る事を論する乎 癩瘋の人に爾の罪ハ赦されたりと言
 七 卅八
 さ起て爾の床を取て行と言さ執れ易や 十 それ人の子地にて罪を赦すの權
 八 卅九
 威あることを爾曹に知せんさて遂に癩瘋の人に 我なんぢに告おきて床
 九 卅十
 を取なんぢの家に歸れと曰ければ 十二 その人たゞちに起て床をとり衆人の
 十 卅一
 前にいづ衆人みな駭き神を崇めて曰けるハ我儕いまだ斯の如き事を見
 十一 卅二
 こさなり 〇 イエスまた海邊に往りて人々みな彼に來ければ是等を數ふ
 十二 卅三
 此より進てアルパヨの子レビといふ者の税吏の役所に坐し居けるを見
 十三 卅四
 て我に従へき曰ければ彼たちて從へり 〇 斯てイエスその家にて食する
 十四 卅五
 時おほくの税吏罪ある人々イエス及び弟子と共に坐せり是等の者許多あ
 十五 卅六
 りてイエスに従ひぬ 十六 學者ミマリサイの人かれが税吏および罪ある人

共どもに食くするを見みて其その弟子でしに曰いけるハ何なにゆゑ税みづせり或ある罪つみある人ひとと共どもに食く飲のみする
 乎や イエス聞きて彼等かれらに曰いけるは康すこやか強かなる者ものハ醫者いしやの助たすけを需もとめす唯ただ病かまひある者
 此このを需もとめわが来きたりハ義人たしきひとを召よすために非あらず罪つみある人ひとを召よすて悔改くわいかいさせんが爲ため
 なり○ 十八 ヨハ子の弟子でしおよびパリサイの人ひとつれに斷食たんじきする事ことありければ
 彼等かれらイエスに來きたりひけるはヨハ子の弟子でしとパリサイの弟子でしハ斷食たんじきするに
 爾なんぢの弟子でしハ何なにゆゑ斷食たんじきせざる乎や イエス彼等かれらに曰いけるハ新耶しんやの朋友ともその
 新耶しんやと共どもに在ある間まに斷食たんじきするこゝを得えべき乎やかれら新耶しんやと共どもに在ある間ま
 斷食たんじきするこゝを得えず 將來あつちかれら新耶しんやをさるる日ひきたらん其日ひにハ斷
 食じきすべき也なり 新あらたき布ぬいを舊衣ふるぬいに縫ぬいつくる者ものあらト若しかし然しかせば其新あらたに補おぎな
 るもの舊ふるを縫ぬいばして其破やぶれへつて惡あはれるべし 亦またあたらしき酒さけを舊ふるき革かわ
 囊ふくろに在ある者ものあらト若しかし然しかせば新酒あらたしきさけハ其舊ふるを破裂やぶれて酒さけもれいで革囊かわふくろも
 亦また壞やぶるべし 新酒あらたしきさけハ新あらたき革囊かわふくろに盛かへべきもの也なり ○ 十九 猶なほイエス安息日あんそくにちに參まゐ
 の島はたけを過すりしに其弟子でしあるものつゞく夢ゆめの穂ほを摘つむめければ マリサイの

本九〇十四至
 路五〇三三至
 路八〇三三至

七 徒十三〇三
 十四〇三三

八 太十二二至
 路六〇一至五
 申三〇三五

人彼ひとに曰いけるハ彼等かれら安息日あんそくにちに爲なまじき事ことをするハ何故なにゆゑぞ 二五 イエス答こたへける
 ハダビテ及および從したがひに在ある者ものの乏あまりして飢うゑを行なしたる事ことを未いまだ讀よまざる乎や
 即すなはち祭司さしの長ながアピアタルのとき神殿かみのいへに入いりて唯ただ祭司さしの外ほかハ食くましき供物ともものの
 パンを食くかつ從したがひに在ある者ものにも與あたり 二七 又また彼等かれらに曰いけるハ安息日あんそくにちハ人ひと
 の爲ために設たまられたる者ものにして人ひとハ安息日あんそくにちの爲ために設たまられたる者ものに非あらず 然しかば人
 の子こハ安息日あんそくにちにも主またる也なり
 二六 路十四〇一
 二七 路六〇六至十
 路十四〇一
 二八 太十二二
 路六〇六至十
 路十四〇一

本九〇十四至
 路五〇三三至
 路八〇三三至

チ 路六〇十七
 海邊に退しに多の人々ガリヤより彼に従へり又エグヤ エルサレムイ
 ドマヤヨルダンの外またツロシシドンの邊より多の人々イエスの行い事
 を聞て彼に群り來る イエス人々の群集に因て擁なやまさる事なから
 ん爲に小舟を我に備おけ其弟子に曰り 是イエス數多の人々を愈し
 に因て凡て病ある人々手にて彼に押しこめて擁逼すが故なり また汚たる
 鬼かれを見て其前に俯伏さけびて爾ハ神の子なりと曰り 十二 イエス彼等
 に我を扱すこと勿れと嚴く戒めたり ○ 十三 イエス山に登て其意に適ふ所の
 者を召しかば來りて彼に就り 是に於て十二人を立て己と併に置また教
 を宣傳る爲に遣し 十五 かつ病を醫し鬼を逐出すの權威を授く 十六 乃ちシモン
 をマテロと名け 十七 セベダイの子ヤコブと其兄弟ヨハ子この二人をボア子
 ルゲと名く之を譯バ雷の子なり 十八 又アンテネヒリポバルトロマイタイ
 トマスアルポヨの子ヤコブタツガイカナン人のシモン 十九 又イスカリオテの
 二十 此ハイエスを賣し者なり 此等の者家に入りて多の人々また來り

ツ 路六〇三三
 集りければ食する暇もなかりき 二一 その親屬ききて彼ハ狂氣せりと言て之
 を逐んきて來る 二三 又エルサレムより下れる學者等も彼ハメルセブルに懸
 れたり且鬼の王に藉て鬼を逐出すなりと曰り 二三 イエス彼等を召び譬を以
 て曰けるはサタンハ何でサタンを逐出得んや 二四 もし國おのれに悖て分
 争ハ其國立べからず 二五 また家おのれに悖て分争ハ其家立べからず 二六
 若サタン己に悖り起て分争ハ彼たつ可からず反て終るなるべし 二七 誰に
 ても勇士の家に入て其家具を奪んさせば先勇士を縛らざれば奪ふこと能
 ハト縛て後その家を奪ふべし 二八 われ誠に爾曹に告ん人の凡の罪と演す所
 の喪濱ハ赦るべけれ 二九 聖靈を演す者ハ限なく赦さる可からず限なき刑
 罰に干らん 三十 斯いへる人々イエスを惡鬼に憑たりと言いが故なり ○ 三一
 その兄弟と母と來りて戶外にたち人を遣してイエスを呼しむ 三二 多の人々
 イエスを環て坐したりしが彼に曰けるは祝ふ爾の母と兄弟戶外に在て爾
 を尋ぬ 三三 イエス答て曰けるハ我母わが兄弟は誰ぞや 三四 斯て側に坐する人

々を環視して曰けるは我母わが兄弟を見よ 三十五 それ神の旨に従ふ者はわが兄弟わが姉妹わが母なり

【新約全書】 イエスまた海濱にて教訓を始に多の人々かれに集りければ彼舟に乗て坐し凡の人々ハ海に沿て岸に立り 二 かれ譬をもて多の事を彼等に教ふ教て曰けるハ 三 聽よ種播もの播んとて出 播るさき或種ハ路の傍に遺しが空の鳥きたりて之を食へり 五 或種ハ土うすき硬地に遺しが土深かられバ直に萌出たれど 六 日出しかバ曝れ根なきが故に枯たり 七 或種ハ棘の中遺しが棘そだちて之を蔽ければ實を結ばざりき 八 また或種ハ沃地に遺しが其苗をいいで蓄り實を結るこき或ハ三十倍或ハ六十倍あるひハ百倍せり 九 また彼等に曰けるハ 耳ありて聽ゆる者ハ聽べし 十 衆人の居ざりし時イエスの側に在し者十二弟子と此譬を問しかば 十一 イエス彼等に曰けるは神の國の奧義を爾曹には知こきを賜へど他の者には凡て譬を以てす 十二 是かれら視さき視ても見ず聽さき聽ても聽らす心を改めて其脚

ム 太十三〇一三
五 路八〇四至十

ルカ 九
第一〇九
第二〇九
第三〇七
第四〇九
第五〇九
第六〇九
第七〇九
第八〇九
第九〇九
第十〇九
第十一〇九
第十二〇九
第十三〇九
第十四〇九
第十五〇九
第十六〇九
第十七〇九
第十八〇九
第十九〇九
第二十〇九

の教を得ざらん爲なり 十三 また彼等に曰けるは爾曹この譬を知ざるか然バ如何して凡の譬を識こを得んヤ 十四 それ播者の教を播なり 十五 道の播れて路の傍に遺しものは人道を聽しこき直にサタン來て其心に播れたる道を奪取なり 十六 また硬地に播れたるものは人道を聽さき直に喜びて之を受然ども己に根なきが故たと暫時のみ後道の爲に患難あるひは迫害に遇さきハ忽ち礙く者なり 十八 又棘の中に播れたるものは人こきバを聽ども 十九 此世の思慮と貨財の惑また各様の情欲いり來りて道を蔽により終に實を結ざる者なり 二十 沃壤に播れたるものは人道を聽て之をうけ或ハ三十倍あるひハ六十倍あるひハ百倍の實を結ぶ者なり 〇 二二 また彼等に曰けるは燈を持來りて斗の下あるひハ牀の下に置もの有んヤ之を燭臺の上に置ならず乎 二三 隠て明瞭にならざるはなく藏て露れざる者ハなし 二四 耳ありて聽ゆる者は聽べし 二五 また彼等に曰けるハ 聽さるを慎めよ爾曹が度る所の量をもて爾曹も度らるべし 聽たる爾曹にハなほ加られん 二六 それ有る者ハなほ

オ 路六〇九
十七

ク 太五〇十五
路八〇十六至
十八

マ 太十一〇廿六
太十一〇廿五

ナ 太七〇二
路六〇廿八

フ 太廿五〇廿九
路十九〇廿六

々を環視して曰けるは我母わが兄弟を見よ三五 其神の旨に従ふ者はわが兄弟わが姉妹わが母なり

ム 太十三〇二至
三三
路八〇四至十
五

【四四】イエスまた海濱にて教訓を始一に多の人々かれに集りければ彼舟に乗て坐し凡の人々の海に沿て岸に立り二 かれ譬をもて多の事を彼等に教ふ教て曰けるハ 聽よ種播もの播んとて出 播るさき或種ハ路の傍に遺しが空の鳥きたりて之を食へり五 或種ハ土うすき瘠地に遺しが土深かられバ直に萌出たれ六 日出しかハ曝れ根なきが故に枯たり七 或種ハ棘の中八に遺しが棘そだちて之を蔽ければ實を結ばざりき八 また或種ハ沃壤に遺しが其苗をいいで蓄り實を結る九 或ハ三十倍或ハ六十倍あるひハ百倍せり九 また彼等に曰けるハ 耳ありて聽ゆる者ハ聽べし十 衆人の居ざりし時イエスの側に在し者十一と十二弟子十二と此譬を問しかば イエス彼等に曰けるは神の國の奧義を爾曹には知十三ことを賜へ十三 他十四の者十五にハ凡て譬を以てす十三 是十四かれら視十五き十六視十六ても見十七ず十七聽十八き十八聽十八ても聽十九らす十九心を改めて其脚

マ 第一〇九
路三〇七
路六〇九
路十一〇八

オ 路六〇九
十七

ク 太五〇十五
路八〇十六至
十八

ヤ 太十一〇廿六
太十一〇廿五

ナ 太七〇二
路六〇廿八

フ 太廿五〇廿九
路十九〇廿六

の救を得ざらん爲なり十三 また彼等に曰けるは爾曹の譬を知ざるか然ハ如何して凡の譬を識十四ことを得んや十四 それ播者の教を播なり十五 道の播れて路の傍に遺しものは人道を聽し十六き直にサタン來て其心に播れたる道を奪取なり十六 また瘠地に播れたるものは人道を聽十七き直に喜びて之を受然十七ども已に根なきが故た暫時のみ後道の爲に患難あるひは迫害に遇十八きハ忽ち礙く者なり十八 又棘の中に播れたるものは人十九こ十九こバを聽十九じし十九此世の思慮二十と貨財の惑二十また各様の情欲二十いり來りて道を蔽二十一により終に實を結二十一ざる者なり二十一 沃壤に播れたるものは人道を聽て之をうけ或ハ三十倍あるひハ六十倍あるひハ百倍の實を結ぶ者なり二十二 また彼等に曰けるは燈を持來りて斗の下あるひハ牀の下に置二十三もの有んや之を燭臺の上に置ならず乎二十三 隠て明瞭にならざるはなく藏て露れざる者ハなし二十三 耳ありて聽ゆる者は聽べし二十四 また彼等に曰けるハ 聽二十五さ二十五ふるを慎め二十五 爾曹が度る所の量をもて爾曹も度らるべし二十五 聽たる爾曹にハなほ加られん二十五 それ有る者ハなほ

コ 太十三〇廿四
 三 太十三〇廿一
 ア 太十三〇廿四
 ナ 太十三〇廿七
 廿五

與られ無有者ハ有る物をも取る也○
 神の國は人種を地に播が如し
 日夜起臥する間に種はほいで成長も其然る故を知らず
 その地ハ自から實を結ぶものにして初にハ苗つぎに穂いで穂の中に熟したる穀を結ぶ
 既に熟バ穫時いたるに因て直に鎌を入さする也○
 曰けるハ神の國ハ何に比へ何の譬を以て之を喻ん
 一粒の芥種のごとし之を地に播さきハ百様の種より微けれ
 既に播て蒔出れば百様の野菜よりハ大くかつ巨なる枝を出して空の鳥その陰に棲ほごに及なり○
 エス彼等の聽得さころに循ひ多かる譬をもて教を彼等に語れり
 非ざれば彼等に語らずイエスその弟子と共に居るとき彼等に悉く之を解説せり○
 偕その日の夕暮イエス彼等に向の岸に濟れと曰ければ
 弟子たち衆人を歸らせイエスの舟に在しを其まゝ之と偕に濟れり又他の小舟もさもに往り
 時に颶風おこり浪うちこみて殆ど舟に滿
 イエス船のかたに枕して寝たり
 弟子かれの目を醒して曰けるハ師よ我儕が溺る

キ 百、廿八〇十
 ニ 太八〇廿八
 卅一
 卅七

たも願み給はざる乎
 エス起て風を斥め且海に靜りて穩かに爲さ曰ければ風やみて大に和たり
 斯て彼等に曰けるハ何故かく懼るや爾曹なんぞ信なき乎
 彼等甚しく懼れ互に曰けるハ風と海さへも順ふ是誰なるぞ耶
 鬼に恐れたる人たちちに墓間より出て彼に遇
 この人の墓間を居處させり
 屢次桎梏と鍵をもて繋ごも鍵をうちきり桎梏を打碎により之を繋うる者なく亦誰も之を制し得もの無りき
 夜も晝も恆に山と墓間に於て喊叫
 また石をもて己が身に傷つけぬ
 彼はるかイエスを見て趨より之を拜し
 大聲に呼りけるハ至上神の子イエスよ我なんぢさ何の與り有んや我神に託て求ふ我を苦むること勿れ
 是イエス惡鬼に人より出よと曰しに因てなり
 イエス彼に爾の名ハ何と問しに答けるハ我儕おほきが故よ我名をレギヨンと云
 切よ此土地より我儕を逐出す勿れ
 イエスよ求たり
 茲よ多の豕の群山に草を食ふとりしが
 凡の惡鬼かれに求て我儕を遣

て冢に入せよと曰ければ十三 イエス直に彼等に許せり汚たる鬼の一人より
 出て冢に入しかば約二千匹ほどの群とげく馳くだり山坡より海に落
 て海に溺ぬ十四 牧者ども逃ゆきて此事を邑また郷村に告げれば衆人其あり
 し事を視んきて出十五 イエスに來りて惡鬼に憑れたる者すなはちレギヨシ
 を持たりし人の衣服をつけ離なる心にて坐し居けるを見て懼あへり十六 此
 事を見し者ども惡鬼に憑れたりし者の事と冢の事を彼等に告げれば十七 彼
 てイエスよ其境を出んことを求めぬ十八 イエス舟に登んさせしとき惡鬼に憑
 たりし者ども居んふさを求めれども十九 イエス許すして彼曰けるハ爾
 の家に歸り親屬を往て主の爾に行し大なる事と爾を恤みし事を告ぐ二十 彼
 ゆきてイエスの已へ行たまへる大なる事をテカボリスと言揚しければ衆
 人みな駭きあへり二十一 イエス舟に乗て復海の彼岸に濟しに大勢の人々彼
 に集るイエスハ海に近をれり二十二 會堂の宰ヤイロといふ人きたりイエスを
 見て其足下に伏二十三 切々に求ひけるハ我いさげなき女死る願になりぬ之

ミメ 路十六つ廿九
路八〇廿八

シ 太九〇一

エ 太九〇十八至
路八〇四十一
路五十六
路十三〇十五

を救ん爲に來りて手を彼に按たまへ然ば女ハ生二十四 イエス彼と共に往
 とき衆多の人々彼に従ひて擁あへり二十五 爰に十二年血漏を患たる婦あり二十六
 此婦おほくの醫者の爲に甚だ苦められ其所有をも盡く費しければ何の
 益もなく轉て惡かりしが二十七 イエスの事を聞て群衆の中より彼の後に來そ
 の衣に捫れり二十八 是その衣にだに捫らば愈るべしと曰ばなり二十九 斯て血の漏
 ること直にさまり既に疾いぬと其身に覺たり三十 イエス自ら能力の已
 り出たるを告知せし人の人々を顧みて曰けるハ我衣に捫りし者ハ誰なる
 か三十一 弟子かれに曰けるハ群衆の人々の爾に擁あふを見て我に捫りし者ハ
 誰ぞと曰たまふ乎三十二 イエスこの事を行る婦を見んと環視しければ三十三 婦お
 それ服慄おのが身にせられし事をいり來て彼の前に俯伏三十四 ことごとく實情
 を告三十五 イエス彼に曰けるハ女よ爾の信なんぢを救り安然にして往なんぢ
 の疾いゆべし三十六 イエスこの事を言をうち會堂の宰の家より人々來
 りて曰けるハ爾の女すでに死たり何ぞ師を煩ハす乎三十七 イエス直に其告る

モ 太九〇廿

セ 路六〇十九

ス 可十〇五十二
路十四〇九
路八〇四十九

新約全書 馬可傳第五章 自廿四至卅六節 百五

ハ口 約十一〇四十一
 約十七〇一
 ナコブ 卅七
 堂の幸の家 卅八
 何ぞ忙亂か 卅九
 ス凡の人々 卅十
 女の手を執て 卅十一
 よさいふ 卅十二
 きぬ 卅十三
 じたり 卅十四
 行か 卅十五
 木匠に非ず 卅十六
 マリアの子 卅十七
 ヨプロセエ 卅十八
 シモン 卅十九
 兄弟に 卅二十

所の首なき會堂の幸に曰けるハ懼る勿た信ぜよ イエス ペテロも
 ナコブ及其の兄弟ヨハ子の外ハ誰にも共に往こ事を許さざりき 既に會
 堂の幸の家に来て人々の忙亂いたく哭泣を見る 入て彼等に曰けるハ
 何ぞ忙亂かつ哭や女ハ死るに非た寝たる耳 彼等イエスを嘲笑ふイエ
 ス凡の人々を出し女の父母とその従へる者等を率つれ女の臥たる所に入
 女の手を執て之に曰けるハタリタクミ之を譯バ女ハ我なんぢに命す起
 よさいふ義なり 直に女おきて行めり彼ハ年十二歳なり彼等はなはだ駭
 きぬ イエスこの事を人に知る勿れと嚴く戒め又女に食物を興よと命
 じたり
 行か 彼ハ木匠に非ずマリアの子ヨプロセエとシモンの兄弟に

ナ 六十一〇六
 リ 約四〇四十四
 カ 六九〇廿五
 日 六十一〇一五至
 十五 九〇一五至
 レマ 路二二〇廿五
 十一 路二二〇廿八
 ツ 六十一〇廿四
 ソ 六十一〇五十五
 子 六十一〇四十四
 六十一〇一五至
 九〇一五至

て其姉妹も此に我儕と共に在る非ずや迷に人々かれに凝けり イエス
 彼等に曰けるハ預言者はその故郷その親戚その室家の外に於ハ尊じれざ
 ることなり イエス彼處にて患者と手を按たし數人を醫し外ふしぎな
 る事を行ふ能ざりき また彼等の信ぜざるを奇み遂に諸郷を經巡て教
 をなせり
 七 イエス十二の弟子を召て彼等を二人づゝ遣さんとして之に
 惡鬼を逐出す權威を授け 且かれらに命づけるハ一の杖の外ハ旅の用意
 に何をも携なかれ旅袋糧食また金をも携す 九 又履をはき二の衣をきる
 勿れ 十 また彼等に曰けるハ何處にても人の家に入らばその所を去までハ其
 處に居 凡て爾曹を接すなんぢらに聽ざる者には其處を去さき證のため
 足下の塵を拂へ我まことに爾曹に告ん審判の日いたらばソドムとゴモラ
 ハ此邑よりも却て易かるべし 十二 弟子たち出て人々に悔改む可ことを宣傳
 十三 また多の惡鬼を逐出し又多の病る者に膏を沃て醫しぬ
 十四 イエスの
 名振りければヘロテ王これを聞て曰けるハバプテスマを施しくヨハ子死

ラ 太十六〇十四
可八〇廿八

より甦れる故に奇異なる能をなす也 或人ハ之をエリアなりといひ或ハ
往昔の預言者の如き預言者なりと曰 へロテ之を聞て曰けるハ是わが首

ム 路三〇十九

斬し所のヨハ子也かれ死より甦りたる也 蓋にへロテの兄弟ピリポの
妻へロテヤの事に因て人を遣しヨハ子を捕て獄に繋げり蓋へロテが彼の

リ 利十八〇十六
廿〇廿一

婦を娶しをヨハ子諫て爾兄弟の妻を納ハ宜からずと曰るに因てなり
へロテヤ彼を怨て殺さんと欲しかば能ざりき へロテハヨハ子を護つ

井 太廿一〇廿六

善なる人ぞ知て彼を敬ひ彼を保護かれに聞て多の事を行ひ且喜びて彼に
聽こをせり 斯てへロテの誕生の日もろくの大匠千人の長および

ノ 律五〇三六
七〇二

ガリラヤの尊き人々に享宴をなせる機會の日いたりければ へロテヤの
女きたりて舞をなしへロテと其席に列れる人々を樂ましむ王の女に曰

けるハ何にても我に求へ爾が望ころの者ハ我なんぢに與ふべし 又彼
に凡る爾が求るものハ我が領分の半に至るとも爾に與んと誓ふ 女いで

其母に何を求へべき乎と曰ければ母乃ちパプテスマのヨハ子が首と曰り

太十四〇十三
路九〇十五
約六〇一五

女たどちに急ぎ王にきたり来てパプテスマのヨハ子が首を盆に載て即
時に我に賜へと曰 王甚だ愛けれども既に暫たるも同席の者の故をな

て之を拒むことを欲す 王たどちにヨハ子の首を携來れと命じて兵卒を
遣しければ彼ゆきて獄に於て之を斬 其首を盆にのせ携來りて女に與ふ

女ハ之を其母に與たり ヨハ子の弟子等この事を聞て來り其屍を取て墓
に葬りぬ 使徒等イエスに集りて行へる事を教し事を悉く彼に告

イエス彼等に曰けるハ爾曹衆を避て我に暫く寂寞ところにて休む
べし是往來のもの多し食する暇も無しが故なり されら人を避舟に

て寂寞ところに往り 其往を見て衆人おほくイエスをまじり諸邑より歩行
にて趨り彼等の往んとする所へ先ち往てイエスに集れり 〇 イエス出

多の人を見に彼等ハ牧者なき羊の如き者なるに因て之を憫み許多の事を
教はしめ 時すでに暮景になりければ其弟子かれに來いひけるハ此ハ
寂寞ところにして時も既晩し 衆人の食ふべき物なきが故に其自ら四周

マ 民十一〇十三
卅二
三下四〇四十

ケ 可八〇五
太十五〇卅四

フ 卅上九〇卅三
太廿六〇卅六

コ 太十四〇廿二
卅六
約六〇十五至
卅一

エ 路廿四〇廿八

の郷村に往てパンを市んが爲に彼等を去しめ給へ。イエス答けるは爾曹
 ぶれに食を與ふ弟子かれに曰けるは我儕ゆきて銀二百のパンを市かれら
 に與て食しむ可か。イエス彼等に曰けるはパンの幾何ある往て視よ彼等
 みて其數をまり五のパンと二の魚ありと答ふ。イエス衆の人を組々に
 て青草の上に坐しめよと命じければ。或は百人或は五十人づゝ列坐せり
 四一 イエスその五のパンと二の魚をとり天を仰ぎ謝してパンをわり弟子に
 與て人々の前に陳しむ又二の魚を每人に分與ぬ。衆人みな食て飽。その
 パンと魚の餘屑を拾ひに十二の筐に盈たり。四二 パンを食たる男およそ五千
 人なりき。四三 直にイエスその弟子を強て舟に乗むかふの岸なるベツサイ
 大へ先わたらしめ己の衆人を歸しむ。衆人を歸しむのち祈禱の爲に山に
 往り。日暮て舟の海の中に在イエスの獨り陸に居り。風逆ふに因て弟子
 等の舟を棹に勞たるを見て曉の四時ごろイエス海の上を履きたり彼等を
 過んとせしに。四四 弟子その海を履るを見て變化の物ならんと意ひ叫びたり

アテ 可十六〇十四
八
八〇十七十

サ 太九〇七
可五〇七
七
徒十九〇十二

キ 太十五〇一五

五十七 蓋弟子みな之を見て懼じが故なりイエス直に彼等に語りて曰けるは心
 安かれ我なり懼るること勿れ。遂に舟に登しかば風やみぬ彼等心の中に
 駭き異めると甚だし。五十八 是らの心の愚頑も因てパンの奇跡をも覺ざりし也
 五十九 既に濟ケテサレといふ地に到て舟泊せり。彼等舟より出しに頓て人
 々イエスを知り。五十九 徧く其四方の地へ馳ゆき病る者を床の儘にて昇ひイエ
 スの在す處々を聞出して之に就り。凡そイエスの至るとある或は癩ある
 ひは邑あるひは村らの街市に病る者を置て彼に其衣の裾にだに捫らせ給
 へと求り乃ち捫るほどの者のみな愈たり

六十一 蓋パリサイの人或學者たちエルサレムより來りてイエスの前に集
 り。彼の弟子の中に潔らざる手即ち盥ざる手にてパンを食する者ありし
 を見て之を責めたり。蓋パリサイの人とエダヤの人々のみな古の人の遺
 傳を守りて其手を潔あらそされば食せず。市より歸きとりて盥されば亦
 食せず此ほか杯碗鍋および牀を洗など多端の遺傳を受守れり。是に於て

ニ 西三〇八

メ 路十一〇廿九

ミ 聖廿九〇十三

シ 出廿〇〇十二
申廿一〇十六
利廿〇〇九
太廿五〇九
廿三〇十八
エ 出廿五〇九
申廿一〇十六
利廿〇〇九
太廿五〇九
廿三〇十八
ヒ 出廿五〇九
申廿一〇十六
利廿〇〇九
太廿五〇九
廿三〇十八
セ 出廿五〇九
申廿一〇十六
利廿〇〇九
太廿五〇九
廿三〇十八

マリサイの人と學者等イエスに問けるハ爾の弟子ハ何ゆゑ古の人の遺傳
よ違ハすして盥ざる手を以てパンを食する乎 イエス答て彼等に曰ける
ハイザヤハ偽善者なる爾曹を指てよく預言せり其録しと云よ此民ハ唇に
て我を敬へども其心ハ我に遠かり 人の誠を教さ爲て徒らに我を拜す
曰り 夫なんちらハ神の誠を棄てて人の遺傳を守れり即ち鍋杯を洗はく
此の如き事を行ふ また彼等よ曰けるハ爾曹ハ實に己の遺傳を守んさて
能も神の誠を棄る者なり 十 モーセ曰けるハ爾の父母を敬へ又父あるハハ
母を置る者ハ殺るべしと 然る爾曹ハ曰もし人父あるハハ母に對て爾を
愛ふべき物ハコルバン即ち禮物なりと曰ば事すとも可と 而して人の其
父あるハハ母少爲何をも行事を爾曹許す 斯なんちらハ其教る所の遺
傳をもて神の道を廢うす又おほく此類の事を行ふ 十四 イエスまた衆庶を
召て彼等に曰けるハ爾曹みな我言を聽て悟れ 外より人入るものハ人を
汚すこと能ハす然る人より出るものハ人を汚す也 十五 聽ゆる耳ある者ハ聽

ロ 太十五〇廿一
聖廿八

イ 耶六〇五九
耶七〇五九

ベー○ イエス衆庶を離れて室に入しに其弟子たごへの意を問ければ
彼等に曰けるハ爾曹もなほ悟ざるか凡う外より人に入るものハ人を汚し能
ハざる事を知ざる乎 蓋うの心に入らず腹に入れて厠に遺すなハち食ふ所の
もの潔れり 又曰けるハ人より出るものは人を汚す 人の心より出るものは
悪念 姦淫 苟合 兇殺 盜竊 貪婪 惡慾 詭譎 好色 嫉妬 驕 驕 傲 狂妄 等
二三 是等の惡行ハみな内より出て人を汚すもの也 二四 イエス此を去てツロ
シドンの境にゆき家に入て人に知れざらん事を欲しが隠れ得ざりき 二五
うは惡鬼に憑たる幼き女を有る婦イエスの事を聞て來り其足下よ伏たる
に因てなり 二六 この婦ハサイロピニシヤに生れしギリシヤの者なりしが惡
鬼を其女より逐出し給はん事をイエスに求り 二七 イエス彼に曰けるハ先兒
女に飽しむべし兒女のパンを取て犬に投るハ善らず 婦こたへて曰ける
ハ主よ然されど犬も案の下に在て兒女の遺屑を食ふ也 二九 イエス婦に曰け
るハ此言よ因て歸れ惡鬼ハ爾の女より出たり 三十 婦の家に歸しに惡鬼既

ハ十五〇廿九

に出て女の牀に臥たるを見る〇 イエスツロシドンシドンの地を去てデカボ

ハ十五〇卅一

リスの地を過ガリヤの海に至れリ 人々人々の諷の訥る者をイエスに携來リ

ホ二 約九〇六

て手を按給はん事を求めれば イエス衆人を離れ之を外へ携ゆき指を其

ホ二 約八〇十二

耳にさしいれ又唾して其舌に捫リ 且天を仰て嘆じ其人其人に對てエツマ

ホ二 約十一〇卅三

と曰これこれを譯ば啓よこの義なり 直に其耳其耳ひらけ舌の結ゆるみて正正く言

ハ 可五〇四十三

へリ イエス之を人に告る勿れ勿れ彼等を戒むれば戒むるほほ益言益言掛しぬ

ホ二 約八〇十二

衆人はなぞだしく駭きて曰けるハ此人の行し所所ここくく善ある善あるひは

ホ二 約八〇十二

聲を聴聴かせかせ或ハ啞者啞者を言はしめたり

ト 太十五〇卅一

當時當時あつまれる人々人々甚だ多多りしが何の食物食物も有有ざりければイエス

ト 太十五〇卅一

其弟子弟子を召て曰けるハ 我我この多多の人々を憫む既に三日三日われわれ共共に居し

ト 太十五〇卅一

ゆゑ今今なにも食物食物なし 三もし飢飢しまま其家其家に歸歸さば途間途間にて憊憊ん其其中中に

ト 太十五〇卅一

遠處遠處より來れる者者あれば也 四その弟子弟子かれに答けるハ此野野にて何處何處より

ト 太十五〇卅一

パンパンを得得よの人々人々を飽飽まめん乎 五イエス彼等彼等に問けるハパン幾幾何何あるあるヤ

七さ答ふ イエス人々に命じて地地坐せしめ七のパンパンを取て謝謝之之をわ

り人々の前に陳陳めんが爲その弟子弟子に與與ければ即ち人々の前に陳陳り七ま

たち小こき魚魚を些些須須もてり之之をも祝祝して人々の前前陳陳と曰 八人々人々ふれふれを食食て

飽飽その餘餘屑屑を七の籃籃に拾拾り 九之を食食る者おほおほよそ四千四千人なり乃ちイエス

之を歸歸しぬ 十 イエス直直に其弟子弟子と共に舟舟に乗乗てゲルマヌタゲルマヌタの方方に往往し

に 十一 パリサイの人人いでいで彼を試試んがため天天よりの休徵休徵を求めて詰詰はじむ

十二 イエス心心の中中に深く歎息歎息して曰けるハ此世世の人人なんぞ休徵休徵を求求るや誠

に我我なんぢらに告告ん休徵休徵は此世世の人人に必ず與與らじ 十三 イエス彼等彼等を離れ

て復復舟舟に乗乗むかふの岸岸に濟濟れり 十四 さて弟子弟子パンパンを携携ふるこさを忘忘た

一一のパンのみ舟舟に有有き 十五 イエス彼等彼等を戒めて曰けるハ戒心戒心してパリサイ

の人の麩麩酵酵さへへロテの麩酵麩酵を慎慎めよ 弟子弟子たがひに論論じて曰けるは是是は

ンンを携携へざり故ならん 十七 イエス之を知知て彼等彼等に曰けるハ何ぞ互互にパン

を携携へざり事を論論するや未未だ悟悟ざるか爾曹爾曹の心心なほ頑頑か 十八 目ありて視

ヲ 路十二〇一

ル 太十五〇卅九

マ 太十二〇卅八

ニ 太六〇卅

ル 太五十三〇三

★ 但七〇九
太二八〇三

エス・ペテロ・ヤコブ・ヨハンを伴ひ人を避て高山に登り給ひしが彼等の前にて其容貌かハリ 三 其衣カビやき白こと甚だしくして雪のごごとく世上の布漂も斯まるくハ爲能はざるべし 四 エリヤとモーセと共に彼等に現れてイエスと語をれり 五 ペテロ答てイエスに曰けるハラビ我儕こゝに居ハ蓄われらよ三の廬を建せ給へ一ハ主のため一ハモーセのため一ハエリヤの爲よせん 六 此ハ其謂をこころを知らしなり彼等いたく懼しに因 斯て雲彼等を蔽ひ聲雲より出て曰けるハ此ハ我が愛子なり之に聽べし 八 頓て弟子環視ければイエスと己の外ハ一人をも見ざりき 九 山を下る時にイエス彼等に命じて人の子の死より甦る迄ハ爾曹の見し事を人よ告る勿れと曰り 十 弟子等この言を守かつ互論じ曰けるハ死より甦ると云ハ何の事か 十一 彼等イエスと問て曰けるハエリヤハ前に來るべしと學者の曰るハ何や 十二 イエス答て曰けるハ實にエリヤハ前に來りて萬事を復振また人の子に就てハ其各様の苦難を受かつ輕慢らるる事を書まるされたり 十三 然我

馬可傳第九章
自三至十三節

大十二〇三
三十七〇二
三十七〇三
大十二〇三
三十七〇二
三十七〇三

なんぢらに告るエリヤ既に來しに彼に就て録されたりし如く人々の任に之を待へり 十四 イエス弟子等の所にきたり多の人々の彼等を環圍る學者たちの彼等と論じたりしを見たり 十五 衆人たゞちに彼を見て駭き趨りて禮をなせり 十六 イエス學者と問けるハ弟子と何事を論する乎 衆人のうち一人こたへけるハ師よ我ものいハハ惡鬼に憑れたる我子を爾に携來れり 十八 惡鬼の憑時ハ彼傾跌され沫をふき齒を切て疲勞はつる也これを迷出さんことを我なんぢの弟子に請しかど彼等能ざりき 十九 イエス彼等に答て曰けるハ噫信なき世なる哉いつまで我なんぢらと共に在んや何時まで我なんぢらを忍んや彼を我に携來れ 二十 彼等の子を携來りしに惡鬼イエスを見て忽ち彼を拘撃しむ彼地に仆れ輾轉て沫を出ぬ 二一 イエス父の父に問けるハ幾何時より如此なりしや父いひけるハ少時より也 惡鬼とばく之を火の中あるハ水のの中に投入て殺んさせり爾もし爲こことを得バ我儕を憫みて助よ 二三 イエス彼に曰けるハ爾もし信する事を得バ信する者

馬可傳第九章
自三至十三節

一 於て爲あたはざる事なし 其子の父たちには聲をあげ涙を流して曰け
 るは主よ我信す我が信なきを助たまへ イエス衆人の趨集るを見て惡鬼
 を叱いひけるは噓にして強なる惡鬼よ我なんぢよ命す出て再び之よ入な
 けれ 惡鬼さけびて大に彼を拘縛しめて出しかば彼死たる者の如なりぬ
 人々これを已に死りと云 イエスその手を執て扶ければ彼たてり ○ イ
 エス家に入しに其弟子ひうかに問けるは我儕これを運出すふ能ざりし
 ハ何故ぞ イエス彼等に曰けるは此族ハ祈禱と斷食に非れど運出すこと
 能ざる也 ○ 彼等こゝを去てガリラヤを過この事をイエス人の知を欲さ
 りき 蓋その弟子に教て人の子ハ人の手に付され彼等に殺され殺されて
 のち第三日に甦るべしと曰たまふが故なり 其とき弟子等この言を曉ら
 す亦問こゝを恐たり ○ 偕イエスカペナウンに至り室に居て弟子に問け
 るハ爾曹途間にて何を互に論ぜし乎 弟子黙然たり是途間よて互に論じ
 誰か大ならんとの争ありければ也 イエス坐して其十二を召かれらに曰

太二十七〇廿二
 三三
 卅四
 卅五
 卅六
 卅七
 卅八
 卅九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十

けるハ若し首たらん欲ふ者ハ凡の人の後となり且すべての人の使役と
 ならん 又また孩提を取て彼等の中に立て之を抱き彼等に曰けるハ 凡そ
 我名の爲に斯のごとき孩提の一人を接る者ハ即ち我を接るなり又われを
 接る者ハ即ち我を接るに非ず我を遣し者接るなり ○ ヨハ子彼に答
 て曰けるハ師よ我儕に従はざる者の爾の名に托て惡鬼を運出せるを見し
 が我儕に従はざる故これを禁たり イエス曰けるハ其人を禁る勿れ蓋わ
 が名により異なる能を行ひて輕易しく我を誹得る者ハあらじ 我儕に敵た
 はざる者ハ我儕ハ屬者なり 爾曹をキリストに屬者として我名の爲に一
 杯の水にても爾曹に飲する者ハ我まことに爾曹に告ん其人ハ賞を失はざ
 る也 又また凡う我を信する小子の一人を礙する者ハその首に懸を懸られ
 て海よ投入られん方うの人の爲になほ善るべし 若し爾の一手なんぢを
 礙かさバ之を斷され兩手ありて地獄すなはち滅ざる火に往んよりハ殘缺
 にて永生に入ハ爾の爲に善き也 彼處に入ものゝ蟲つきす火きはず

太三十〇廿二
 廿三
 廿四
 廿五
 廿六
 廿七
 廿八
 廿九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十

若なんぢの一足なんぢを礙かさば之を斷され兩足ありて地獄すなほち滅
 ざる火に投入られんよりハ跛にて永生に入ハ爾の爲に善なり 彼處に入
 ものミ蟲つきす火きぬす 四七 もし爾の一眼なんぢを礙かさば之を抉いだせ
 兩眼ありて地獄の火に投入られんよりハ一眼にて神の國に入ハ爾の爲に
 善なり 彼處に入ものミ蟲つきす火きぬす 蓋すべての人ハ鹽をつくら
 如く火を以せられ凡の祭物の鹽をもて鹽つけらる 鹽ハ善ものなり然
 鹽もし其味を失はば何をもて之に味を加んや爾曹心の中に鹽を有て又た
 がひに嗜み和ぐべし

第二十章 イエス此を去ヨルダンの外を経てユダヤの境の内に來しに多の人
 をまた彼に集りければ恒の如く彼等に教誨を爲たまへり 二
 來て彼を試み問けるハ人々の妻を出すハ可か 答て曰けるハモ一セハ爾
 口に何と命ぜし乎 彼等曰けるハモ一セハ離縁狀を書與へて之を出すと
 を許せり 五 イエス答て彼等に曰けるハモ一セ爾曹の心つれなきに因て此

一〇七
 一〇八
 一〇九
 一一〇
 一一一
 一一二
 一一三
 一一四
 一一五
 一一六
 一一七
 一一八
 一一九
 一二〇
 一二一
 一二二
 一二三
 一二四
 一二五
 一二六
 一二七
 一二八
 一二九
 一三〇
 一三一
 一三二
 一三三
 一三四
 一三五
 一三六
 一三七
 一三八
 一三九
 一四〇
 一四一
 一四二
 一四三
 一四四
 一四五
 一四六
 一四七
 一四八
 一四九
 一五〇
 一五一
 一五二
 一五三
 一五四
 一五五
 一五六
 一五七
 一五八
 一五九
 一六〇
 一六一
 一六二
 一六三
 一六四
 一六五
 一六六
 一六七
 一六八
 一六九
 一七〇
 一七一
 一七二
 一七三
 一七四
 一七五
 一七六
 一七七
 一七八
 一七九
 一八〇
 一八一
 一八二
 一八三
 一八四
 一八五
 一八六
 一八七
 一八八
 一八九
 一九〇
 一九一
 一九二
 一九三
 一九四
 一九五
 一九六
 一九七
 一九八
 一九九
 二〇〇

命を爲たる也 然と開闢のはじめ神人を男女に造り給へり 是故に人の
 一の父母を離るの妻と合て 二人のもの一體と成べし 然バ二人ハ非す一
 體なり 是故に神の耦せ給へる者ハ人これを離すべからず 十
 弟子等また此事を問ければ 十一 イエス彼等に曰けるハ凡る其妻を出して他
 の婦を娶る者ハ其妻と對して姦淫を行ふなり 十二 また婦もし其夫を出して
 他に嫁がバ此婦も姦淫を行ふなり 十三 イエスに撫れんがため人々孩提を
 携來ければ弟子等一の携來れる者を貴めたり 十四 イエス之を見て怒を舍か
 れらに曰けるハ孩提を我よ來せよ 彼等を禁る勿れ神の國に居ものハ斯の
 如き者なり 誠よ我なんぢらよ告ん凡そ孩提の如くよ神の國を承ざる者
 ハ之に入こまを得ざる也 即ち彼等を抱て手なうの上に按ふれを祝せり
 十七 イエス途に出けるに一人はしり來りて跪き問けるハ善師よ我が子
 なき生命を嗣ために何を行べき乎 十八 イエス彼に曰けるハ何ぞ我を善と稱
 や一人の外に善者ハなし 即ち神なり 十九 誠ハ爾が識こころなり姦淫する勿

大六〇十九
路十二〇三

れ殺なけれ盗なけれ妄の證を立る勿れ撈取なけれ爾の父と母を敬へ三
 て曰けるハ師よ是みな我が幼きより守れるもの也 二
 曰けるハ爾なほ一を虧ゆきて其所有をうり貧者に施せ然ば天に於て財あ
 らん而して來り十字架を操て我に従へ 三
 ハ大なる産業を有る者なればなり 三
 を有る者の神の國に入ハ如何に難かな 弟子この言を駭けりイエス復こ
 たへて彼等に曰けるハ小子よ財を恃む者の神の國に入ハ如何に難かな 三
 富者の神の國に入よりハ駱駝の針の孔を穿るハ却て易し 弟子たち甚
 く駭き互に曰けるハ然バ誰か救を受べき乎 四
 是人にハ能ざる所なれど神に於ハ然らず神ハ能ざる所なれば也 五
 於てペテロ彼に曰けるハ我儕一切を捨て爾に従へり 六
 ハ誠に爾曹に告ん我と福音の爲に家宅あるハ兄弟あるハハ姉妹あるハ
 ハ父あるハ母あるハハ妻あるハハ兒女あるハハ田疇を舍る者ハ 七
 三

路十二〇七
路十二〇七

路十二〇七
路十二〇七

路十三〇二
路十三〇二

路十三〇二
路十三〇二

路十三〇二
路十三〇二

路十三〇二
路十三〇二

世にて百倍を受ざる者なし即ち家宅兄弟姉妹母兒女田疇を遺棄し共に受
 また後の世にハ窮なき生を受ん 然ど多の先なる者ハ後になり後なる者
 ハ先になるべし 三
 ければ彼等おどろき且おそれて從へりイエス十二を作ひて將に己に及ん
 さする事を彼等告給ひけるハ 我儕エルサレムに上り人の子ハ祭司の
 長と學者等に付れん彼等これを死罪に定め異邦人に付し 又これを嘲
 弄し鞭を啣し且おれを殺ん斯て第三日に甦るべし 四
 プミヨハテイエスに來りて曰けるハ師よ我儕が求る事を願くハ我儕に成た
 まへ 三
 爾榮を得んとき我儕の一人を其右に一人を其左に坐せしめよ 三
 等に曰けるハ爾曹ハ求ふ所を知らず爾曹わが飲まざるの杯を飲わが受る所
 のパプテスマを受得るや 彼等いひけるハ能すべしイエス彼等に曰ける
 ハ爾曹ハ實に我が飲まざるの杯を飲また我が受る所のパプテスマを受べ

エ 百四十八〇

者ハ福ナリ 十 主の名に託て來る我儕の父なるダビデの國ハ福ナリ至 上 處

フ 九二〇十八

にホザナヨ 〇 十一 イエスエルサレムに至り聖殿ヲ入て盡くみまはし時す

テ 九二〇十八

に暮に及けれど十二さ倍にベタニヤに山往リ 〇 十二 明日かれらベタニヤより

出 九二〇十八

出時イエス饑たり 十三 遂に葉ある無花果の樹を見てその樹に何か有ん

テ 九二〇十八

て來しに葉の他なにも見ざりき是無花果樹の時に非れむ也 十四 イエスこの樹

ニ 九二〇十八

に對て今よりのち永久も爾の果を食ふ人あらざれさいふ弟子これを聞

テ 九二〇十八

〇 十五 彼等エルサレムに至りイエス殿に入てその中なる賣買する者を殿

ニ 九二〇十八

より逐出し兒 銀者の案牘を寫者の椅子を倒し 十六 かつ器具を以て殿を過

テ 九二〇十八

ることを許さず 十七 また彼等に諭て曰けるハ我室ハ萬國の人の祈禱の室

ニ 九二〇十八

稱らるべしと録されたるに非や然るに爾曹ハ之を盜賊の巢となせり 十八 學者

ニ 九二〇十八

と祭司の長これを聞て如何してハイエスを喪さんと謀しが彼を懼たり 十九

ニ 九二〇十八

人々みな其教に駭きたれを也 〇 二十 日くれてイエス城邑を出行リ 二十 聖朝

ニ 九二〇十八

れら無花果の樹を過る時その根より盡く枯たるを見る 二十一 彼テロ憶出で

ニ 九二〇十八

イエス曰けるハラビ見よ 〇 二三 所の無花果樹ハ枯たり 二三 イエス答て彼等に

ニ 九二〇十八

曰けるハ神を信ぜよ 〇 二四 誠ニ我なんぢらに告ん誰にても其心に疑ふ事なく

ニ 九二〇十八

其いふ所の言ハ必ず成べしと信じ此山に移て海に入といハ其言の如く

ニ 九二〇十八

成べし 〇 二五 是故に我なんぢらに告ん凡そ祈禱の時その求ふ所のものハ必ず

ニ 九二〇十八

得べしと信ぜバ必ず得べし 〇 二六 又なんぢら立て祈禱する時も人々を憐れ

ニ 九二〇十八

有バ之を免せ蓋天に在す爾曹の父に爾曹も亦ろの過を免されん爲なり 〇 二七

ニ 九二〇十八

もし爾曹免さずバ天に在す爾曹の父も亦なんぢらの過を免し給ハじ 〇 二八

ニ 九二〇十八

彼等またエルサレムに至りイエス殿を行るとき祭司の長學者および長老

ニ 九二〇十八

等きたりて 〇 二九 彼に曰けるハ何の權威を以て此事を行や誰が此事を行べき

ニ 九二〇十八

爲に爾に此權威を與しヤ 〇 三〇 イエス答て彼等に曰けるハ我も一言なんぢら

ニ 九二〇十八

に問ん我に答よ然ぞ我なんぢらに何の權威を以て之を行さいふ事を告べ

ニ 九二〇十八

し 〇 三一 ヨハ子のマテスマハ天よりか人よりか我に答よ 〇 三二 彼等たがひに論

ニ 九二〇十八

じ曰けるハ若し天より云む然ぞ何故かれを信ぜざるかと曰ん 〇 三三 もし人

六十四〇五

より云彼等民を懼たる也その民みなヨハ子ヲ預言者として爲に因 遂に

六十一〇卅三

至四十六

答て知す曰イエス答て曰けるハ我も何の權威を以て之を行ハ爾曹に語らじ

【第十三章】 イエス警をもて彼等に語れり或人葡萄園を樹り籬を環し酒樽を

ほり塔をたて農夫に租與て他の園へ往しが 期いたりけれど葡萄園の果

を收取ん爲に僕を農夫の所に遣しけるに 農夫等これを執へ打撲きて徒

く返しめたり 又また他の僕を彼等に遣し々に農夫等これを石にてうち首

に傷つけ辱しめて返しむ 又ほかの者を遣し々に之をも殺せり又ほか

多く遣し々に或ハ撲あるひハ殺しぬ 爰に一人の愛子ありけるが此わが

子ハ敬ふならん曰て遂に其子を遣し々に 農夫等たがひに曰けるハ此

ハ嗣子なり率これを殺さん然ど産業ハ我儕の者とならん 乃ち執へて之

を殺し葡萄園の外に棄たり 然ど葡萄園の主人なを爲べきが彼きたり

て農夫等を打滅し葡萄園を他の人に託ふべし 工匠の棄たる石ハ屋の隅

の首石と成り 此れ主の成たまへる事にして我儕の目に奇とする所なりと

録されしを未だ讀ざる乎 彼等この言ハ己等指て語れりと知イエスを

執んさせしかども衆人を懼てイエスを去ゆけり 彼等イエスを其言に

由て陥れんとしてパリサイの人とヘロデの黨の中より數人を遣せり

遣されし者等イエスの所に來り曰けるハ師よ爾ハ眞なる者なり又誰に

も偏らざる事を我儕ハ知そハ貌に依て人を取す誠を以て神の道を教れば

なり眞をカイザルに納るハ宜や否とれら納べきか納ざる可か イエスそ

の實ならざるを知て彼等に曰けるハ何ぞ我を試るやテナリを携來りて我

に觀よ かれら携來りければイエス彼等に曰けるハ此像と號ハ誰か答て

カイザルなりと曰 イエス曰けるハカイザルの物ハカイザルに歸し又神

の物ハ神に歸すべし彼等これを奇とせり 復生なしと曰なせるサドカ

イの人きたりてイエスに問けるハ 師よ我儕にモーセが書遠るにハ人の

兄弟もし子なくして妻を留し死ハその兄弟この妻を娶て兄弟の裔を立べ

六十一〇卅三 至四十六 中卅五〇五

六十一〇卅三 至四十六 中卅五〇五

六十一〇卅三 至四十六 中卅五〇五

これを娶めとりて子こなくして死し 第三三もまた然しかす七人七みな之のを娶めとりて子こなく終つひにハ此婦せんも死し 復生よみがへの時ときかれら甦よみがへらば此婦せんハ誰たれの妻つとと爲なるべきか蓋さ七人七おなじく之のを娶めとりてバ也 二四 イエス答こたて彼等かれらに曰いけるハ爾曹なんぢらハ聖書せいしよをも神かみの能あたりも知しざるに因よりて誤あやまれるならず乎 二五 それ死しより甦よみがへる時ときハ娶めとりて嫁よめがす天あまにある使者等つかひたちの如ごとし 二六 死し者ものの甦よみがへる事に就つてハモーセの書き中ちゆうの篇まきに神かみかれに語かたりて我われハアブラハムの神かみ イサクの神かみ ヤコブの神かみなりと曰いたまひしを爾曹なんぢら讀よむ乎 二七 神かみハ死し者ものの神かみに非あらず生いける者ものの神かみなり爾曹なんぢら大おほに誤あやれり 二八 學者がくしやの一人ひとりかれらの議論ぎろんを聞きてイエスの善よきこれに應こたへしを聞きたり彼かれに問とけるハ諸あつてのいましめ 誠まことのうら何いれ首かしらなる乎 二九 イエス彼かれに答こたへけるハ諸あつてのいましめ 誠まことの首かしらハイスラエルイスラエルよ應こたへ主まなる我儕われらの神かみハ即ひとち一の主まなり 三〇 心こころを盡つくし精神せいしんを盡つくし意いを盡つくし力ちからを盡つくし主まなる爾なんぢの神かみを愛あいすべし是こゝ誠まことの首かしらなり 三一 第二にも亦またふれに同おなじ己おのれの如ごとく爾なんぢの隣となりを愛あいすべし斯こゝより大おほなる誠まことなし 學者がくしや者ものイエスに曰いけるハ善よき師しよハ爾神なんぢかみハ即ひとち一ひとにして他ほかに神かみなしと曰いしハ

マ 太廿二〇卅四 至四十
ル 申六〇四五
チ 哥前十五〇四 十二 四十九五
リ 出三〇六

誠まことなり 三三 また心こころを盡つくし智慧ちいを盡つくし精神せいしんを盡つくし力ちからを盡つくして之のを愛あいし又またおのれの如ごとく隣となりを愛あいするハ諸あつてのいましめの燔祭ほんさいと禮物れいぶつよりも愈よるなり 三四 イエス彼かれが道理だうりを知る答こたを見て之のに曰いけるハ爾神なんぢかみの國くにより遠とほからず此こゝのち敢あへてイエスに問と者ものなかりき 三五 イエス殿どのに在ありて教誨しよを爲なする時ときかれらに答こたへて曰いけるハ何なんぞ學者がくしやハキリストキリストをダビテダビテの裔こといふ乎 三六 夫おのレダビテダビテ聖靈せいれいに感かんじて白みづから主まわが主まに曰いけるハ我われなんぢの敵てきを爾なんぢの足あし踏ふさなすまで我われ右みぎに坐ませよと 三七 此こゝ如ごとくダビテダビテ自ら彼かれを主まと稱よべり然しかど如何いかで其その裔こならんや多おほくの人ひと々々喜よろこびてイエスに聞きこむを爲なり 三八 イエス教しよをなせる時ときかれらに曰いけるハ長ながき衣服いふくを衣きてあるき市上ちやうたにて人ひとの間安あひさつ 會堂かいだうの高座かうざ筵席しんせきの上座かみずを好このむ また婦むすめの家いへを香かいつはりて長ながき祈いのりをする學者がくしやを謹防つしんぼうよ彼等かれらの罪つみせらるるこゝ尤もつとも重おもし 三九 イエス獲錢かっせんの箱はこに對むかひて坐まし人々ひとの錢ぜにを箱はこに入いるを見みたまひしに多おほく富者とみものハ多おほく投入なり 四〇 一人ひとりの貧へいき慈婦なんぢきたりてレプタレプタ二ふたを投入なる此こゝハ四厘よんりんほどに直あたれり 四一 イエスの弟子でしを召よびて彼等かれらに曰いけるハ誠まことに

カ 太廿二〇四十 一至四十一 至四十一
ル 申十五〇一
マ 太廿二〇四十五 七 三〇一至 三十一 〇四十
ソ 太廿三〇十四
ツ 太廿三〇十四
ナ 王下十二〇九

ク 卷八〇十二

我なんぢらに告ん箱に投入し凡の人々よりも此貧乏姙婦ハ多く投入たり

ル 卷八〇一

四四 そのハ彼等ハ皆その餘れる所を以て入この箱ハその不足さころより其す

ム 卷八〇二

べての所有すなはち全業を盡く入たれど也

ニ 卷八〇一

第五十三節 イエス聖殿より出けれど一人の弟子かれに曰けるハ師よ觀たま

ハ 卷八〇四

へ此石ハ殿宇いかに盛んならず乎 イエス答て曰けるハ爾曹この大な

ニ 卷八〇四

る殿宇を見か一の石も石の上に圯れずしてハ遺じ イエス橄欖山にて殿

ハ 卷八〇四

に對ひ坐し給しにハテロヤコブヨハ子アンテン竊ハ問けるハ 何の時こ

ハ 卷八〇六

の事あるや又すべて此事の成ん時ハ如何なる兆あるや我儕に告たまへ

ハ 卷八〇六

イエス答て彼等に曰けるハ人に欺かれざるやう慎めよ 蓋おほくの人わ

ハ 卷八〇六

が名を冒來り我ハキリストなりと曰て多の人を欺くべし 爾曹戰と戰の

ハ 卷八〇六

風聲を聞き懼るゝ勿れ是等の事ハみな有べきなり然ども末期ハ未だ至

ハ 卷八〇六

らす 民ハ起て民をせめ國ハ國を攻また隨在に地震あり饑饉變亂あり是

ハ 卷八〇七

等ハ苦難の始なり 爾曹みづから慎めよ蓋なんぢら集議所に付され又會

ハ 卷八〇一

堂にて建たれ且證を爲んため我事に因て候および王の前に曳立らるべし

ハ 卷八〇一

而して福音ハまづ萬民に宣傳ざるを得ず 人なんぢらを曳解さむ以前

ハ 卷八〇一

より何を言んさ慮また思煩ふ勿れ惟なんぢら其さき賜ふ所の言を曰べし

ハ 卷八〇一

蓋ものいふ者ハ爾曹に非ず聖靈なり 兄弟ハ兄弟を死に付し父ハ子を付

ハ 卷八〇一

し亦子ハその父母ハ逆ひて之を死しめ 又なんぢらハ我名に緣て凡の人

ハ 卷八〇一

に憎るべし然ど終まで忍ぶ者ハ救るゝことを得ん 預言者ダニエルが言

ハ 卷八〇一

し所の殘暴よくむ可ものゝ立べからざる所に立を見バ讀者よく思へし其

ハ 卷八〇一

時ユダヤに在る者ハ山に隠れよ 屋上に在る者ハ室に下る勿れ又物を取

ハ 卷八〇一

んきて其家入なけれ 田に在る者ハ其衣服を取んきて歸る勿れ 其日

ハ 卷八〇一

にハ孕る者さ乳を哺する婦ハ禍なる哉 なんぢら冬にぐることを免れん

ハ 卷八〇一

爲に祈れ 其日に患難あらん此の如き患難ハ神の物を創造さまひし開闢

ハ 卷八〇一

より今よ至るまで有ざりき亦後よも有じ もし主その日を減少し給すむ

ハ 卷八〇一

一人だに救るゝ者なし然ど主の選たまへる所の選れし者の爲に其日を減

廿七〇八

少し給ふべし 其時もしキリスト此にあり彼に在る爾曹にいふ者あると

廿七〇九

も信する勿れ 其偽キリスト偽預言者おこりて休徴と奇能を行ひ選

廿七一〇

れたる者をも欺くことを得て欺くべけれ也 なんぢら慎み我預じめ爾

廿七一一

曹に盡く之を告 厥時この患難ののち日ハ晦く月ハ光を失ひ 天の星ハ

廿七一二

おち天の勢ひ震ふべし 其とき人々ハ人の子の大なる權威と榮光を以て

廿七一三

雲の中に現れ来るを見ん また其とき人の子その使者等を遣して地の極

廿七一四

より天の極まで四方より其選れし者を集むべし 夫なんぢら無花果樹に

廿七一五

由て譬を學その枝すて柔かよして葉めぐめ 夏の近を知 此の如く爾

廿七一六

曹も凡て是等の事を見む時ちかく門口に至ると知 され賊に爾曹も告ん

廿七一七

是等の事こまぐく成までハ此民ハ逝ざるべし 天地ハ廢ん然ぞ我言ハ

廿七一八

廢じ 其日その時を知者ハ惟わが父のみなり天にある使者も子し誰も知

廿七一九

者なし 此日いづれの時きたる乎を知らざれば 爾曹つゞしみて目を醒し

廿七二〇

祈禱せよ され人の子の遠行せんとして其權を僕等よ委れ各よ爲べき事

廿七二一

を任け又爾曹も忘らす守れと命じて家をさる人の如し 是故に爾曹も忘

廿七二二

らすして守れ蓋家の主人あるひハ夕あるひハ夜半あるひハ鶏鳴時あるひ

廿七二三

ハ早辰も歸るかを知らざれ也 恐くハ不意の時きたりて爾曹が眠るを見

廿七二四

ん され念らすして守れと爾曹に告るハ即ち凡の人に告るなり

廿七二五

以てイエスを執へ殺さんとし 曰けるハ祭の日ハ爲べからず恐くハ民の

廿七二六

中ハ亂おこらん 〇 イエズベタニヤの癩病シモンの家にて食し居たまへ

廿七二七

る時ある婦蠟石の盒よ假貸キナルドの香膏を盛て携來り其盒を裂りイエ

廿七二八

ズの頭に膏を沃たり 或人々互に怒を含いひけるハ此膏を糜すハ何故ぞ

廿七二九

ヤ 之を糜む三百有奇のデナリを得て貧 者に施すよを得ん 此婦を言

廿七三〇

告む 〇 イエズ曰けるハ彼に係る勿れ何ぞ此婦を擾すや我に善事を行へる

廿七三一

也 貧 者ハ常よ爾曹と併に在る爾曹忠に隨せて彼等を濟ることを得べし

廿七三二

我ハ常よ爾曹と併に在る 〇 この婦ハ力を盡して作り蓋あらかじめ我を葬

九 われ 我まここゝ爾曹も告ん天の下いづくもても
 十 此福音を宣傳らるゝ處にハ此婦の行し事も亦その記念の爲に宣傳らるべ
 十一 して十二の一人なるイスカリテのユダイエスを付さんさて祭司の
 十二 長に往しに 彼等これを聞て悦び銀子を予んと約せしかバユダイエス
 十三 を付さん機を窺へり ○ 除 醉 節の首の日すなハち逾越の羔を殺す
 十四 べき日弟子イエス曰けるハ逾越の食を何處へ往て我儕備ふべき乎
 十五 エス二人の弟子を遣さんとして之に曰けるハ京城に往さらバ水を盛たる
 十六 瓶を挈る人に遇べし之に従へ 十四 その入さふるの家の人に師いふ我弟子
 十七 二人に逾越を食すべき客房ハ安に在やと曰 然れば彼陳設たる大なる樓
 十八 房を爾曹に示べし我儕の爲に其處に備ふ 弟子ゆきて京城に入しにイエ
 十九 スの曰たまへる如く遇しかバ逾越の備をなせり ○ 日暮てイエス十二の
 二十 弟子と偕に來れり 十八 かれら席を就て食する時イエス曰けるハ誠に我なん
 二十一 ぢらに告ん我と偕に食する爾曹のうち一人われを賣すべし 彼等愛て各

大廿六〇十七
 至廿九
 路廿三〇七五
 十三

大廿六〇廿五
 至廿五
 路廿二〇十四
 至廿三
 約十三〇廿一
 至十六

廿 我なる乎また他の一人も曰けるハ我なる乎
 廿一 イエ
 廿二 ス答て曰けるハ十二の中の一人われと共よ手を盃に着る者是なり 人の
 廿三 子ハ己に就て録されたる如く逝ん然る人の子を賣す者ハ禍なる哉その人
 廿四 ハ生ざりしならバ幸なりし爲ん 廿三 かれら食する時イエスマンを取て祝し
 廿五 之を撃かれらに予て曰けるハ取て食へ此ハ我身なり 廿三 また杯を取て謝して
 廿六 彼等に予ければ皆この杯より飲り 廿四 イエス曰けるハ此ハ新約の我血にし
 廿七 て衆の人の爲に流す所のもの也 我まふさに爾曹に告ん今よりのち新し
 廿八 きものを神の國にて飲ん日までハ葡萄にて製るものを飲じ ○ 廿六 かれら歌
 廿九 を詠て橄欖山に往り 廿七 イエス彼等に曰けるハ今夜なんぢら皆われに就て
 三十 眠らん蓋され牧者を撃ん其さき綿羊散べしと録されたれを也 然る我よ
 三十一 みがへりて後なんぢらに先ちカリラヤに往べし 廿九 ヘテロイエスに曰ける
 三十二 ハ假令みな疑くとも我ハ然らず 三十 イエス彼に曰けるは我まここに爾に告
 三十三 ん今日この夜鶏二次鳴まへに爾三次われを知すと曰ん 三十一 彼また力言いひ

大廿六〇廿一
 至廿五
 路廿二〇廿一
 至廿八
 約十三〇廿六
 至十六〇七

大廿六〇廿一
 至廿五
 路廿二〇廿一
 至廿八
 約十三〇廿六
 至十六〇七

けるハ我ハ爾と偕に死るも爾を知らずと曰じ弟子みな如此いへり 斯て
 彼等ゲツセマ子といふ所に至りイエスその弟子に曰けるハ祈る間ここに
 坐せよ 遂にペテロヤコブヨハ子を伴ひゆき甚しく憂へ哀を催し 彼等
 に曰けるハ我心いたく憂て死るむかりなり爾曹こゝに待て目を醒し居
 イエス少し進行て地にふし祈り曰けるハ若かなせば此時を去しめ給へ
 また曰けるハアゴ父よ爾に於てハ凡の事能ざるなし此杯を我より取たま
 へ然ど我が欲ふ所を成んとするに非ず爾が欲ふ所に任せ給へ イエス
 來りて彼等の寢たるを見ハテロに曰けるハシモンなんぢ寢たるか一時も
 目を醒し居こぞ能ざる乎 誘惑に入ぬやう目を醒かつ祈その心神ハ願な
 れど肉體よき也 復ゆきて同言を曰て祈れり 返りて復かれらの寢た
 るを見る此ハ彼等その目倦たるなりイエスに何ぞ對ふ可やを知らざりき 三
 次きたりて彼等に曰けるハ今ハ寢て安め充分なり時いたれり人の子ハ罪
 人の手に賣さるも也 起よ我儕ゆくべし我を賣す者近けり 斯いへる

ヨ 大廿六の卅六
 路廿六の卅九
 五十四の卅九
 約十二の廿七
 ヌ 約十二の廿七
 ル 路八の十五
 約五の七
 五〇の七
 六〇の卅八
 ヲ 約五の七
 六〇の卅八
 ヲカ 約十三の〇一
 大廿六の〇一
 路廿六の〇四
 七五の〇四
 七五の〇四
 約七の〇三
 約七の〇三
 約七の〇三
 約七の〇三

時たぢち十二の一人なるユダ刃とを携たる多の人々と共に祭司の
 長學者および長老の所より來る イエスを賣者かれらに號をなして曰け
 るハ我が接吻する者ハ其なり之を執て愼と曳去よ 即ち來りてイエスに
 近よりラビラビと曰て接吻せり 人々手をイエスに措て執ふ 傍に立る
 者の一人刃を抜て祭司の長の僕を撃その耳を削り イエス答て彼等に曰
 けるハ刃と棒とをもち盜賊を執る如くして我を執に來る乎 われ日々な
 んぢらと共に殿にて教しよ爾曹われを執ざりき然ど此ハ聖書に應せんが
 爲なり 弟子みなイエスを離て奔去ぬ 一少者その身にたゞ麻の夜具
 を蔽てイエスに從ひたりしが逮捕の者等これを執ければ かれ麻の夜具
 をすて裸にて逃去り 衆人イエスを祭司の長に携往けるに祭司の長長
 老および學者等こゝこく彼の所を集れり ペテロ遠く離れてイエスに
 從ひ祭司の長の庭の内まで入僕と共に坐して火に煖まり居り 祭司の長
 および議員みなイエスを殺んとして證を求めども得ず 多の人々イエス

大廿六の五十五
 九六の五十五
 九六の五十五
 三十七の六十一
 大廿六の五十五
 路廿二の五十五
 約十八の十三
 大廿六の五十五
 路廿二の五十五
 約十八の十三
 大廿六の五十五
 路廿二の五十五
 約十八の十三
 大廿六の五十五
 路廿二の五十五
 約十八の十三
 大廿六の五十五
 路廿二の五十五
 約十八の十三
 大廿六の五十五
 路廿二の五十五
 約十八の十三

ツ 群五〇十一
 子 可十五〇九
 約 二〇九九

五八 其證を言出せども其證あらず 或人々たちて妄の證を言出したけるハ
 手て 以て 作たる 此聖殿を 毀ち三日の間 手に 以て 作ざる 別の殿を
 建ん と言し 我儕ハ 聞き 如此いひしが 其證また 符す 祭司の長中より立
 て イエスよ 問いひけるハ 爾答る言なき乎 この人々の爾に 立る 證據ハ 如何
 ナ イエス 黙然として 何も 答ざり けれど 祭司の長また 彼に 問て 曰けるハ 爾
 ハ 頷べき者の子キリストなる乎 イエス曰けるハ 然り人の子大權の右に
 坐し 天の雲の中 現れ 來るを 爾曹 みるべし 是に 於て 祭司の長その衣を
 裂て 曰けるハ 我儕なんぐ復ほかに 證據を 求んや その 發洩たる言ハ 爾曹
 も 聞る所なり 爾曹如何よ 意ふや 彼等擧て イエスを 死に 當るべき者と 疑と
 リ 或者ハ 彼に 唾し 又その面を 掩ひ 拳にて 撃いひけるハ 預言せよ 亦僕等
 も 手の掌よて 彼を 批り 六六 ペテロ 下庭に 在しに 祭司の長のある 婢きたりて
 六七 其火に 煖まり 居を見つらく 彼を 視て 曰けるハ 爾も ナザレの イエスと
 僞に 在し 六八 ペテロ 肯はずして 曰けるハ 我これを 知す 亦なんぢが 言さるる

六六 六七 六八

六九 七〇 七一

七二 七三 七四

七五 七六 七七

七八 七九 八〇

八〇 八一 八二

八三 八四 八五

八六 八七 八八

八九 九〇 九一

九二 九三 九四

九五 九六 九七

九八 九九 一〇〇

一〇一 一〇二 一〇三

一〇四 一〇五 一〇六

一〇七 一〇八 一〇九

一一〇 一一一 一一二

一一三 一一四 一一五

一一六 一一七 一一八

の事を 識得ざるなり 斯て 庭門より 出けれど 鶏鳴ぬ 其の婢これを 見て 傍
 に 立る者 又いひけるハ 此人も かの 黨の一人なり 七十 ペテロ また 肯はず少
 頃して 傍に 立る者 また ペテロに 曰けるハ 爾誠 に 彼の 黨の一人なり 蓋爾ハ
 カリラヤの人なり 其方言これに 合り 是より 於て ペテロ 暫て 我神の 崇を受
 るとも 爾曹が 言その人 我ハ 識ざる也 曰しが 七二 此とき 鶏二次 鳴ければ
 ペテロ イエスの 鶏二次 なく 前に 三次 我を 識す 曰んと言さまひし 事を 憶
 起し 且これを 思反して 哭悲めり

七二 七三 七四

七五 七六 七七

七八 七九 八〇

八〇 八一 八二

八三 八四 八五

八六 八七 八八

八九 九〇 九一

九二 九三 九四

九五 九六 九七

九八 九九 一〇〇

一〇一 一〇二 一〇三

一〇四 一〇五 一〇六

一〇七 一〇八 一〇九

一一〇 一一一 一一二

一一三 一一四 一一五

一一六 一一七 一一八

一一九 一二〇 一二一

一二二 一二三 一二四

一二五 一二六 一二七

一二八 一二九 一三〇

一三一 一三二 一三三

一三四 一三五 一三六

平旦に 及び 直に 祭司の 長老 學者 たち凡の 議員と共に 議て イエ
 スを 繫り 曳 携て ピラトに 解せり 二 ピラト 彼に 問けるハ 爾ハ エダヤ人の 王
 なるや イエス 答けるハ 爾が 言る如し 三 祭司の 長多 端をもて 彼を 訟ふ 四
 ラト 復 イエスに 問て 曰けるハ 何も 答ざるか 彼等が 爾について 證を 立しこ
 と 幾何かりぞ 乎 五 ピラトの 奇を 爲まで イエス 何も 答ざり 六 僞この
 節筵にハ 彼等が 求に 任せて 一人の 囚人を 赦すの 例なり 七 時に パラバと云

一三六 一三七 一三八

一三九 一四〇 一四一

一四二 一四三 一四四

一四五 一四六 一四七

一四八 一四九 一五〇

一五一 一五二 一五三

一五四 一五五 一五六

一五七 一五八 一五九

一六〇 一六一 一六二

一六三 一六四 一六五

一六六 一六七 一六八

一六九 一七〇 一七一

一七二 一七三 一七四

一七五 一七六 一七七

一七八 一七九 一八〇

一八一 一八二 一八三

一八四 一八五 一八六

一八七 一八八 一八九

一九〇 一九一 一九二

一九三 一九四 一九五

一九六 一九七 一九八

一九九 二〇〇 二〇一

二〇二 二〇三 二〇四

二〇五 二〇六 二〇七

二〇八 二〇九 二一〇

二一一 二一二 二一三

二一四 二一五 二一六

二一七 二一八 二一九

二二〇 二二一 二二二

二二三 二二四 二二五

マ 徒三〇十四

マ 太七〇廿七
約十九〇一至
十六
マ 太七〇廿一
約十九〇十六

る者あり己と共謀叛せし衆と同一く繋れ居たりしが彼等ハその謀叛のさ
 き人を殺し者等なり 八 人々聲を揚て呼り恒例の如せん事を求り 九
 ト彼等に答て曰けるハユダヤ人の王を爾曹に我が釋さん事を欲むや 十
 此れ
 是
 十
 十一
 祭司の長民
 十二
 祭司の長民
 十三
 然
 十四
 彼等曰けるハ然
 十五
 彼等曰けるハ然
 十六
 彼等曰けるハ然
 十七
 彼等曰けるハ然
 十八
 彼等曰けるハ然
 十九
 彼等曰けるハ然
 二十
 彼等曰けるハ然
 二十一
 彼等曰けるハ然

マ 太七〇廿七
約十九〇一至
十六
マ 太七〇廿一
約十九〇十六
マ 太七〇廿七
約十九〇一至
十六
マ 太七〇廿一
約十九〇十六

レ子のシモンと云るもの田間より來りて其處を經過りければ強て之にイ
 エスの十字架を負せたり 二三 イエスをゴルゴタ譯バ即ち髑髏と云る所に携
 來り 汲薬を酒に和て飲せんと爲りしに之を受ざりき 二四 イエスを十字架
 に釘しのうち誰が何を取んご圖を拵てその衣服を分てり 二五 朝の第九時にイ
 エスを十字架に釘すの罪標をユダヤ人の王と書つく 二六 二人の盜賊かれ
 と共に一人ハ其右一人ハ其左に十字架に釘らる 二七 此れ聖書に彼ハ罪人
 と共に算られたり云しに應り 二八 往來の者イエスを詈り首を搖て曰けるハ
 噫聖殿を毀て之を三日に建てる者よ 二九 自己を救て十字架を下よ 三〇 祭司の長
 學者等も同く嘲弄して互に曰けるハ人を救て自己を救ひ能す 三一 イスラエ
 ルの王キリストハ今十字架より下るべし然バ我俯見て之を信ぜん又さも
 に十字架に釘られたる者等も彼を詈れり 三二 十二時より三時に至るまで
 編く地のうへ暗なりぬ 三三 第三時にイエス大聲より呼りエリエリラマサバク
 タニと曰これに譯バ吾神わが神なんぞ我を遺たまふ乎と云るなり 三四 傍ら

キ 一 卅六十九〇廿
 一 卅六十九〇廿
 往て海絨をとり醋を漬せ之を葦に束て彼に飲しめ曰けるハ俟エリヤ來りて彼を救ふや否こゝろむべし〇 イエス大なる聲を發て氣絶 殿の帳上より下まで裂て二と爲り イエス又對て立たる百夫の長かく呼り氣絶しを見て曰けるハ誠ニ此人ハ神の子なり〇 また遙に望めたる婦ありし其中に在し者ハマケダラのマリアおよび年少ヤコブとヨセの母なるマリア又サロメなり 彼等ハイエスのガリラヤに居たまひし時これに従ひ事し者等なり亦この他にも彼と共にエルサレムに上りし多の婦ありき〇 是日ハ備節日にて安息日の前の日なりし故 日暮るまじ尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云る者きたれり此人ハ神の國を慕る者なり彼はピラトに往てイエスの屍を求めたり 彼はヨセフの已に死るを奇み百人の長を呼て彼ハ死てより時を経たるや否やを問 百夫の長より聞て之をまり屍をヨセフに予ふ 〇ヨセフ 案布を買求め而してイエスを取下し

メ 大卅七〇五十五
 七卅六十一
 六卅五十一
 五卅四十一
 四卅三十一
 三卅二十一
 二卅十一
 一卅十一

エ 卅八〇三三

之をその案布にて裹み槩に墜たる墓におき石を墓の門に轉し置り マケダラのマリア及ヨセの母なるマリア其屍を葬し處を見たり
 安息日過てマケダラのマリアとヤコブの母なるマリア及サロメ香料を買さるのヘイエスに抹んごて來れり 七日の首の日に早く日の出る時かれら墓に來り 互に曰けるハ誰か我俯の爲に石を墓の門より轉し取もの有んか是の石はなほだ巨大なれば也 斯て彼等目を舉れば石の已に轉あるを見る 墓に入しに白衣をきたる少者の右の方に坐せるを見て駭き異めり 少者かれらに曰けるハ駭き異む勿れ爾曹ハ十字架に釘られしナザレのイエスを認ぬ彼ハ甦りて此に居す彼を葬し處を觀よ 且ゆきて其弟子とヘテロに告よ彼ハ爾曹に先ちてガリラヤに往り爾曹かしふよて彼を見べし即ち其なんぢらよ言しが如し 彼等いで墓より奔れり且戰慄かつ駭き亦一言をも人に語ざりき是懼しが故なり〇 イエス七日の首の日よあけころ甦りて先マケダラのマリアと現る 〇イエス彼よ

シ 大卅八〇一
 卅七〇一
 卅六〇一
 卅五〇一
 卅四〇一
 卅三〇一
 卅二〇一
 卅一〇一

セ 大卅六〇廿二
 卅五〇八

ス 卅八〇二
 卅七〇二

口 大九〇十五

ハ 路廿四〇十一

ニ 路廿四〇十三

ホ 路廿四〇廿六

ト 約三〇十八

チ 約三〇十八

リ 約三〇十八

ル 約三〇十八

メ 約三〇十八

ヨ 約三〇十八

タ 約三〇十八

チ 約三〇十八

ル 約三〇十八

メ 約三〇十八

ヨ 約三〇十八

ヨ 約三〇十八

タ 約三〇十八

チ 約三〇十八

ル 約三〇十八

メ 約三〇十八

ヨ 約三〇十八

ヨ 約三〇十八

タ 約三〇十八

チ 約三〇十八

ル 約三〇十八

メ 約三〇十八

ヨ 約三〇十八

七の悪鬼を逐出せり。イエスと共に在し者の悲哀める時に此婦きたりて是等の事を告ぐ。彼等イエスの活て此の婦に見給ひしことを聞しが信ぜざりき。此後かれらの中二人の者郷村へ往けるが路を行きイエス變たる貌よて彼等に現る。この二人の者ゆきて他の弟子等に告げれども亦これを信ぜざりき。又その後十一の弟子の食しをる時に現れて彼等が信なきと其心の頑さを責め給へり。是かれらイエスの甦り給るのち其を見し者の言を信ぜざりし故なり。イエス彼等に曰ける、爾等世界を廻て凡の人福音を宣傳し。信じてバプテスマを受る者ハ救れ信ぜざる者ハ罪に定らる也。信する者ハ左の如き奇跡またがふべし。我名を誦て悪鬼を逐出し、異邦の方言をいひ、また蛇を操へ毒を飲さず害なく、又手を病の者ハ按なば即ち愈ん。斯て主ハ彼等ヲ語し、天に擧られ神の右に坐しぬ。弟子たち徧く福音を宣傳ふ主も亦かれらに力を協せ其従ふ所の奇跡をもて道の徴と爲たまへり。アーメン。

新約全書馬可傳福音書終

新約全書路加傳福音書

| | | | | | | | | |
|------------|--------------------|------------|-----------------------------|-------------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| イ | ハ | ニ | ト | チ | リ | ヌ | ル | ヲ |
| 約十五 六〇七 | 來二〇三 彼一〇三 十六 | 徒一〇一 至三 | 約廿一 太二〇 上廿一 十 十 | 創七〇一 百三〇 三〇一 一 | 九代上 廿四〇 十 | 八代下 八〇十 四 | 七代上 廿三〇 十 | 六代下 廿九〇 十 |

【路加福音】我儕の中に篤く信ぜられたる事を始より親く見て道に役たる者の

二 我儕も傳し如く記載ん多の人々これを手に執る故に貴きヲヨヒロよ

三 我も原より諸の事を詳細に考究たれば次第を爲て爾に書おくり 爾が

教られし所の確實を曉せん欲り○ ユダヤの王ヘロデの時にアピアの

班なる祭司ザカリアと云る者あり其妻ハアロンの裔にて名をエリサベツ

と云 共に神の前にて義人なり凡て主の誠命と禮儀を虧なく行へり

リサベツ姓なきが故に彼等に子なし又二人とも年も老ぬ 八 ザカリアその

班次に値て神の前に祭司の職を行ふ時 祭司の例に従ひ籤を抽て主の殿

にいり香を焼くことを得 香を焼ける時衆の人々ハみな外に居て祈れり

十二 主の使者香壇の右に立てザカリアも現れしかば 十二 ザカリア之を見て驚

懼る 十三 天使かれに曰けるハザカリアも懼る勿れ爾の祈すて聞たま

へり爾の妻エリサベツ男子を生ん其名をヨハ子と名くべし 十四 爾も喜ぶ樂

カ 十一〇七五
 十 十六〇二五
 九 七三〇四
 八 七三〇四
 七 七三〇四
 六 七三〇四
 五 七三〇四
 四 七三〇四
 三 七三〇四
 二 七三〇四
 一 七三〇四
 十 七三〇四
 九 七三〇四
 八 七三〇四
 七 七三〇四
 六 七三〇四
 五 七三〇四
 四 七三〇四
 三 七三〇四
 二 七三〇四
 一 七三〇四
 十 七三〇四
 九 七三〇四
 八 七三〇四
 七 七三〇四
 六 七三〇四
 五 七三〇四
 四 七三〇四
 三 七三〇四
 二 七三〇四
 一 七三〇四

ありん多の人も亦その生るゝに因て悦び有ん 十五 それ此子主の前に大なら
 ん又葡萄酒と濃酒を飲じ母の胎より生出て聖靈に充さる 又イスラエ
 ルの民の多の人を主なる其神に歸す可れば也 彼エリヤの心と才能を以
 て主の先を行ん是父の心より子を慈はせ逆れる者を義人の智に歸せ主の爲
 に新なる民を備ふとなり 十八 ザカリヤ天使に曰けるハ我すては年老妻もま
 た年邁たれど何に因てか此事あるを知ん 天使はたへて曰けるハ我ハガ
 プリエルとて神の前より立者なり爾も語てこの喜の音を告ん爲に遺されと
 れバ 其時いたりて必ず成べき我が言を信ぜざるに因なんぢ瘖となりて
 此事の成日まで言ふこと能はじ 民ザカリヤを俟ぬて其殿の内にて久きを異
 む ザカリヤ出て言ふこと能はざりしかバ彼等その殿の内にて異象を見
 たる事を曉たりザカリヤ衆人に首を以て示し竟も瘖となれり 二十三 その職事
 の日満ければ家に歸りぬ 此後その妻エリサベツ孕て隠をりしハ五ヶ
 月にして 日けるハ主が恥を人の中に隠せん爲に眷顧たまふ時ハ此の

若く我に爲り 〇 六ヶ月お當りガリラヤのナザレと名たる邑の ダビ
 デの家のヨセフと云る人の聘定せし所の處女に神よりガプリエルといふ
 天使を遣されたり其處女の名ハマリヤと云り 天使この處女に來いひけ
 るハ度たし悪る者よ主なんぢに在す爾ハ女の中にて福なる者なり
 處女その言を訝この問安ハ如何なる事ぞと思へり 天使いひけるハマ
 リヤよ懼るゝ勿れ爾ハ神より惡を得たり 爾孕て男子を生ん其名をイエ
 スと名べし 三三 され大なる者と爲て至上者の子と稱られん又主たる神その
 先祖ダビデ王の位を彼に預れむ ヤコブの家を窮なく支配すべく且その
 國終ること有ざるべし 三十四 マリア天使に曰けるハ我いまだ夫に適ざるに何
 にして此事ある可や 天使はたへて曰けるハ聖靈なんぢに臨る至上者の
 大能なんぢを庇ん是故に爾が生さるの聖なる者ハ神の子と稱らるべし
 三六 それ爾の親戚エリサベツ彼も年老て男子を孕り素姪なき者と稱れたり
 しが今すては孕て六ヶ月になりぬ 蓋神に於て能ざる事なれど也 三十八

Table with 12 columns (A-L) and 12 rows of numbers, likely a concordance or index table for the text.

美べき哉これ其民を眷顧して贖を爲し 我儕の爲に拯救の角を其僕ダビデの家に授たまへば也 古より聖なる預言者の口を以て言たまひしが如し 即ち我儕を敵また凡て我儕を惡む者の手より脱す救なり 此ハ仁惠を我儕の先祖に施し又その聖約を忘じこ也 是我儕の先祖アブラハムに立し所の誓にして 我儕を敵の手より救ひ我儕の生涯を 聖と義とに於て懼なく主に事しめんさ也 嬰兒よ爾ハ至上者の預言者と稱られん蓋なんち主に先ちて行その路を備んさ爲ばなり 神の深き怜恤に賴その罪を赦されて救れん事を其民に示さんため也 其の怜恤に賴て旭の光上より 暗と死陰に住る者を照し我儕の足を導きて平康なる路に導き至せんさて臨めり 斯て嬰兒ハ漸成長し精神ますます 強健にしてイスラエルに顯るる日まで野に居り

當時天下の戸籍を查る詔命カイザルアウグストより出たり 此の戸籍調査ハクレニオスリヤを管理し時の初次に行はれたりし也 人みな

Table with 12 columns (A-L) and 12 rows of numbers, likely a concordance or index table for the text.

戸籍に登んさて各その故邑に歸たり 此ハダビデの家族また血統なれど月籍に登んさて 已に孕る其聘定の妻マリヤと共ガリヤの邑ナザレより出てユダヤに上りダビデの邑ベツレヘムといふ所に至れり 此に居て産期満ければ 家子を産せしを布に裹て 槽に臥せたり 此ハ客舎に彼等の居處なかりしが故なり 近傍に羊を牧もの有けるが野に居て夜間その群を守たりしよ 主の天使きたりて 主の榮光かれらを環照ければ 牧者おほひに懼たり 天使これに曰けるハ 懼るふさ勿れわれ萬民に關りたる大なる喜の音を爾曹に告べし 爾曹布よて裹し嬰兒の槽に臥たる救主をわれ給へり 是主たるキリストなり 爾曹布よて裹し嬰兒の槽に臥たるを見ん是の徴なり 候ち衆の天軍あらはれ 天使と共に神を讚美て曰けるハ 天上さるるにハ榮光神にあれ地にハ平安人にハ恩澤あれ 天使等かれらを離て天に行ければ 羊を牧もの互に曰けるハ 幸ベツレヘムにゆき 主の示し給へる其有し事を見んさて 急ぎ至りマリヤと共ガリヤに

に臥たる嬰兒に尋通り、既に見て此子につき天使の語り事を傳播せり。聞き者みな羊を牧者の語る事を奇みたり。マリア凡て是等の言を心に記て思想しぬ。羊を牧者その見聞せる所みな己に語りし所の如なるにより神を崇まつ讚美て返れり。○子に割禮を行ふべき八日の日いたりければ、其いまだ胎に寓ざる先に天の使者の稽し如く名をイエスを稱たり。○一七の律法に循ひて潔の日滿ければ、嬰兒を携て主に獻んが爲エルサレムの上れり。是主の例に初生るゝ男子ハ主の聖者と稱へしと録されたるが如し。○また主の律法に疵鳩一雙あるひハ難鳩二を獻ふべしと旨る。○循ひて祭を行ん爲なり。○俗エルサレムにシメオンと云る人あり斯人の義かつ敬ありてイスラエルの民の慰められん事を俟る者なり。聖靈その上に臨り。また主のキリストを見ざる間ハ死じと聖靈にて示さる。○二七に靈に感じて神殿に入り兩親その子イエスを律法の例に循ひて行さん。携來りしにシメオン嬰兒を抱き神を讚美いひけるハ、主よ今その言に従

| | | | | |
|---------|-------|------|-----|-----|
| 創世七〇六十一 | 路一〇五八 | 太一〇一 | マテ | ルカ |
| 一〇七 | 二〇二 | 二〇五 | 一〇一 | 一〇一 |

ひて僕を安然に世をば逝せ給ふ。我目すては萬民の前に設たまひし教を見たり。○これ異邦人を照さん光なり。○また爾の民イスラエルの榮なり。○その父母ハ嬰兒を就て語る事を奇をれり。○又シメオン彼等を視て其母マリアに曰けるハ、此嬰兒ハイスラエルの多くの人の頼て且與らん事と。辨駁を受ん其號よ立らる。○これ多くの心の念の露れんが爲なり。○又劍なんぢが心を刺透へし。○マセカの支派バメルの女にアンナと云る預言者あり。○ハ甚老邁なり其處女なりしとき夫よ適て七年もに居たり。○この老女の歸おほよそ八十四歳の嫠なりしが、殿を離す夜も晝も斷食と祈禱を爲て神に事ふ。○此時この老女も側に立て主を讚美し亦エルサレムにて贖を望る。○凡の人に此子の事を語り。○主の律法に循ひて悉く免ければ、ガリラヤの己が邑ナザレに歸たり。○其子や成長して精神強健、智慧みち神の恩寵その上に臨り。○俗その兩親毎年、逾越の節筵ユエルサレムに往しが、彼の十二歳の時、また節筵の例に従ひエルサレム上れり。○節筵の日卒

| | | | | |
|------|-----|-----|-------|-------|
| 路一〇一 | マテ | ルカ | 創世 | 路一〇五八 |
| 二〇五 | 一〇一 | 一〇一 | 七〇六十一 | 一〇七 |

て返往けるに其子イエスエルサレムに留りぬ然るにヨセフと母これを知らず
 同行人の中に在ならん意ひ一日程を行て親戚知音の者に尋しむ 四十五
 ざりければ彼を尋てエルサレムに返り 四十六
 中に坐し且聴かつ問ぬたり 問者みな其智慧と其應對とを奇とせり 四十八
 親これを見て駭き母がれに曰けるハ子何ぞ我儕より如此行たるや爾の父
 と我と愛て爾を尋たり 四十九
 を發へきを知らざる乎 然と爾親ハ其語る事を曉す 五十一
 リナザレに歸て彼等に循ひ居り其母これらの凡の事を心に藏ぬ 五十二
 智慧も益も増り神と人に益愛せられたり

第三節 テベリオカイザル在位の十五年ポンテオピラトハエダヤの方伯と
 なりヘロデハガリラヤの分封の君と爲り其兄弟ピリポハイツリア及テラ
 コニテの地の分封の君となりルサニアハアビレ子の分封の君と爲りニア
 シナスとカヤパ祭司の長と爲たりし時ザカリヤの子ヨハ子野に居て神の

ル 四十五
 ナ 四十六
 ナ 四十八
 ナ 四十九
 ナ 五十一
 ナ 五十二
 カ 四十五
 カ 四十六
 カ 四十七
 カ 四十八
 カ 四十九
 カ 五十

命令を受 ヨルダンの邊なる四方の地に來り罪の赦を得させんが爲に
 悔改のバプテスマを宣傳たり 四十一
 人の聲あり云く主の道を備その徑を直せよ 五十二
 夷られ風曲たるハ直く崎嶇ハ易せられ 六
 人有が如し 茲にバプテスマを受んきて來れる衆人にヨハ子曰けるハ嗚
 呼蝮蛇の裔よ誰が爾曹に來らんとする怒を避べき事を告しや 然と改
 に符る果を結べし爾曹心に我儕が先祖ニアブラハム有と意こと勿われ爾
 曹に告ん神ハ能この石ニアブラハムの子と爲しむべし 九
 に置く故に凡て善果を結ざる樹ハ伐れて火に投入らるも也 衆人ヨハ子
 に問て曰けるハ然ハ我儕何を爲べき乎 答て曰けるハ二の衣服を有る者
 ハ有ぬ者に分與よ食物を有る者も亦然すべし 十二
 きて來り曰けるハ師よ我儕ハ何を爲べきか 答て曰けるハ定例の税銀の
 外に多く取こと勿れ 兵卒も亦問て曰けるハ我儕ハ何を爲べきや答て曰

四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 六

ヨ 約一〇九至
二五
律 太三〇十一
二
二〇三五
六
六三三〇卅
オ 太四〇三至
五
卅六〇七至
ク 太三〇三至
一〇九至十
一
約一〇七至
十
ナ 太四三〇一
コフ 民四〇三
五
太三三〇五
約六〇四十二

けるハ人を強暴し或ハ誣訴るふを爲なかれ得ざるの給料を以て足り
さ爲べし〇 民領望し時なれば衆人みな心にヨハ子をキリストなるや否
さ付度たりしヨ ヨハ子之に答ひひけるハ我ハ水を以てバプテスマを爾
曹に施へり我より能力ある者きたらん我ハ其履帯を解にも足す彼の聖靈
さ火を以てバプテスマを爾曹に施はん 手ハ箕を持て其禾場を潔め
ハ敷て其糠にいれ殻ハ滅ざる火にて焼べし 日ハ子また多端を以て動
なし福音を民ニ宣傳たり さて分封の君なるヘロテその兄弟ピリポの妻
ヘロテヤの事および行ふ所の凡の悪事をヨハ子に責られければ 猶も惡
事を加へヨハ子を獄ニ囚たり 民みふバプテスマを受けるにイエスも亦
バプテスマを受けて祈るさき天ひらけ 聖靈鴿の如き狀にて其上に降ぬ又
天より聲あり云なんぢハ我愛子わが喜ぶ所の者なり〇 時にイエス年お
ほよそ三十にして福音を宣始む人々にヨセフの子と意れ給へりヨセフの
父ハヘリ 其父ハマツタテ其父ハレビ其父ハメルキ其父ハヤンナ其父ハ

エ 太一〇十二
ヨセフ 三五
ナムカイ 二六
ハユダ 二七
父ハ子リ 二八
父ハエル 二九
其父ハレビ 三〇
ハエリアキム 三一
ン其父ハダビデ 三三
モン其父ハナアソン 三三
父ハパレス其父ハユダ 三四
父ハテラ其父ハナコル 三五
ヘベル其父ハサラ 三六
ア其父ハラメク 三七
其父ハマトサラ其父ハエノク其父ハヤレド其父ハマレ

ヨセフ 三五 其父ハマタテヤ其父ハアモス其父ハナオム其父ハエスリ其父ハ
ナムカイ 二六 其父ハマアツ其父ハマタテヤ其父ハセメイ其父ハヨセフ其父
ハユダ 二七 其父ハヨハンナ其父ハレサ其父ハセルバベル其父ハシアテル其
父ハ子リ 二八 其父ハメルキ其父ハアツテ其父ハコサム其父ハエルモダム其
父ハエル 二九 其父ハヨセ其父ハエリエゼル其父ハヨオレム其父ハマツタテ
其父ハレビ 三〇 其父ハシメオン其父ハユダ其父ハヨセフ其父ハヨナン其父
ハエリアキム 三一 其父ハメレア其父ハマイナン其父ハマタツタ其父ハナタ
ン其父ハダビデ 三三 其父ハエツサイ其父ハオベデ其父ハホアズ其父ハサル
モン其父ハナアソン 三三 其父ハアミナダブ其父ハアラム其父ハエスロン其
父ハパレス其父ハユダ 三四 其父ハヤコブ其父ハイスラケ其父ハアブラハム其
父ハテラ其父ハナコル 三五 其父ハサルケ其父ハラガチ其父ハパレク其父ハ
ヘベル其父ハサラ 三六 其父ハカイナン其父ハアバザテ其父ハセム其父ハノ
ア其父ハラメク 三七 其父ハマトサラ其父ハエノク其父ハヤレド其父ハマレ

レエル其父ハカイナン其父ハエノス其父ハセツ其父ハアダムアダムハ即チ神の子なり

第十四節 借イエス聖靈に感されてヨルダンより歸り靈に導かれ野に過て

四十日悪魔を試らる此諸日なにも食す四十日畢てのち餓たり 悪魔ハ

れに曰けるハ爾もし神の子ならば此石に命じてパンを爲せよ 四 イエス答

けるハ人ハパンのみにて生る者に非ず唯神の凡の言に由る録されたり 五

悪魔また彼を高山に携ゆき一瞬間天下の萬國を示して 曰けるハ此す

べての權威と榮華を爾に予ん我これを委任たれど我が欲む者に之を予ふ

べし 故若わが前拜跪バ悉く爾の屬ならん 八 イエス答けるハサタ

ン我後に退け獨主たる爾の神に拜跪これのみ事べしと録されたり 九

悪魔またイエスをエルサレムに携ゆき聖殿の頂に立て曰けるハ爾もし神

の子ならば此より己が身を投よ その神その使者等に命じて爾を護せん

爾の足の石に觸ざるやう彼等手にて扶へしと録さる 十二 イエス答けるハ

| | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| カ | リ | ラ | ル | ス | シ | ト | ハ | ニ | ハ |
| 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 | 約四〇四三 至五十四六 |

主たる爾の神を試む可らずと云おけり 悪魔この誘試みな畢て暫く彼を離
り 十四 イエス聖靈の能を以てカリヤに歸しに其聲名あまねく四方の地
に廣がりぬ 斯て彼等が會堂にて教を爲すべての人々に榮を得たり 六
その長青し所なるナザレに來り常例の如く安息日に會堂に入て聖書を讀
んさて立ければ 預言者イザヤの書を予しに イエス其書を展て斯録れた
る所を見出せり 主の靈とれ在す故に貧者に福音を宣傳ん事を我に膏
を沃て任じ心の傷る者を醫し又四人に釋ん事と醫者に見させん事を示し
又壓制らるる者を縦ち 主の精年を宣播んが爲に我を遣せり 二十
書を捲その役者に予へて坐しければ會堂に在者みな目を注て視みせり 二二
イエス彼等に曰けるハ此録れたる事ハ今日なんぢらの前に應り 衆かれ
を稱讚その口より出る所の恩恵の言を奇み曰けるハ此ハヨセフの子に非
や 二三 イエス彼等に曰けるハ爾曹かならず我に謔を引て醫者みづからを醫
せ我儕が聞し所のカヘナウンにて行し事を自己の家郷なる此土にも行へ

六十三〇五十一
七〇四十四

五十七〇一
五〇一七
五十七〇九

五〇一
五〇一七
五十七〇九

五〇一
五〇一七
五十七〇九

五〇一
五〇一七
五十七〇九

五〇一
五〇一七
五十七〇九

しよ云ん 二四 また曰けるハ我まことニ爾曹に告ん 預言者その家郷にてハ敬
 重る者ハ非ず 三五 われ誠を以て爾曹に告ん エリヤの時三年と六ヶ月天と
 ぢて偏地おほいなる饑饉なりし其時イスラエルの中に多の饑ありしかぢ
 二六 エリヤハ其一人へだに遺されず只シドンなるサレバタの一人の墓に遺
 されたり 二七 また預言者エリシヤの時にイスラエルの中に多の瘡 者あり
 しかぢ其一人だに潔られず惟スリアのナーマンのみ潔られたり 會堂に
 在し者これを聞て大に憤ほり 起てイエスを邑の外に出し投下さんさて
 其邑の建たる山の崖にまで曳往り 然もイエス彼等の中を徑行て去ぬ 三一
 三二
 三三
 三四
 三五
 三六
 三七
 三八
 三九
 四〇
 四一
 四二
 四三
 四四
 四五
 四六
 四七
 四八
 四九
 五〇
 五一
 五二
 五三
 五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 六〇
 六一
 六二
 六三
 六四
 六五
 六六
 六七
 六八
 六九
 七〇
 七一
 七二
 七三
 七四
 七五
 七六
 七七
 七八
 七九
 八〇
 八一
 八二
 八三
 八四
 八五
 八六
 八七
 八八
 八九
 九〇
 九一
 九二
 九三
 九四
 九五
 九六
 九七
 九八
 九九
 一〇〇

六八〇十四至
一〇廿九至

一〇廿五至
一〇廿九

一〇廿五至
一〇廿九

一〇廿五至
一〇廿九

一〇廿五至
一〇廿九

一〇廿五至
一〇廿九

鬼つひに其人を衆の中へ作し傷すして出 衆人みな駭き互に語いひける
 ハ權威と能力を有て汚たる鬼に命ぜしハ出去り是いかなる道ぞや 是に於
 てイエスの聲名あまねく此四方の地に揚りぬ 〇 三六 イエス會堂を出てシモン
 の家に入しにシモンの妻母も熱病を患ひ居たりき 三九 衆人これが爲もイエス
 に求けれど其傍に立て熱を斥し熱退けり婦たち起て彼等に奉たり 四〇 日
 の入さき各様の病を患たる者をもてる人々みな其をイエスに携來けれど一々
 その上に手を按て醫せり 四一 惡鬼も亦多の人々を出さり喊叫て爾ハ神の子キリ
 ストなりと云り然に之を斥て言ふことを容さりき惡鬼そのキリストなるを識
 ぶなり 四二 一旦イエス出て人なき處に往けれど衆人尋 來て其離去を止む 四三
 イエス曰けるハ我また他の郷村にも神の國の福音を宣傳するを得ぞ蓋わ
 れ之が爲に遣さるれど也 四四 斯てガリラヤの諸會堂にて道を宣傳より
 衆人神の道を聽んさて擠擁ける時イエスゲ子サレの湖の濱に立て
 磯に二艘の舟あるを見る漁の者ハ舟を離て網を洗をれり 三一 其一艘ハシ

六十三〇二 モンの舟なりしがイエス之にのり請て岸より少許はふれ坐して舟中より
 衆人を教ふ 教 竟てシモンに曰けるハ澳へいで網を下して漁れ シモン
 答けるハ師よわれら終夜はたらきしかど所得なかりき然ど爾の言に従ひ
 て網を下さん 既に下して魚を圍ふこと甚だ多く網さけかまりければ
 いま一艘なる舟の侶を招きて來り助しめしに彼等が來し時その魚二艘の
 舟に物て洗んぞかりなりし シモンペテロ之を見てイエスの足下に俯て
 主よ我を離たまへ我ハ罪人なりと曰り 是シモンおよび僭に在し者みな
 流し所の魚の夥しきと駭ける也 シモンの侶なるセバダイの子ヤコブと
 ヨハ子も亦然りイエスシモンに曰けるハ懼るゝ勿れなんぢ今より人を獲
 べし 彼等舟を岸に寄おき一切を捨てイエスに従へり ○ イエスある邑
 に居しき身みまなく癩病を患る者ありイエスを見て俯伏しが曰け
 るハ主もし聖旨に背さざらば我を潔なし得べし イエス手を伸かれに按て
 我心よ背り潔なれと曰ければ直に癩病はたり イエス彼を戒めて曰け

六十三〇二
 六十三〇六七
 百四十四〇四
 四十二〇五六
 六六〇五

十一
 十一
 十一
 十一
 十一

二
 十
 十

十
 十

十
 十

十
 十

十
 十

十
 十

るハ人よ告るゝこと勿れたる往て己を祭司に示かつ潔られし爲にモイセが
 命ぜし如く獻物をなし證據を彼等に爲す 然どもイエスの聲名ますます
 揚りて許多の人々或ハ教を聽んとし或ハ病を醫れんとて集り來れり
 エス常に人なき處に退きて祈り給ひき ○ 一日イエス教を爲せる時マリ
 サイの人と數法師ガリラヤの諸郷ユダヤエルサレムより來て此に坐しぬ
 彼等の病を醫すべき主の能顯はれたり 或人癩瘋を患たる者を牀に載て
 昇來り之を家に入イエスの前に置んと欲ども 群集よて昇入べき方な
 りければ屋上に升り瓦を取除て其人を牀のまゝ衆人の中へ縮下しイエス
 の前に置り イエスその信あるを見て患者に人よ爾の罪赦さると曰けれ
 ば 學者さパリサイの人々心に思出けるハ此褻瀆をこを言者ハ誰ぞ神よ
 り外に誰か罪を赦すことを得ん イエスその意を知て答ひひけるハ何を
 爾曹心の中に論するや 爾の罪赦さるさいふと起て行と言と孰か易き
 それ人の子地にて罪をゆるすの權威あることを爾曹に知らせんとて遂に癩

十
 十

十
 十

十
 十

三六九〇九至十
三三〇三三至
十七

瘋の人よ我なんぢに告おきて牀をこり家に歸れと曰けれど三五その人衆の前にて直に起て臥居たる牀をこり神を崇て己が家歸ぬ衆人みな駭きて神を崇つ大に畏懼て曰けるハ我儕今日奇異なる事を見たり二七此後イエス出てレビと云る税吏の税關二九坐し居けるを見て我に従へと曰けれどレビ一切を捨て起て従へりレビ己の家にてイエスの爲に豐盛なる筵を設しに税吏また他の人々も共に筵坐したる者多かりけれど其所の學者とパリサイの人イエスの弟子三一怨言いひけるハ爾曹税吏また罪ある人々と共に飲食するハ何故ぞイエス答て曰けるハ康強なる者ハ醫者の助を需す惟病ある者ふれを需むわが來るハ憐人を召く爲に非ず耶ある人を召て悔改させんが爲ふり彼等イエス曰けるハヨハ子の弟子ハ屢斷食また祈禱をなすパリサイの弟子も亦然り然るに爾の弟子飲と食ふとを爲すハ何故ぞイエス曰けるハ新耶の朋友その新耶と一處に居間ハ之に斷食なさしむる事を得んや將來新耶と別る日いたらん其日に

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

ハ斷食すやきふり三六響を以て曰けるハ新衣を裁取て舊衣を補ふ者ありじ若然せば新衣なも壞ひ且新より取たる布ハ舊ものと合す三七酒を舊革袋に盛る者ありじ若まかせば新酒ハ其袋をはりさき漏出かつ革袋も壞るべし三八新酒ハ新革袋に盛べき者ぞ斯てふそ兩ながら存なれ三九舊酒を飲て立刻に新酒を飲者ハ有じ是舊ハ尤も好ま云バあり

第六章 逾越節の二日ののち首の安息日イエス夢の畑を徑行しに其弟子の穂を摘これを手にて擗くらひしかむ二〇或パリサイの人かれらに曰けるハ爾曹安息日に行まじき事を行ハ何故ぞイエス答て曰けるハダビテおよび從に在し者の穢しきき行たる事を未だ讀ざる乎即ち神の殿に入たと祭司の外ハ食まじき供物のパンを取て食かつ從に在し者にも予たり又曰けるハ人の子ハ安息日にも主たる也六また一の安息日にイエス會堂に入て教ふ此に右の手枯たる人ありければ學者とパリサイの人イエスこれを安息日に醫ならんかと窺ひぬ蓋かれを訴んさ欲バなりハイエス

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

二約三〇廿九
二約十三〇三三

その意を知て手なへたる人に起て中に立よと曰ければ其人おきて立り
 イエス曰けるハ我なんぢらも聞ん安息日に善を行き惡を行き又生を救ふ
 と殺と孰をわ行べき 遂に衆人を環視て其人に手を伸よと曰ければ彼そ
 の如せしに手すなはち愈て他の手の如くなれり 彼等大に怒て如何にイ
 エスを處んと互に議あへり○ 當時イエス祈禱の爲に山に往て終夜神に
 祈れり 夜明てイエス弟子を呼その中より十二人を選て之を使徒と稱く
 即ちペテロと名たまひしシモンその兄弟アンデレ及ヤコブとヨハネと
 リボとバルトロマイ マタイとトマスアルバイの子なるヤコブとセロテ
 と云るシモン 十六 ヤコブの兄弟のユダとイスカリオテのユダなり此ユダハ
 イエスを賣たる者なり 十七 イエスは等と共に下て平かなる地に立しに許多
 の弟子と夥しき人々ユダヤの四方まゝエルサレム及ツロシドンの海邊よ
 り來り集りて或ハ其教を聽んとし或ハ病を醫されん事を冀へり 十八 また惡鬼
 に難されざる者あり成く醫されたり 衆みふイエスに擲らんさせり是能

リヲ
 大十四〇廿六
 可五〇卅六
 路八〇卅六

ル
 大四〇七五
 可三〇七五

マ
 約一〇四十二
 徒一〇四十二

リ
 大十〇一三至四
 可三〇一三至四
 大十四〇廿三

チ
 大九〇四

力の其身より出で彼等を成く醫せども也○ 二十 イエス目を擧弟子を見て曰け
 るハ爾曹貧者ハ福なり神の國ハ即ち爾曹の所有なれども也 爾曹いま餓た
 る者ハ福あり飽こさを得べければなり爾曹いま哭者ハ福なり笑こさを得
 べければ也 三 人の子の爲に人なんぢらを憎また絶け置り爾曹の名を惡し
 として棄たむ爾曹福なり 其日にハ欣び踊れ爾曹天に於て賞賜大なれど
 也その先祖が預言者に行たりしも是の如し 爾曹富者ハ福なる哉すでに
 安樂を受バなり 爾曹飽者ハ福なるかな餓んすればなり爾曹いま笑者
 ハ福なるかな哀み哭んさ爲バなり 凡の人もなんぢらを容なむ爾曹福なる
 哉その先祖が偽の預言者を行たりしも是の如し 我に聽こころの爾曹に
 告ん其他を愛し爾曹を憎者を善し 証者を祝し 虐遇者の爲に祈禱せよ 二九
 人ふんぢの頰の右方を撃む亦左方の頰を向ふ爾の外服を奪む裏衣をも禁
 ざれ 凡て爾よ求む之よ與へ爾の物を奪ハ其をまた索る勿れ 三〇 己人に施
 れんとする事ハ亦人よも其如く施よ 三一 己を愛する者を愛するハ何の賞賜

カ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ロ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ウ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ム
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ナ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ニ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ノ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ハ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ヘ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ニ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

ノ
 大五〇三至十
 三六十一〇二

いひけるハ此事を求人ハ善人あり 我民を愛し我儕の爲に會堂を建たり
 六 イエス彼等と共に往て既其家に近けるとき百夫の長朋友を遣して
 曰せけるハ主よ自己を勞動こそ勿れ我が家裏に入奉るハ憚多し 故に我
 なんぢの前に出も亦憚あり第一言を發たまハ我僕ハ愈ん 蓋われ人の
 權威の下屬する者なるに我下に亦兵卒ありて此に往き命を往かれ來と
 命を來る我僕之を行き命を即ち行が故あり 九 イエス聞て之を奇み從
 る人々を願て曰けるハ我なんぢら告入イスラエルの中にても未だ斯る
 篤信に遇ざりき 十 遣されたる者家に歸て病たりし僕を見む已全快を
 なせり 十一 翌日イエスナインと云る邑に往けるハ許多の弟子および許多
 の人々も共往り 邑の門に近づきしとき昇出さるゝ死人あり其母ハ聲
 にて此ハ獨の子なり邑の人々多これに伴ふ 主接を見て憫み哭なかれと
 曰て 近より其柩に手を按けれと昇る者ども止れりイエス曰けるハ少者
 我なんぢに命おき 死たる者起て且言ひ始むイエス之を其母に予せ

約十一〇三三
 至十五
 約八〇五十四
 至一〇四十四
 往九〇四十四

イ 衆人みな懼て神を崇いひけるハ大なる預言者われらの中興る神そ
 の民を眷顧たまへり 十七 イエスの此聲名ユダヤの全國また徧く四方に揚り
 ぬ 十八 ヨハ子の弟子すべて是等の事を彼に告げれば 十九 ヨハ子二人の弟子
 を召て言遣しけるハ來るべき者ハ爾なるか亦われら他ハ俟べき乎 二十
 二人イエスに來り曰けるハバプテスマのヨハ子我儕を爾に遣して言しむ
 來るべき者ハ爾なるか亦われら他に俟べきか 二十一 此時イエス多の疾あるハ
 ハ病および惡鬼に憑たる者を醫し且おほくの聲を見ることを賜たり 二十二
 エス彼等と答曰けるハ爾曹が見ざる聞ざるをヨハ子に往て告ふ夫醫
 者ハ見跛者ハ行み癩者ハ潔り聾者ハきく死し者ハ復活され貧者ハ福音を
 聞せらる 凡そ我爲に暇さざる者ハ福なり 二十四 ヨハ子の使者さりし後イエ
 スヨハ子の事を衆人に曰けるハ何を見んとて野に出しや風に動さるゝ草
 なる乎 然ば爾曹ふを見んとて出しや美 服を衣たる人なるか 文 繡
 を衣て奢る者ハ王の宮に在 然ハ何を見んとて出しや預言者なるか 然わ

イ 約一〇六十五
 至一〇六十八
 約九〇九
 至一〇九
 約六〇九
 至一〇九

約十一〇三三
 至十五
 約八〇五十四
 至一〇四十四
 往九〇四十四

マ三〇一

 爾曹に告ん是預言者よりも卓越たる者なり 二七 それ爾より先ちて道を備る
 我使者を爾の前より遣ふと録されたるハ即ち此なり 二八 我なんぢらに告ん婦
 の生る者のうち未だバプテスマのヨハ子より大なる預言者ハ無されど神
 の國の至微者も彼よりハ大なる也 二九 ヨハ子に聞る庶民また税吏ハ其バプ
 テスマを受けて神を義とせり 三〇 パリサイの人また教師ハ其バプテスマを
 受す自ら暴ひて神の旨に背たり 三一 然る此代の人々を何に比へ又何に譬ん
 や 三二 童子市より坐し互に呼て我債償ふげども爾曹隨す悲歌をすれども爾曹
 哭すよ云に似たり 三三 蓋バプテスマのヨハ子來りてパンをも食す酒をも飲
 されど惡鬼に惡たる者なりと爾曹いへり 三四 人の子きたりて食ふ事をし飲
 こを爲すまた食を嗜み酒を好の人税吏罪ある人の友なりと爾曹いへり
三五 然る智慧ハ智慧の子に羨む爲らるる也 三六 或パリサイの人イエスを請て共
 に食せん事を願けれどイエスパリサイの人の家より入て食に就り 三七 邑の中
 に惡行を爲る婦ありけるがイエスがパリサイの人の家に坐せるを知て婦

マ三〇一
マ三〇二
マ三〇三
マ三〇四
マ三〇五
マ三〇六
マ三〇七
マ三〇八

マ三〇六

 石の盒に香膏を携來り 三八 イエスの後にたち足下に哭き涙にて其足を濡し
 首の髪をもて之を拭かつ其足に口を接また香膏を之に抹り 三九 イエスを請
 たるマリサイの人これを見て心の中より謂けるハ此人もし預言者ならバ抑し
 者ハ誰なる乎また如何なる婦なる乎を知ん此婦ハ惡行を爲る者なり 四〇 イ
 エス之より答て曰けるハシモン我なんぢに言事あり答けるハ師よ言たまへ
四一 イニス曰けるハ或債主に二人の負債人ありて一人ハ金五百一人ハ五十
 を負しに 四二 債方なかりければ債主この二人を免たり然バ二人の者その債
 主を愛するふと孰か多き我に聞せよ 四三 シモン答けるハ我おもふに免るる
 事の多き者ならんイエス曰けるハ爾が意こころ違さる也 四四 遂に婦を願み
 てシモンに曰けるハ此婦を見か我なんぢの家に入に爾ハ我足より水を給す
 此婦ハ涙よて我足を濡し首の髪をもて拭り 四五 爾ハ我に口を接す此婦ハ我
 ふくに久し時より我足より口を接て已す 四六 爾ハ我首より膏を抹す此婦ハ我足
 に香膏を抹り 四七 是故に我なんぢより言ん此婦の多の罪ハ赦れたり之より因て

マ三〇六
マ三〇七
マ三〇八
マ三〇九
マ三〇一〇
マ三〇一一
マ三〇一二
マ三〇一三
マ三〇一四

其愛も亦多なり故るこ少き者ハ其愛も亦少し 是に於て其婦に曰けるハ爾の罪故さる 同に坐せる者ども心の中に謂けるハ此人ハ是何人ふれど罪をも赦す乎 イエス婦に曰けるハ爾の信なんぢを救り安然にして往

此後イエス郷邑を周遊て神の國の福音を宣傳ふ十二の弟子も信に從ひぬ また前よ惡鬼を患たりし者病を痊れたる婦等も從ひたり即ち七の惡鬼を逐出れたるマгдаラと稱マリヤ 又ヘロデの家令リザの妻ヨハナ又スザナ此ほか多の婦ありて皆その所有を以てイエスに供事たりき 衆の人々諸邑より出てイエスの所に集りければ醫をもて曰り種まく者種を播んとて出ぬ播るとき路旁に遺し種あり踐踏られ且天空の鳥これを食へり また石上に遺し種あり前出て穢たり是潤なきが故なり また棘の中に遺し種あり棘も同に生長て之を蔽り また沃壤に遺し種あり生出て實を結べること百倍せり是を言畢て呼びけるハ耳ありて聽ゆる者ハ聽べし 其弟子とて曰けるハ是いかなる譬ぞ 答けるハ神の國

の奧義を爾曹にハ知れざるを賜と他の者にハ譬を以てす此ハ視ても見ず聽ても悟る爲なり 夫この譬の釋種ハ神の道なり 路の旁に遺しハ聽し後惡鬼の爲に其心より道を奪る者なり彼ハ人の信じて救れんことを恐る 石上に遺しハ聽とき喜びて道を受けども根ふれば信すること暫のみ患難に遇時ハ道に背く者なり 棘の中に遺しハ聽て往六の世の諸慮と貨財と宴樂とに蔽れて實さる者なり 沃壤に遺しハ正かつ善心にて道を聽ふれを守り忍て實を結ぶ者なり 燈を燃し器にて之を覆ひ或ハ床下におく者なし入來る者の其光を見ん爲に臺の上に置べし 隠て現れざる者なく藏て知れず露出さる者なし 是故に爾曹聽ことを慎め有る者ハなほ予られ無有者ハ有りと思ふ所の物をも奪るべし 此時イエスの母と兄弟きたりければ群集に因て近くこ能ざりしかハ 或人ふれをイエスよ告て曰けるハ爾が母と兄弟なんぢよ遇んさて外に立り イエス答て曰けるハ神の道を聽て之を行ふ者ハ乃ち我母わが兄弟なり 二三ある日イエス

弟^{三三}子と共に舟に登^{三三}て彼等に湖の^{三三}前岸へ渡^{三三}べしと曰^{三三}けれど即ち漕^{三三}出せり
 舟の走^{三三}る時イエス疑^{三三}たり颯^{三三}風湖^{三三}吹下^{三三}し舟に水^{三三}滿ん^{三三}として危^{三三}かりしかぞ
 弟^{三三}子きたりてイエスを醒^{三三}し曰^{三三}けるハ師^{三三}よ我^{三三}儂^{三三}亡^{三三}なんぞすイエス起^{三三}て風
 と浪^{三三}さを斥^{三三}めけれど止^{三三}て平穩^{三三}になりぬ イエス曰^{三三}けるハ爾^{三三}曹^{三三}の信^{三三}いづこ
 に在^{三三}や彼等^{三三}駭^{三三}き且^{三三}奇^{三三}みて互^{三三}に曰^{三三}けるハ此^{三三}ハ何^{三三}人^{三三}なるぞや風^{三三}と水^{三三}とに命^{三三}ぞ
 しかぞ亦^{三三}順^{三三}へり 斯^{三三}てガリラヤ^{三三}に對^{三三}るガダラ^{三三}人の地^{三三}に着^{三三}て 岸^{三三}に登^{三三}し時
 ある一人^{三三}邑^{三三}より出^{三三}てイエスに遇^{三三}この者^{三三}ハ久^{三三}く惡^{三三}鬼^{三三}に恐^{三三}れ衣^{三三}をきす家^{三三}に住
 す惟^{三三}塚^{三三}にのみ居^{三三}たりき イエスを見て喊^{三三}叫^{三三}その前^{三三}に俯^{三三}伏^{三三}し大聲^{三三}よ呼^{三三}りけ
 るハ至上^{三三}神^{三三}の子^{三三}イエスよ我^{三三}んち^{三三}と何^{三三}の與^{三三}あらんや爾^{三三}に求^{三三}むれを苦^{三三}むる
 ふと勿^{三三}れ 此^{三三}の惡^{三三}鬼^{三三}に人^{三三}より出^{三三}よとイエスが命^{三三}じたるに因^{三三}てなり彼の恐^{三三}れ
 たる事^{三三}すでに久^{三三}し健^{三三}また柱^{三三}楛^{三三}にて繫^{三三}守^{三三}じも其^{三三}を打^{三三}碎^{三三}き惡^{三三}鬼^{三三}の爲^{三三}に野^{三三}に逐^{三三}ぬ
 三十一 イエス之^{三三}に問^{三三}て曰^{三三}けるハ爾^{三三}が名^{三三}ハ何^{三三}と稱^{三三}や答^{三三}けるハレギヨ^{三三}ン是^{三三}おほく
 の惡^{三三}鬼^{三三}の入^{三三}たるが故^{三三}なり 惡^{三三}鬼^{三三}イエスに求^{三三}けるハ命^{三三}じて底^{三三}なき所^{三三}に往^{三三}し

太八〇廿八至
九〇一
一五〇一至

太九〇二
三〇三

二 勿^{三三}れ 此^{三三}に多^{三三}の豕^{三三}の群^{三三}山^{三三}に草^{三三}を食^{三三}むたりしが彼等^{三三}その豕^{三三}に入^{三三}んふと
 を許^{三三}せと求^{三三}ければ之^{三三}を許^{三三}せり 惡^{三三}鬼^{三三}その人^{三三}より出^{三三}て豕^{三三}に入^{三三}しかば其^{三三}群^{三三}ハ
 げしく馳^{三三}下^{三三}り山^{三三}坡^{三三}より湖^{三三}に落^{三三}て溺^{三三}る 牧^{三三}者^{三三}ども其^{三三}有^{三三}し事^{三三}を見て逃^{三三}ゆき之^{三三}
 を邑^{三三}また諸^{三三}村^{三三}に告^{三三}たり 衆^{三三}人^{三三}その有^{三三}し事^{三三}を見^{三三}んとて出^{三三}てイエスの所^{三三}に來^{三三}
 れバ惡^{三三}鬼^{三三}の離^{三三}れし人^{三三}衣^{三三}を着^{三三}たしかある心^{三三}にてイエスの足^{三三}下^{三三}よ坐^{三三}せるを見
 て懼^{三三}あへり 惡^{三三}鬼^{三三}も恐^{三三}れたりし人の救^{三三}れし狀^{三三}を見^{三三}たる者^{三三}この事^{三三}を彼等^{三三}に
 告^{三三}けれど ガダラ^{三三}四方^{三三}の多^{三三}の衆^{三三}庶^{三三}イエスに此^{三三}を去^{三三}んことを求^{三三}り是^{三三}大^{三三}懼^{三三}
 しが故^{三三}なりイエス舟^{三三}に登^{三三}て返^{三三}ぬ 惡^{三三}鬼^{三三}の離^{三三}たる人^{三三}イエスと共に居^{三三}んこと
 を求^{三三}けるにイエス之^{三三}を去^{三三}しめて 家^{三三}にかへり神^{三三}の爾^{三三}に行^{三三}し大^{三三}なる事^{三三}を人
 告^{三三}ふと曰^{三三}ければ遂^{三三}に去^{三三}てイエスの己^{三三}に行^{三三}たまひし大^{三三}なる事^{三三}を遍^{三三}邑^{三三}に傳
 たり 四十 イエス返^{三三}たるとき衆^{三三}人^{三三}みな佇^{三三}望^{三三}て之^{三三}を喜^{三三}び接^{三三}ふ 四十一 イエス云^{三三}
 人^{三三}あり此^{三三}ハ會^{三三}堂^{三三}の宰^{三三}ふり年^{三三}おほよそ十二^{三三}歳^{三三}なる一人^{三三}の女^{三三}ありて積^{三三}死^{三三}なり
 けれど來^{三三}イエスの足^{三三}下に伏^{三三}て我家^{三三}來^{三三}り給^{三三}んことを求^{三三}りイエスの往^{三三}さき

太九〇十八至
廿六〇廿二至
四十三

太九〇十八至
廿六〇廿二至
四十三

衆人これに擁あへり 婦あり十二年血漏を患ひ醫者の爲に其業を盡く耗しけれど誰にも痊れ得ざりしが イエスの後に來て其衣の裾に觸れれば直に血の漏こさ止ぬ イエス曰けるハ我に觸る者ハ誰ぞヤ衆人ハみな特に觸れる者なし曰りテロおよび僂に在者ども曰けるハ師よ衆人なごに擁擠せまるに我に觸る者ハ誰ぞと曰たまふ乎 イエス曰けるハ我に觸る者あり能力の我身より出るを覺れむ也 その婦みづから隠せぬを知をのき來て前より伏さばりし故に其たごちに愈たるとを衆人の前に告イエス曰けるハ女よ心安かれ爾の信ふんぢを救へり安然として往ける言る時に會堂の宰の家より人きたりて宰に曰けるハ爾が女ハや死たり師を勞ハす勿れ イエス之をきき答て宰曰けるハ懼るゝ勿たれ信ぜよ女ハ痊べし イエス家に入にベテロヤコブヨハ子および女の父母の外たれにも僂よ入こを許さざりき 衆人みふ女の爲に悲哀しかバ イエス曰けるハ哭ふかれ死たるに非ず歎たる耳 彼等その死たるを知バ之を笑へり

イエス人々を告いだして女の手をとり女起よき呼曰ければ 其魂ハへりて忽ち起ざり イエス命じて食を予しかバ 父母ハ駭異ぬ イエスハ行しこを人に告るを戒め給へり

第九章 イエス十二の弟子を召集め凡の悪鬼を出し病を醫す能力と權威を賜たり 又神の國を宣傳へ病者を醫せん爲に 彼等を遣さんとして曰けるハ路資に何をも携され杖また旅 糧 金二の衣をも帶ふさ勿 何の家に入さも其處に居りて亦其處より去 爾曹を不接者あらバ其邑を出る時かれらに證のため足より塵を拂へ 弟子いでて徧く諸郷にゆき福音を宣傳かつ病を醫せり 分封の君ヘロテイエスの行し諸事を聞て惑り或人ハ之をヨハ子の魅れるなりと言 ある人ハエリヤの現れたる也といひ又ある人ハ古の預言者の一人魅れる也と言むなり へロテ曰けるハ我ヨハ子の首を斬り斯る事の聞ゆる者ハ誰なるかへロテ之を見んご欲ふ 使徒たち歸來りて其行しこをイエスに告イエス彼等を携ひて港にベツ

サイダと云る邑の邊なる野に退きしに 衆人まりて従ければ之を接て神の國の事を語りつ醫を求る者を醫せり○ 日戻くとき十二の弟子きたりてイエスに曰けるハ此ハ野なれば衆人を去せ四圍の鄉村へゆきて宿をさり食を覓る事を爲たまへ イエス曰けるハ爾曹これに食を予へよ答けるハ我儕たゞ五のパンと二の魚ある耳六の許多の人の爲に往て買ふ非ざれば別は食物ハなし 此に居し男おほよそ五千人なりきイエス弟子に曰けるハ衆人を五十人づゝ列べ坐せしめよ 弟子その如く行て彼等をみな坐せしめたり イエス五のパンと二の魚をとり天を仰ぎ祝して之をわり弟子に予て衆の前に陳しむ みな食飽て餘の屑を十二の筐に拾たり○ イエス衆の在ざりしとき祈禱またりしが弟子も偕に居りイエス之よ問て曰けると衆人ハ我を言て誰と爲か 答て曰けるハバプテスマのヨハ子或ハエリヤ或ハ古の預言者の一人の甦れる也と イエス曰けるハ爾曹ハ我を言て誰と爲かペテロ答けるハ神のキリストなり イエス彼等を戒めて此

イ 太十六〇十三
可八〇廿七至
可八〇廿七至

事は何人にも告る勿れと命じたり 又曰けるハ人の子かならず多くの苦を受て長老祭司の長學者どもに棄られ且殺され第三日に甦るべし 又イエス衆人に曰けるハ若われに従んそ欲ふ者ハ己に克て日々その十字架を負て我に従へ 其の生命を保全せんそ欲者ハ之を喪ひ我ために生命を喪ふ者ハ之を保全すべし 人もし全世界を利するとも自己を喪ひ自ら亡ぶむ何の益あらん乎 我と我道を耻する者をバ人の子も亦おのが榮光と父と聖使の榮光をもて來る時ふれを耻べし われ誠に爾曹に告ん此に立者の中に神の國を見までハ死ざる者あり○ 此事を言けるのち八日ばかり過てイエスペテロヨハ子ヤコブを携ひ祈禱せんとして山に登れり 祈れる時に其顔の貌つれと異り其衣服まろく輝きぬ 二人の人ありて之と言へり 即ちモーセとエリヤなり榮光の中に現れて イエスのエルサレムにて既

ホ 太十〇廿三
提後三〇十二

ハ 太十七〇一至
可九〇三至九

ト 出廿四〇廿九
至卅五

チ 但八〇十八
十〇九

が已に醒てイエスの榮光また偕に立る二人を見たり 此の二人のイエス